

戦姫絶唱シンフォギア 転生をしたらアダムになっていた＼(^o^)
／オワタ

機械天使

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故で死んでしまった男、彼が目を覚ました姿を見て驚いてしまう。彼はアダム・ヴァイスハウプトに憑依転生をしてしまった。

このままでは死亡をしようと考えた彼は奮闘をすることにした。

これはアダムに憑依転生をした男性の物語。

目次

僕の名前はアダム。転生者だよ	1
アダムと少女の出会い。	5
サンジェルマン錬金術を学ぶ。	14
アダムたちと詐欺師との出会い。	19
アダムとイザークと少女	28
やっと原作まで来たぜ。	34
キャラ紹介	39
爆発をする研究所	44
アダムたち遺跡探索へ	52
解析されたもの	56
移動基地完成 日本へGO!!	60
現れたノイズ	63
2課との会合	67
フィーネの計画	71
クリスを探せ。	77
アダムの休み	83
覚醒の時	91
アダム再び月に	99
襲い掛かるネフシュタンの鎧を着た人物。	103
遺跡再び	107
デュランダル護衛	109
アダムは（ <input checked="" type="checkbox"/> ω <input checked="" type="checkbox"/> ）スヤア	115
響正体を明かす	119
アダムたちこっそりと終わらせることにした	123

世界の歌姫	128
アダム対FIS装者	134
黒いノイズ。	141
ギャラルホルンからやってきた装者たち。	148
アダムの決断。	151
決戦。	155
あんたを止めることができるのはこの僕だ!!	161
アダムの退屈な一日。	168
暴れる謎のロボット	172
目を覚ました女性	176
そういえば名前を聞いていなかったの巻。	183
アクルスの襲来	186
次元……ええ?	189
ワープをするアダムたち。	193
迫ってきた敵。	197
レグリオス軍団の謎	201
レグリオス基地を探せ。	207
レグリオス基地に突撃。	210
アダム対レグリオス	214
襲撃をする王国。	221
アダムとレグリオス	226
次元戦艦完成	233
復活の闇	237
会合	241
ネフィリムとゴ・ガメゴ・レ	246

僕の名前はアダム。転生者だよ

???
side

「……………え?」

目を覚ました僕は声が三木眞一郎ボイスに驚いていた。その理由が鏡を見てすぐにわかってしまった。

「アダム・ヴァイスハウプト……………」

そう僕はアダムに憑依転生をしてしまったみたいだ。どうしてこうなった? 神さまが転生をしてやるといわれてこのシンフォギア世界へと転生をした。特典は錬金術などが使える体って言ったからかな? それで選ばれたのがアダムって……………まずいまずいこのままだとシンフォギアA X Zで殺されるじゃねーか!!

「冗談じゃない。この世界で二度も死んでたまるか。とりあえず僕が今できることはここから脱走をすることだ。おそらく僕はこのままいけば廃棄処分を受けてしまう。ならその前にここを出ればいいさ。よし出ようそうしよう。」

とりあえずまずはティキを作ることにしよう。彼女を作ったのはアダムだからね。えっとまずはどうしようかなパーツなどはあったからね。まずは戦闘力などを考えるとやはり武器などは装備させておくべきだね。

「彼女の拳などにエネルギー波が出せる装置などを作っておくか。ついでに手が武器に変わるように。色々改造をしておくでしょう。」

それから数時間の時間でティキが完成をした。さすがアダムの体だ。元々天才的な頭脳があったから簡単に作ることができた。

「とりあえず起動つと。」

僕はスイッチを押すと彼女の目が光りだして起き上がる。

「あなたは?」

「始めまして僕の名前はアダム。君のマスターと言っておくよ。」

「マスター?」

「そう君の名前はティキだ。」

「テイキ認証しました。」

彼女は立ちあがり僕たちは脱出をするために移動の開始をする。創造主が送りだしてきた敵が僕たちに襲い掛かる。

「であ!!」

頭部のシルクハットを投げつけて創造主が送りだした兵器を破壊する。テイキは両手の装甲を展開してガトリングを放ち撃破する。戦闘力はすごいなと思いつつ僕たちは脱出をした。

さて脱出をしたのはいいがここは地球なのか?てか物語が始まるまですつごく暇な気がするな。

そして見えるのは青き地球……つまり僕が作られた場所は月ということになる。あーちなみにシンフォギアXVまで見ている。

とりあえず地球に避難をすることにした僕たちは転移石を割って適当な場所へと降りたつた。

「まず必要なことは僕の力がどれだけ使えるかだね。まずは火だ。」

手に集中をすることで火が発生をした。それから水や氷、風や雷に石などが発生をしたので僕はかなりの錬金術を使えるみたいと判明をした。さらには治療能力なども錬金術で使えるのも傷ついていた動物を治して判明をした。

まずは僕たちの家が必要だね。錬金術を応用をした方法で僕たちが過ごせる拠点が完成をした。

「すごいですねマスター。」

「ああ待てよ……錬金術ならあれが出来るとはいいかな?」

そう僕がもう一つ好きなものがあつた。それは仮面ライダーオーズに出てきたグリードたちだ。彼らのデザインなどが好きでメダルなどを集めていたのを思い出したよ。

とりあえず早速メダルのデザインなどはタカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バツタ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、シャチ、ウナギ、タコのコアメダルを作りだしてから五体分の欲望エネルギーを使って意識を生み出していく。

セルメダルも同じように生成をして作っていき色々やってから10日間で完成をした。といつてもどうせ始まるまで時間があるか

らしいんだけどね？

9枚作っておいて彼らの体を生成をするために一応コブラ、カメ、ワニのメダルにプテラ、トリケラ、テイラノのメダルも作っておいた。これらは一応念のために持っておくことにした。

ついでに僕の戦闘力不足を解消させるためにオーズドライバーも作っておいた。まあ一応僕って化け物の姿が本来の姿だから力などを使うわけにはいかないからね。そのためにオーズドライバーなどを作っている。

メダルは実は10枚作っているが後の一枚は変身用に残しているわけ。さーて早速彼らの体を生成をしてグリードの誕生させるとしよう。

テイキは僕の傍で彼らの誕生を見守っている。欲望などが動いていきセルメダルが彼らの体を構成をしていき五体の完全体のグリードが完成をした。

「……………ここは？」

「僕たちは誰だい？」

「目を覚ましたみたいだね。」

「誰だ!!」

アंक達が見て僕の方を見て構えているが、戦うつもりはないので立ちあがる。

「僕の名前はアダム、君達を作り上げた人物さ。」

「じゃああなたが私たちを？」

「そういうことになるね。さて君達に名前を与えないといけないね。まずは赤い君はアंकだ。」

「アंक……………」

「緑の君がウヴァ。」

「ウヴァ……………」

「黄色い君がカザリ。」

「カザリね。」

「そして灰色の君がガメル。」

「俺の名前ガメル!!」

「そして水色の君はメズールだ。」

「メズールいい名前じゃない。」

グリードの名前をつけて僕は安心をする。まさか本物じゃないけど彼らと話をしたので僕的には満足だ。

さてとりあえずここがどの時代か調べないといけないね。錬金術を使ってとりあえずまずすることは一つ……

「ご飯を食べようか。」

「「「はあ……」」」

こうして僕は憑依転生をしてアダム・ヴァイスハウプトになり替わった。別に僕は創造主に復讐をすることは考えていない。

生み出してくれたことには感謝をしているからね。ならこの世界をどう変えていこうか考えるだけだよ。

アダムと少女の出会い。

アダム side

グリードたちが誕生をして数週間が立ち、彼らも人間態を得ることができたので街へと出ていた。

「これが人間が作った街か……」

「そうだね。ここまで作るのにどれくらいかかったことか……ね。」

「マスターなら錬金術を使えばあつという間にできますけどね？」

テイキは素晴らしいながら笑っているが、やはり容姿などを幼く作ったのではなく大人のような姿をしているから性格が違うような気がする。

彼女はオートスコアラーたちのようにご飯を食べてエネルギーをとっている。キャロルが作ったようなものでは確かにエネルギーが必要いらなけれど思い出を吸収をしないといけないのが欠点だからね。

それにテイキは人間のようにその……作ってしまった結果できるんだよね……子どもが。僕が見ていたリリカルなのは出てきた戦闘機人みたいな感じにテイキを作ったからだ。

容姿はギンガ・ナカジマ、性格は……誰だろうか？まあそれはいいか。僕たちは街を歩いていると一人の男性の足にしがみ付いている女の子がいた。

「お願いです!!お母様を助けてください!!」

「うるさい奴隷の娘が……」

「きゃ!!」

おそらく父親である人物に助けを求めているが奴隷という単語が聞こえたな。彼女は奴隷の人から生まれた人になる。

「アダム俺あいつ許せない。」

「駄目だガメル。」

「どうして止める。あいつ悪いガメルブツ飛ばしてやる。」

「馬鹿考えろ。こんなところであの姿をさらすつもりかよ。」

「そうしたら僕たちここにこれなくなるよ？」

「うう……ガメルそれは嫌だ。」

「すまないガメル、だが君の気持ちは私も同じだからね。」

彼女の父親だって言うのに助けようとしなない男に僕は怒りを感じていた。奴が去ったのを見て僕は女の子に声をかける。

アダム side 終了

??? side

「ううう……」

お父様は見捨てた。母様と私を奴隷である母を助ける気がないというのか……なら私はどうして生まれてきたの？母様に愛されてるのにどうしてお父様は……このままじゃお母様が死んでしまう。どうしたら……

「どうしたんだいお嬢さん。」

「え？」

私は振り返るとシルクハットでいいのかなそれをかぶった男の人と青い髪をした女の人が二人に、金髪の髪をした男性が二人。黒い髪をした人が二人がわたしに声をかけてきた。

「すまない。君のことを少し見ていたんだ。困っている様子だったので見過ごせなくてね……力を貸すことができるかもしれないよ。」

もうお父様は信用できない。なら私は……

「お願いです!!お母様を助けてください!!ずっと苦しんでいるんです!!」

「苦しんでいるだって、それは困った。とりあえず君の家に案内をしてくれないか？」

「こっちです!!」

私はその人たちを私が住んでいる家に連れていく。母様が助かるなら私の命だって捧げてあげる!!

??? side 終了

アダムたちは少女に連れられて彼女が住んでいる家に連れてこられた。だがその家はボロボロの状態でベットに眠っている女性の姿

をみてアダムはさらに目を見開いてしまう。

(なんてことだ、奴隷だけでこんな生活を……)

「サン……その人たちは？」

「お母様を治してくれる方々です!!」

「始めまして、まずはお手を出してくれませんか？」

アダムはだされた右手を持ち彼女の中を透視する。彼は透視をやめると錬金術を使う決意をする。

「今から君のお母さんを治してあげるさ。まあ見ていなさい。」

彼は母親の胸元らへんに手を出すとそこから光が発生をして彼女の体の中にある病原体を消滅させるための錬金術を発動させた。アーク達はその様子を見ている。

数分後アダムの手から発生させていた光が消えると彼は立ちあがり彼女に振り返る。

「お母様は……」

「もう大丈夫。今は眠っているだけだから後は暖かいごはんなどを食べさせればいい。」

「ありがとうございます!!」

「さてメズールとテイキ、悪いけど君達は食材を買ってきてほしい。」

「わかりました。」

「任せなさい。」

二人が出ていったのを確認をしてアダムは彼女達の様子を見るとカザリが声をかけてきた。

「アダム、君の様子など今夜父親と呼んでいた人物をどうする気だい？」

「ああもちろん倒すだけだ。お金と服を奪いにね……」

「なら僕たちも参加させてもらえないかい？あいつのしていたのを見ていると怒りがでてきてね。」

「ああそのとおりだ。」

「俺、やる!!あいつ許せない!!」

「下らん、だがあいつを倒すって言うなら協力をしてやる。」

「ありがとう君たち。さてお嬢ちゃんは どうして服を脱ごうとしてい

るのかなやめなさい。」

「アダムは服を脱ごうとしている女の子を止めた。」

「え？御奉公をするって聞いておりますが……」

「いや僕は助けたいとおもったからね。君の母親を思う心が僕を動かした。そういうえば名前を聞いていなかったね僕はアダム。アダム・ヴァイスハウプトって言うんだ。」

「サンジェルマン……お母様からはサンと呼ばれています。」

「サンジェルマン……」

アダムは驚いた。ここで原作で登場をしたキャラクターと出会うことができるとは、前世の記憶を思いだしていた。サンジェルマンが奴隷の子どもとして生まれて幼いころに母親を亡くしたことを……

(ということは今僕がしたことって原作ブレイクってやつ?)

彼は苦笑いをしながら話しているとメズール達が帰ってきた。

「ただいま。」

「食材などを購入しました。」

「ご苦労さま、さてサンちゃんこれから僕たちはご飯を作るが一緒に作るかい?」

「ごはん?」

「ああ皆で食べるととても暖かいんだ。さて早速作るとしようか。」

「作る!!」

アダムは錬金術で皿やフォークやナイフ、スプーンなどを創成をした。サンジェルマンはアダムが使ったのに目を光らせていた。

「アダムおじちゃん!!今のなに!!」

「今のかい?これは錬金術といってね。今だしたのは全部錬金術で作ったものなんだ。」

「すごい!!」

「さーて皆できたわよー!!」

メズールの声に全員がアダムが作った机やいすに座ると声が聞こえてきた。

「うーん。」

「お母様!!」

サンジェルマンは母のところへ行きアダムもついていく。彼女は起き上がり自分の体を見ていた。

「嘘、先ほどまで苦しかったものがなくなっている。どうして?」

「それはアダムおじちゃんが治してくれたんだよ!!」

「まあ、奴隷である私を治してくれたのですか?ありがとうございます。す。」

「気にしないでくれ、僕は奴隷だろうが困っている人を見捨ておけなくてね……。それにあなたが助かったのはサンちゃんのおかげですよ。彼女の母を助けたいという思いが僕に届いたとだけ言うておきますよ。」

アダムはそう笑いご飯ができていますよといい一緒に机がある場所へ連れていく。

「まあ食事やいすなども……。申し訳ありません……。お客様にそこまでしてもらうなんて……。」

「いや気にしないでくれ、俺達はやりたいと思っただけです。」

「あなたは先ほどまで病人ですからきにしないでください。」

ウヴァとカザリがいい、全員が首を縦に振り座る。

「では。手を合わせて。」

サンジェルマンと母親は一体何をしているのかなと見ている。アダムは説明をしてサンジェルマンとお母さんも一緒に手を合わせる。

「いただきます。」

「いただきます。」

アダムたちはご飯を食べる。サンジェルマンたちも初めてフォークなどを使った感じなのでアダムは丁寧に教える。

彼女はアダムの顔を見て顔を赤くしているのをティキたちは見逃していなかった。

(これはマスターは気づくでしょうかね?)

(さあどうかしら?)

メズール達はニヤニヤしてアダムとサンジェルマンの様子を見て

いる。彼女達はアダムが作った錬金術で作ったお風呂に入っていた。

「いい湯!!」

「どうかな?サンちゃん。」

「すごい錬金術って!!」

彼女はアダムが作ったお風呂に目を光らせていた、アダムはなんでもか一緒に入りましょうといわれたので一緒にお風呂に入ってから体を洗ったりしてサンジェルマンたちが眠ったのを確認をした。

「テイキ、サンちゃんたちは?」

「はいぐっすりと眠っています。」

「でどうするんだ?」

「ああもちろん……」

彼は大剣を出していた。その剣はウルトラマンオーブが使っている武器オーブカリバーだ。

彼は錬金術の火、氷や水、風、雷と地面の力を大剣に錬金術で作ったオーブカリバーが完成をしたのがこの武器だ。

「さて行くとしょうか?貴族でダラダラしている奴らを懲らしめるためにね。」

アダムはハットをかぶりアंक達もそれについていく。

アダム side

皆が寝静まった夜、僕たちはサンちゃんの父親がいると思われる屋敷に到着をした。実はあの後彼に発信機みたいなものをつけていたので場所はすぐにわかった。

こうして寝静まった夜を狙ったのも護衛兵たちがいるのを考えているからだ。

「さて始めようか。」

僕の言葉にウヴァたちは元の姿に戻りアंकが右手から炎の火球を放ち扉を破壊して突撃をする。

「何だお前たちは!!」

「遅いよ?」

ガザリが高速で移動をしてその爪で相手を切り裂いた。メズールは液体状になり相手の首を触手で絞め殺す。

「くらうがいい!!」

ウヴァは右手の鎌で切つていきガメルは剛腕で相手を二人つかんで壁にめり込ませて殺害した。

「この化け物が!!」

「遅いです。」

テイキは右手を剣に変えて首を切断させて切断された場所から血が噴水のようにあふれてくる。

「ひい!!なんだよこいつら!!」

「勝てるわけがないよ!!」

逃げだそうとしている人物にアंकが右手から火球を出してそれらが燃えていくのをアダムは見ていた。

「愚かだね……勝てそうにないのに挑むなんてね。さて僕も戦うとしようか。」

彼は頭部にかぶっているシルクハットを投げると迫ってきた人物たちに命中させて彼は振り返り帰ってきたシルクハットをかぶる。

「お前たちは終わっているよ。3, 2, 1」

ぱちんと指を鳴らすと首が次々に落ちていき亡くなった胴体はそのまま倒れていく。アダムはそれを見ながら先に進むことにした。

「さて進むとしよう元凶がこの先に待っているからね。」

彼はオーブカリバーを持ち大きな扉を切り裂いた。

「何だお前たちは!!」

「いやーどうも奴隷を好き放題にしている貴族を倒しに来たんですよ。悪いけど今の僕は機嫌が悪いんでね……」

僕は右手を上空に構える。大きな火球を作りだす。カザリとテイキには彼らの奴隷たちを逃がすようにとお金を確保しておくように指示をしている。

「さて貴様何が目的だ!!お金か女か!!どれも好きに持つていくといひぞ!!」

「ツチ」

僕は舌打ちをしてしまう。自分の命がなくなると命乞いをする貴族の姿を見て許せなくなつたから殺すことにした。

「僕が一番嫌いなのを教えてやるよ。それは……自分よりも他人を大事にしないような人間は大嫌いなんだよ!!消えてなくなれええええええええええええ!!」

大きな火球を作っていたのを投げつけて僕はその貴族を焼き尽くす姿を見る。

「熱い!!熱い!!いいいいいい!!ぎゃああ!!」

燃えてなくなった相手を見て僕たちは屋敷から脱出をする。ガザリたちも人間態になり脱出させたみたいだ。

さてこれでこの街に来ることはないだろうね。サンちゃんはここで幸せになるとは思えないけど僕とかかわることはないだろうね。彼女の家のまえにお金などを置いていき僕たちは自分たちの屋敷に戻ろうとした。

「さて行くと「待って!!おじさん!!」ん?」

僕たちは屋敷に戻ろうとしたときサンちゃんが走ってきた。

「サンちゃん?」

振り返りサンちゃんが来たので膝をついた。サンちゃんは全速力で走ってきたのか疲れていたがすぐに僕の顔を見た。

「お願い!!私を連れて行って!!」

「え?」

「私はアダムおじちゃんがいなかったらお母様は死んでいた。だから……」

「サンちゃん、僕たちについていくってことはお母さんに会えなくなることになるんだよ?それでもいいのかい?」

そう彼女が僕たちについていくってことは母親のところには帰れなくなるということだ。それは彼女はわかっているのか……

「母様とはお話をしました!!母は許可をしてくれました。私おじちゃんの方にお願い!!お願いします。連れて行ってください!!」

「……」

彼女の真剣なまなざしを見て僕は考え直してテキキたちを見る。

彼女達はあなたに任せるといふ感じだったので僕は答えを出す。

「わかったよサンちゃん。今日から僕たちは家族だいいね？」

「はい!!」

サンちゃんは笑顔で僕の手を握ってきた。本編だと仲が悪いけど僕はそんなことさせないさ。

転移石を使い僕たちは屋敷の方へ帰ってきた。僕は扉の鍵でドアを開けた。

「お、お邪魔します。」

「サンジェルマン、お邪魔しますじゃない。」

「え？」

「「「おかえり。」」」

「ただいま!!」

こうして僕たちの家に新しい住人が加わった。

サンジエルマン錬金術を学ぶ。

アダムside

サンちゃんがこの家に来てから数週間が立った。この家に来た次の日彼女は僕に錬金術を教えてほしいといってきた。最初は困ったけど彼女の真剣なまなざしに負けて教えることにしたが彼女は天才かもしれない。

本編でも錬金術は使っていたから覚えるのが得意なんだと思いつつも四つの属性に慣れることから始めさせてみたが……

「おじちゃんできたよおおおおお!!」

「マスターすごいですね。」

「ああ僕も驚いているよ。」

現在サンちゃんは右手に火球をだして的に当てる練習をしているが火球を見事にコントロールができていたので驚くばかりだ。

グリードたちも彼女の成長に驚いている。

「なあガザリ、確かサンジエルマンってここにきて数週間だろ?」

「確かね。けどアダムから学んだとはいえあそこまで錬金術をうまく活用できるなんて思ってもいないよ……」

「すごいサンジエルマン天才。」

「ええ本当に天才ね。」

「だな。それよりもアダム!!アイスクリームよこせ!!」

「アイスをかい?」

氷の錬金術で作ってから味付けなどをして完成をしたアイスクリームをアंकは気にいったのかこうしてアイスクリームを請求するようになった。

まあ貯蔵庫に何十本か保存しているからまた作ればいいかな?でもサンちゃんはどうしてそこまで錬金術を学ぼうとしているのかな?

それが不思議なんだよね。

アダムside終了

サンジエルマンside

「ふう……」

特訓を終えた私はアダムおじちゃんが用意をしてくれた部屋に戻ってから本を読んでいた。これに書かれているのは肉体を永久的な状態にするものが書いてある。

おじちゃんはおそらく長い間ずっとあの姿を保っている。おそらく私はよぼよぼなおばあさんになってもあの姿だ。

だから私はこの本を読み今の体じゃなくて大きくなった体で固定をしておじさんとうふふをするんだ。

「おじさんといつでも一緒うふふふふ。」

だからおじさんに錬金術を学んでいるんだ!!私のお母様を救ってくれたアダムおじちゃん。アダムおじちゃんを守るためなら私は人だつて殺せる。

「よ……」

私が出したのは錬金術で作った武器だ。まだおじさんにも見せていない銃剣つてやつかな? 弾丸なども錬金術で作って炎の弾、氷の弾、電気の弾、風の弾などを作っている。

「でもこれを使うには今の体じゃなーはやく大きくなりたーい!!」

そしておじさんに似合う女に私はなる!!

サンジェルマン side 終了

サンジェルマンがそんなことをしている時アダムはオーズドライブバーを装着をして三枚のメダルをセットをしてオーズスキャナーを通していた。

「変身。」

【タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バタバ!タ・ト・バ!】

オーズタトバコンボに変身をしてメダジャリバーの変わりにオーブカリバーを手に振るっていた。この間の戦いでは錬金術で相手を燃やし尽くしたのでオーズに変身をしていないなと思いきや変身をした。

「悪く無いね。」

彼はオーズの出力などを調整をしながら変身を解除。メズールとガメルがいた。

「あらアダム。」

「アダムだー！ーねえおかし頂戴。」

「はいはい。ほら飴ちゃんだ。」

「わーい（*・▽・*）ガメル嬉しい!!俺アダム好きだ!!」

「ありがとうガメル。メズールも感謝をするよ料理などを作ってくれて。」

「気にしないで当然のことをしているから。」

三人で話しをしているとリビングではウヴァとガザリとアंकがトランプをしていた。ちなみにこれはアダムが紙を生成をしてから作り上げたトランプである。

「はい上がり。」

「な!!」

「ほらアंक次はお前だぞ。」

「ち!!ウヴァのくせに調子乗りやがって……」

どうやらババ抜きをしておりガザリが上がり、現在はウヴァ対アंकの戦いをしている。

アंकはウヴァの持っている二枚を見ていた。どちらかがジョーカーなので彼はあたりを引きたいのだ。

そして運命が動く。

「こつちだ!!」

アंकの運命はいかに。彼はそのままカードをみてニヤリと笑いテーブルにカードを置く。

「俺の勝ちだウヴァ。」

「がああああああああああああああああああああああ!!」

結果はアंकの勝ちでウヴァがビリで終了をしたみたいだ。アダムも彼らを見て楽しそうであったと思ひ見ているとサンジェルマンが走ってきた。

「おじさー！ーん。」

「やあサンちゃんそろそろお昼ご飯にしようか。ティキが今作っているみたいだ。いい匂いがしてきたぞ?」

全員が手を洗ったりしてから椅子に座っているとティキがご飯を持ってきた。

「お待たせしました。」

「待つていたよティキ、さあ皆がそろったことで……手を合わせよう。」

パンと全員が手を合わせる。

「いただきます。」

「いただきます。」

今回ティキが作ったのは和食のため箸が用意されていた。アダムは前世は日本人のため箸を使うのは簡単だがほかのメンバーなどは箸などは初めてのため苦労をしていた。特にサンジェルマンは一番に苦戦をしていた。

「うううえい!!えい!!」

つかもうとしてもスカツと抜けてしまい転がっているのを見てティキがサポートをすることにした。

「サンジェルマンさん、箸は……」

っと丁寧に教えているのでサンジェルマンも理解していく。

「こう?」

「はい、それでつかんでみてください。」

彼女は教えてくれた通りに箸を使いおかずを取り口に運ぶ。

「おいしい!!」

「喜んでくれてよかったです。」

「ありがとうティキ、いつもご飯を作ってくれて。」

「いいえマスター、これも私の使命ですから。」

ティキはお辞儀をして一緒にご飯を食べる。アダムは考えていた。ティキ一人でこの屋敷内は不利だなと……だが今の状況ではオートスコアラーを作ることではできないので断念をする。

(ティキのパーツなどもあつちで作ったからね……錬金術で作ってもそこまでは再現することはできない。そういえば……どこかにそういうのがあるような場所があればいいんだけどな。)

アダムはティキのことを考えて戦闘機人がいそうな場所はないかなーと思いつながらこの時代じゃ無理か……と考える。それにサンジェルマンのこともあり彼はゆつくりと彼女が年をとっていく

姿を見るしかない自分が情けないと思う。

アダム side

さて彼女を引き取ってから数十年が立った。あれ？なんでそこまですたっているかって………簡単だよ。普通に生活をしていたからだよ。

彼女の体も大きくなりその………胸が大きくなっているんだよ。それでも………

「おじぎーん一緒に風呂はいろいろ!!」

「ぶふ!!」

僕はお茶を飲んでいたが吹きだしてしまふ。サンちゃんはいつまでたつても甘えん坊だなと思つてしまふ。

おかしいな………僕の育て方を間違えてしまったのかな？サンちゃんは体は大きくなつて成長をしたと思つたがなんだか知らないが甘えん坊になつてゐる気がする。気のせいだと思いたい。

「サンちゃん………さすがにそろそろまづい気が………」

「駄目？」

彼女は上目遣いをしてきた。僕もこれには勝てず。

「わかつたよ一緒に入ろうか？」

「わーい。」

彼女と一緒に風呂に入つてしまふ。お風呂に関してはサンちゃん特製のお風呂を使わせてもらつてゐる。もちろんグリードたちも入ることがある。

ちなみにサンちゃんはアंक達が怪物だつてことは知つてゐるみたいだ。彼らが姿を戻しても驚かないのでびつくりをしてゐる。

だからこそ僕はまだ自分の正体を明かしてゐない。いずれは明かすつもりだけどまだいいかなと思ひながらもサンちゃんと一緒にお風呂に入る。

アダムたちと詐欺師との出会い。

アダム side

僕はテイキと一緒にある場所に向かっていた。

「マスター本当にその人を信用をするのですか？」

「まあね。彼を仲間に加えられたら僕的には助かるかなと思ってね。」

そして彼がいるであろう場所へ到着をしてノックをする。

コンコン

『はい。』

「あなたの手紙を受け取りましたアダムです。開けてもらってもよろしいですか？」

『ああドアは空いてるから入ってくれ。』

ドアを開いて僕は中へ入る。そこには眼鏡をかけた男性が座っていた。彼はこつちに座るように指示をして僕たちは座る。

「やあすまない。こちらから呼んでおいて……」

「気にしていないさ。テイキを一目で人造人間と見抜いたあなたは研究をしてる感じですね？」

「まあね。だがそれを作りだした君の技術は素晴らしいばかりだよ。

それに錬金術か……。私が今まで研究してきたのよりも驚くばかりだ。」

「それで何が言いたいんだい？」

「あーすまない、つい君のような人私は待っていたかもしれない。それに今の世の中で私のような人は生きずらいのでね……」

「そういうことか。なら僕たちのところへ来ないかい？まあ性別なども変わってしまうが……。もちろん研究施設なども用意させてもらうよ。」

「ほうそれはいいかもしれない。なら今すぐに荷物などをまとめさせてもらうよ。」

彼は大慌てで準備をして僕はサンちゃんに連絡をする。

「サンちゃんこちらアダムどうぞ。」

『おじさま、こちらサンです。実はこちらでも男の人を拾ったのです』

が……傷だらけでなんとか治療をしたのです。』

「ああそういうことか、サンちゃん確か君は男性の体を女性の体にするのが得意だよな？ならある人物を女性に変えてくれないかい？」
『わかりました。とりあえずおじさまを待つておりますので。』

「わかったよ。それじゃあ。」

僕は作りだした電話を消して彼の準備が終わるのを待つことにした。テイキも彼が作ったであろうものを見ていた。

「すごいですね。」

「ああ僕も驚いている。錬金術で作ったりするがこうして作るのはないからね。テイキを作って以降は何もしてないからね。」

僕たちは話をしていて彼が準備を終えたのか現れた。

「待たせたね!!さあ行くでしょう!!」

「ああ……ではこっちに。」

僕は転移石を割り屋敷に到着をした。とりあえずまずはサンちゃんが助けたという人物と会うとしよう。

リビングに行くときアंक達がいいた。どうやら彼は目を覚ましてキョロキョロしていた。

「ここは……」

「目を覚ましたみたいだね。ここは僕たちが住んでいる屋敷だよ。君はボロボロだったところを彼女達に助けてあげたんだよ。」

「……ありがとうよ。」

「いったいどうしたんだい？」

僕は彼に話しかけると彼は話し始めた。彼は貧困な家族に生まれた。家は貧乏でこの時代はお金持ちは偉そうにしている時代……彼らは貧困な中暮らしをしており彼は詐欺などをしておかねを奪っていたそうだ。

だがそれがばれてボゴボゴにされて裏路地で何とか生き延びようとしているところをサンちゃんたちが助けたことになる。

「なるほど……君はこれからどうするんだい？」

「また詐欺をして暮らすしかねえよ……俺には家族はもういないし……」

「なら僕たちと一緒に暮らすってのはどうだい？ただし前の生活のようにはいかないかもしれないけどね。」

「……………どういうことだ？」

「君の性別などを変えるってことだよ。あの街では君が詐欺師だったことがばれている。なら性別などを変えてここで暮らせばいい。」

「……………いいのか俺は……………」

「ああいいとも。」

「お願いします。」

「決定だね。サンちゃん……………」

「はいおじさま、もう一人の人も同時に行いますので数時間お待ちください。」

「わかったよ。」

サンちゃんは研究科な人と詐欺師だった男を連れてこれから錬金術で色々とするらしい、なおサンちゃんは今のつまり本編と同じ姿になってからは錬金術などを使って体を完全な状態にして悠久な命を得ていたことに僕は驚いている。

「なあアダム。」

「なんだい？」

「サンジェルマンってやっぱり天才だよな？」

「それに関しては僕も同意見だよウヴァ、彼女の錬金術は今じゃ僕を超えていると言っておくよ。まあ戦闘に関してはまだまだって感じだけどね？それに今彼女は僕が見つけた賢者の石を使って何かを作っている感じだったしね？」

おそらく本編で使ったファウストローブのことだろうね。確かあれはサンジェルマンが作ったことは前世で見っていたので知っていた。

まあ僕はそこまで気にすることはないからいいけどね？昼ご飯となりサンジェルマンは部屋に閉じこもっている。おそらく二人も同じように悠久な命を得た完全な体に作り替えているところだね。

「あの二人どんな姿になるのか楽しみ。」

「まあサンちゃんが考えているからどんな容姿になるのかは楽しみだけどね？」

「ふんくだらん。そんなことどうでもいいだろ？」

「アंक、あなたね……これから一緒に暮らしていくのにどうしてあなたはいつもそういう態度をとるのよ。」

「ああ？元から俺はこうだ。」

メズール達が喧嘩をしているのを見てやれやれと思いつつもおそろくあの二人はカリオストロとプレラーティになるんだろうなと思いつつティキが入れてくれたお茶を飲む。彼女は目を光らせると上空に恒星などが映りだす。本編でティキがしていたようにこのティキも同じことができるようにしている。

僕は見えないときは彼女を使って夜空を見ることにしている。サンちゃんもこれが好きでよく一緒に見ていたね。

それから数分後。

「お待たせしましたおじさま。」

「やあサンちゃん。どうやら終わったみたいだね？」

「ええ二人ともいいですよ？」

「失礼するわよー」

「失礼するワケダ。」

声が出たので僕たちはドアの方を見るとうん原作通りカリオストロとプレラーティになっていた。彼女達は女性の体になっていることに驚いていた。

「すごいわねー女性の体ってあーしも驚いているわ。」

「ああ錬金術でここまでできるなんて思ってもいなかったワケダ。サンジェルマンのすごさは驚くばかりなワケダ。」

二人は驚いている中僕はサンちゃんのところに行き彼女の頭を撫でていた。

「すごいじゃないかサンちゃん、これは僕も驚くばかりだよ。」

「そんな私がこうして錬金術をこうして学べたのもおじさまやティキさん、それにアंकさん達がいたからです。」

「僕たちは何もしていないけどね？けどありがとう。」

「そうねこれは嬉しいことよ。」

「サンジェルマンが喜んでる。ガメルも嬉しい!!」

「ああそうだな。」

「ふん。おいアダム!!アイスよこせ!!」

「やれやれ、君はアイスが本当に好きだね……ほら。」
「ふん。」

アंकはアイスクリームが本当に好きだなど思いながら原作通りにメンバーはそろってきたね。

サンちゃんはファウストロープの方はまだ完成をしていないが錬金術は使えるってことで僕たちはある城へとやってきた。

ここの城は悪名が高い国王で僕たちは彼を退治するためにやってきた。ウヴァ達も本来の姿に戻っており僕はオーズドライバーを着してメダルを装填していく。

オーズスキヤナーを持ち装填する。

「変身。」

【タカ!トラ!バッター!タ・ト・バ タトバ!タ・ト・バ!】

オーズに変身をして前進をしていく、国王たちの兵士が僕たちに武器を向けていた。

「あらあら私たちに武器を向けてるわねー。」

「そうだな。おじさま……」

「心配することはない君達はここで待っているといい。テイキ彼女達の護衛頼んだよ?」

「了解しました。」

そう錬金術を使えるとはいえまだサンちゃんたちは完全に戦えるわけじゃないがついて行きたいといってきたので連れてきた。

僕はバッタレッグで上空へとびオーブカリバーを構えて兵士たちに攻撃をする。兵士たちはこちらに魔法をぶつけようとしたがその前に僕はカリバーのエレメントを回転させて風のエレメントを発動させる。

「タイフーンカリバー!!」

風を纏わせたオーブカリバーを振るい巨大な竜巻が兵士たちを巻き上げていく。オーブカリバーをしまい僕はウヴァのメダルに変えてオーズスキヤナーを装填させる。

「クワガター！カマキリ！バッタ！ガータガタキリバガタキリバ。」
オーズガタキリバコンボへと姿を変えて僕は叫ぶと分身たちが発
生をした。8体分だ。

「「「「今日は特別!!」」」」」

僕自身はタトバのメダルに変えてほかはコンボメダルをセットを
していく。

「クワガター！カマキリ！バッタ！ガータガタキリバガタキリバ！」

「ライオン！トラ！チーター！ラタラターラトラーター！」

「サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ サゴーズ！」

「シャチ！ウナギ！タコ！シャシャシャウタ シャシャシャウタ！」

「タカ！クジャク！コンドル！タージャードール！」

「プテラ！トリケラ！テイラノ！プットテイラーノザウルース！」

「コブラ！カメ！ワニ！ブラカーワニ！」

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ タトバ！タ・ト・バ！」

8人のコンボのオーズが誕生をして構える。

「なんだあれは!!」

さあ地獄のパーティーの始まりだよ？

アダムside終了

ガタキリバコンボのオーズはウヴァと共にカマキリソードを使い
兵士たちを切っていく。ウヴァは雷を使うとガタキリバも頭部のク
ワガタヘッドから雷を発生させて兵士たちを次々に殺していく。

「せいやああああああ!!」

ラトラーターコンボはカザリと共にチーターレッグで高速で移動
をしてトラクローで切り裂いていく。兵士たちも突然として血が噴
出をして倒れていく姿を見て驚いている。

「なんだ!?!どこから攻撃が!!」

「遅いよ?」

カザリの爪が兵士の体を貫いて血が噴出する。

一方で空ではアंकとタジャドルコンボのオーズが飛んでいた。
兵士たちは弓を使い彼らに攻撃をするが二人は回避をしてアंकは
右手からオーズは左手のタジャスピナーのから炎を発射させて兵士

たちに攻撃をする。

「ぐああああああああああああああああああ。」

「熱い!!ぎゃああああああああああああああああ!!」

「ふん。」

「アंक行くぞ?」

「ああ!!くらいやがれ!!」

「せいやああああああああ!!」

二人は羽型のエネルギーを発生させて兵士たち全員が命中をして絶命する。一方でサゴーズコンボとガメルの二人は剛腕で兵士たちに攻撃をする。

「であああああああ!!」

「遅い。」

ガメルは槍をつかんでそのまま引つ張り殴り飛ばして殺害をした。オーズはドラミングをして重力を発生させて兵士たちは突然として上空に上げられてガメルは左手の二連キャノン砲を構えて追撃。

オーズはサゴーズコンボでオーズカリバーを持ち岩のエレメントを発動させる。

「ロックカリバー。」

地面に突き刺してたくさんの岩が発生をして兵士たちに命中して絶命させていく。一方でシャウタコンボとメズールは液状化して兵士たちを窒息させていた。

「ぐ、ぐるじい。」

「た、助けで!!」

「無駄よ。私とオーズの力が合わさっているからあなたたちが今までしたことを後悔したまま死んでいくといいわ?」

シャウタコンボは向かってくる兵士たちに頭部から強力な水流を発生させて兵士たちを吹き飛ばす。さらにオーズカリバーを持ち水のエレメントを発動させる。

「アイスカリバー!!」

地面に突き刺して氷が地面を走っていき兵士たちが次々に凍らされていく、オーズは近づいて蹴りを入れると凍った兵士たちは粉々に

砕けていく。

プトティラコンボとブラカワニコンボのオーズはというと。攻撃をブラカワニコンボのオーズが受け止めてプトティラのオーズは尻尾を出して兵士たちを次々に吹き飛ばしていく。

「さあ蛇の怒りを受けるがいい。」

ブラカワニオーズは笛を吹くと頭部のコブラが動きだして兵士たちを次々にかみついで猛毒を注入していく。

「スキヤニングチャージ!!」

「ふん!!」

頭部のプトティラヘッドの翼が羽ばたいた冷気が兵士たちに命中をし、次々に凍らせて両手のトリケラガンダレクスから光の爪で貫いていきそれを上空へ上げていき尻尾のテイルデイバイダーで叩きつけて粉々にさせた。

「やったな?」

「まだ攻撃をしてくるぞ?」

「え?」

ブラカワニは前を向くと兵士たちはじりじりと槍を構えていた。はあとため息を出してプトティラのオーズに声をかける。

「どうする?」

「俺が決めるさ。」

彼は地面を殴りメダガブリューを出してセルメダルを創成をしてメダガブリューに装填させる。

ブラカワニコンボのオーズはオーブカリバーを構えて炎のエレメントを発動させる。

【ゴックン! プットーティラーノヒッターツ!】

「インフェルノカリバー!!」

二人が放った砲撃などが兵士たちに命中をして吹き飛んでいく中タトバコンボのアダムは国王がいると思われる場所に到着をしてオーブカリバーを振り下ろして扉を切り裂いた。

「貴様!!」

「やあどうも国王さま、悪いけど君が今までしたことははつきりと

知っているんだよね？あんたが集めたお金で彼らのために使わずに自分の欲望のためにね。そんなこと誰が許すのかな？許すわけないよね。だから僕が君の人生にジ・エンドを送らせてもらうよ。」

タトバオーズは右手に火・水・風・雷のエレメントを発動させてそれを上空へと止めていつでも国王を殺せる準備をしていたがもうすでに彼は殺す気でいたので容赦ない攻撃を放った。

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!」

こうして一つの国はメダルを使った戦士と怪物によって滅ぼされたと書かれることになるがこのことをアダムたちは知らないのであつた。

彼らは街を救いし英雄と呼ばれることになるとは思つてもいなかった。彼らは城にあつたお金などを住民たちに配り黙って去つたからだ。

アダム side

やれやれ……ガタキリバコンボからの全コンボは僕の体に負担が大きいみたいだ。今僕はベッドの上に寝転がっていた。

今回の戦いでオーズの力は強大だつても判明をしているしオーブカリバーや錬金術なども使用することができるとも判明をしている。

さてどうするかな……時代的にまだまだシンフォギア原作まで時間がありまくっている。その間に作っておくでしょうか？

パヴァリア光明結社をね。長い歴史の中裏で暗躍をしていくとして……知っている名前が出てきたら助けていくのが僕たちの使命としていくようにね。

そして僕たちは新たな組織『パヴァリア光明結社』を作った。もちろん錬金術師たちを集めていくさ。

けど本編みたいなきことをせずに人助けをするためにね？

アダムとイザークと少女

アダム side

パヴェリア総社を作った僕はサンちゃんやカリオストロとプレーティにアंक達を入れてさらに色んな所の錬金術師たちも加えた組織へと発展をしていた。ちなみに組織は兵器などを提供はせず貧困な国の住民たちに服や食料なども提供をしていく。それが僕の組織のやり方となる。

ちなみに時期的にいつぐらいになるのかって言うはまだ原作が始まるまでかなりかかるみたいだ。それでもこの組織ができてからだいぶ経っている。

「失礼しますアダムさま。」

「どうしたんだいカテリア。」

彼女はカテリアと呼ばれる錬金術師の一人で現在は大幹部となったサンちゃんたちが変わって僕の秘書をしてきている。テイキも秘書の一人だ。

「はい実はある錬金術師の話を聞きまして……………」

「ある錬金術師？ふむ僕も少し調べてみないといけないようだな……………それでカテリアその錬金術師はどこにいるのかわかっているのかい？」

「ええ一応になりますが……………名前なども判明をしておりますこちらです。」

彼女が渡してくれた資料を確認を僕はする。そこにいたのはイザークと書かれている錬金術師の名前だ。

そう僕は彼こそキャロルの父親で間違いないとなら急いで接触をしないとイケないかもしれないね。彼が火刑される前に助けるだけさ。

「わかった。カテリア悪いけど留守を任せてもいいかい？」

「アダムさま？」

「本人に直接僕が会いに行くのさ、サンジェルマンたちには無理をしないように指示を頼む。ここまで組織が大きくなったのも彼女達の

協力があつてこそだからね。」

僕はシルクハットをかぶり部屋を出て彼がいるであろう場所に向かおうとしたときアंकがいた。

「おうアダムどこに行く気だ？」

「なーにある人物をスカウトしに行こうとしている。」

「俺も行くぜ。ここにいっても退屈なだけだ。」

「いいよ。とりあえず転移石を使って移動をしようか。」

僕とアंकは転移石を使いパヴェリア結社本部から彼がいるであろう場所の近くに転移をした。そこは自然がたくさんある場所に到着をした。

確かに錬金術を使うにはいいところだ。ん？

「アंक何か騒がしくないかい？」

「奇遇だな俺も聞こえているぜ。」

僕たちは村があるのを見つけて隠れて様子を見ることにした。一人の男性が張りつけにされているのを見つける。

あれはもしやイザークさんではないか？そしてその近くで泣いているのはキャロルと呼ばれる少女で間違いない。

「アंकは怪物体になって彼らを殺さない程度に牽制をしてくれないかい？その間に僕は彼らを助ける。」

「ちい、だが帰ってからアイスをやこせ!!」

「アイスでいいならね。」

アंकは念じると怪人態に変わっていき空を飛んで行った。さて僕も動くのでしょうか？

アダムside終了

キャロルside

「パパ!!パパああああああああああ!!」

村人たちにパパが火刑にされようとしていた。パパの力に恐れれた人たちによってパパは張りつけにされて炎をつけられようとしていた。

「これより異端者の処刑を行う!!火を放て!!」

村長がパパに火を放とうとしたとき何かが降ってきた。赤い羽根

？私は上を見ていると赤い鳥のような人が火をつけようとしている人を蹴り飛ばした。

「化け物!？」

「なんだあれは!!」

村人たちは突然として現れた怪物に攻撃をしているが、怪物は人を殺さない程度なのか蹴りを入れて気絶させていく中、パパに向かつて走っていく男性の人がいた。

「であ!!」

頭部にかぶっていたのを投げてパパが張りつけられている木を倒した。その人は私の方を向いてこちらに来るようにと手で合図をしたので私は走ってパパがいる場所へ行く。

「しつかりつかまっていなさい。」

その人に言われてパパと私は地面に叩きつけた石から魔法陣が発生をしたのを見た。赤い怪物の人もこちらに来て一緒に転移をした。

私とパパはどこに移動をしたのかわからなかった。どこかの家みたいな場所に転移をしたみたいだけど……

「おかえりなさいませマスター。」

「テキタだいま。さて改めて大丈夫ですか?」

「ええあなたはいったい?」

「僕はアダム・ヴァイスハウプトです。これでも錬金術師をやっているものです。」

「ほほうあなたも錬金術師を……とりあえずこちらも自己紹介をします。私はイザーク・マールス・ディーンハイムといいます。こちらは娘の……」

「キャロル・マールス・ディーンハイムです。」

「はは元気そうな娘さんで。もしかして家事も彼女が?」

「ははは残念なことで私は家事などが苦手です。キャロルに任せてしまふんですよ。まあこちらは錬金術に集中できますけどね?」

パパは苦笑いながらアダムさんとお話をしている中、私はテキキさんを見ていた。彼女は普通の人と違う感じがしていた。

「どうしました?」

「いやティキさんって普通のひと何か違うなと思ひまして。」

「ふふ正解ですよ。私は自動人形と呼ばれる存在です。」

「すごいなーティキさんはアダムさんが作つてもらつたといつていた。アダムさんはパパと同じようにすごい人なんだなと思つた。」

「それで私を助けてくれたのですが……ほかの人たちももしかして……」

「ええ処刑されようとされてた人たちを集めたのがこの組織ですね。裏から貧困な国の人たちに食料や服を提供をしたりしてますね。それでイザークさんも研究などもここで過ごされたらどうですか？」

「……確かに素晴らしいことです。ですがキャロルは……」

「それに関しては問題ありません。あなたたちの生活はこちらから出させてもらいますよ。」

「そこまでしてもらうなんて……」

アダムさんは首を横に振り気にしないでくれといつていたのでパパはここに入ることになった。私はティキさんに案内されてパパと過ごす部屋に案内された。

「ここがイザークさんとキャロルちゃんのお部屋になります。」

「わざわざすみません。」

「いいえこれもマスターが用意してくださつたお部屋なので何か不自由なことがありましたらお呼びください。では失礼します。」

ティキお姉さんはさういつて去つていく。パパはふうと座つていた。

「パパ大丈夫？」

「ああ正直言つてアダムさんがいなかったら今頃僕は火刑されてたかもしれないからね。まあ助かつたと言える奇跡だよ。」

「奇跡……」

アダムさんには本当にありがとうといわないといけないな。

キャロル side 終了

現在アダムはある場所にやつてきていた。プレラーティがある場所を見つけたつてことのでやつてきたのだ。

そこには人形と思われるものがたくさんあつた。アダムはふむう

と思い人形が倒れている場所に歩いている。

「おじ……じゃなかった局長いかがしました？」

「あ、いや……これは間違いなく古代に使われていた人形だね。僕が名付けるとしたらオートスコアラーと言っておくかな。けどこれはおそらく何かの影響で機能停止をしている状態だ。プレラーティよく見つけたね。」

「なーにここは昔から調査をしていたが錬金術があったおかげで探すことができたワケダ。」

「でもでもなんだかいっぱいあるわね。」

彼女の言う通りたくさんの人形と思われるものがあり、アダムもふむーと考えてこれらを持って帰ることにした。

「でもアダムこれを持って帰ってどうするの？」

「ああティキの姉妹でも作ろうと思っている。ティキに関してはプロトタイプの一体をサンジェルマンがいた完全な体に作り替えたんだけど……この姉妹たちも同じようにしようかなと思っっているんだ。」

「なるほどそれならエネルギーなども食料で活動ができるワケダ。」

「ああプレラーティは一体ほど解析に回したいという目をしているけどまあいいよ。」

「ありがたいなワケダ。」

転移石を使い人形を回収をした。三体はティキの姉妹を作るためにアダムが自身の部屋に運んで行き、一体はプレラーティが研究用に持っていきほかは倉庫の方にしまっておくことにした。

アダムside

さてティキの姉妹を作ることにしたが、とりあえずまずは人形という部分を排除しておくかな？そこからティキの姉妹たちを作っていくこうとするか。

外見はどうしようかな？ティキをベースに作っていくとしようかな顔なども構成させていこう。

「……こうして作ったのはティキを初めて作った以来だな……ティキも僕のために頑張ってくれている。彼女とはグリードたちよ

りも前からの付き合いだ。創成者から脱出をする時の相棒だからね。」

転生をして最初はアダムになってしまったのはショックだったけど今はこうして長年暮らしていると慣れてしまった。

憑依転生みたいなものだけとおそらく最初からアダムという人格はなかったんだ。そこに僕が入りこんで今のアダムができたことになるね。本来のアダムは錬金術もできずに全裸になってしまうほどの高火力の黄金錬金を発動させたりする人物だけだね。サンジェルマンたちを平気で捨て駒にしたりするキャラクターだ。

けど僕は違う。彼女達は大事な仲間だ。捨て駒にするなんて言語道断。それに僕自身は創生者に復讐をするつもりはないからね……だからこそ僕はひっそりと彼女達や仲間たちと共に暮らしていきたいと思ってる。

さてまずはキャロルちゃんやイザークさん達の体も完全なものにしないとイケないな。すでにここに住んでいる錬金術を使う者たちはサンちゃんによつて完全な体になっているが………なんでか女性ばかりになっているんだよね。カテリアも元は男性だったが現在は女性になっている。

サンちゃんに聞いたら彼らが自ら望んだことだと言っていたな。いったい何があったんだ彼らは………まあそれでも男性のままがいいっていう人物もいたので助かっている。

女子だらけだったら僕とイザークさんが持たない気がしたからだ。主に下半身が………さて三体のオートスコアラীদের体を女性の体にすることに成功をして今は容姿などや武器などもつけ与えている状態だ。

けど僕は色々やり過ぎたのか眠くなってしまう眠ることにした。「ふああああ………武器などはテイキとおんなじでいいかな？腕部などが変形させていくがそれぞれで戦闘の仕方が違うようにね………」

彼女達は起動させていないのでそのまま立っている状態のまま僕は眠りにつくことにした。(☒ ☒) スヤア

やつと原作まで来たぜ。

アダム side

やあ僕の名前はアダム・ヴァイスハウプトに憑依転生をした男性だ。いやー原作までにかなりの時をかけてきた。

「アダム……終わったぜ？」

「ご苦労さま。サナエにアイカにレイ。」

彼女達は数百年前に改良をしたオートスコアラアの三体たちだ。緑髪のサナエにピンク髪のアイカ、そして黒い髪をしているレイの三人だ。

彼女達は起動後はすぐにテイキの指導のを受けており僕の仕事の手伝いをしてもらっている。

そういえば現在キャロルちゃんもオートスコアラアを作っておりサンちゃん同様に大人の姿に変身をしている。

「これはアダムさまごきげんよう。」

「やあフアラ、キャロルちゃんはこの中かい？」

「はい。」

「じゃあ入らせてもらおうよ。」

僕はフアラの許可を得て彼女の部屋に入る。彼女は椅子に座っており何かを調べているところだ。

「ふーむあーでこーで……」

「キャロルちゃん何をしているのかな？」

「うわ!! アダムおじさんいきなり人の部屋に入ってこないですよ。」

「ごめんごめん、フアラから許可を得て入ったんだけどね。これって聖遺物かい？」

「といっても欠片なんだけどね。ダウルダブラと呼ばれる聖遺物ですね。今これをファーストローブ風にしようと改良をしているんですよ。サンジェルマンたちのようにね。」

そうサンちゃんたちはすでにファーストローブを完成をしており僕も実は協力をしている。彼女達が使っているファーストローブは原作と同様でサンちゃんはひそかに作っていた銃剣、カリオストロは

指輪のエネルギー弾、プレラーティはけん玉である。

ずっと思っていたがなぜけん玉なんだろうかと……なら僕はコマを使おうかなんてね（笑）

さて話を戻して僕はキャロルちゃんの部屋から出てある場所に一人で来ていた。それはある研究所だ。そこである実験が行られると聞いてね。それをぶつ潰す為にやってきた。

ここにいるのはシンフォギアXDで登場をしたジャンヌがいるであろう研究所だ。実は僕のところにはFISのナスターシャさんがやってきたことがあった。僕は一応そこに挨拶を言ったこともあるしそこでマリアちゃんたちにも出会っている。

僕は錬金術を使いぬいぐるみを作ったりしてあげたことがある。その中にいたのだよジャンヌちゃんと妹のメイちゃんがね。幼い二人がマリアたちと離れてここの研究所で実験にされようとしていると聞いてね。時間がかかってしまったが大丈夫だね。

さあ突入をしようじゃないか。さあ地獄のパーティータイムだ。
アダムside終了

研究所では完全聖遺物アルゴスの目を使った実験を子どもたちによつて行われていた。だが誰も適合者がおらずついにジャンヌたちに迫ろうとしたとき。突然として研究所が揺れだした。

「何事だ!!」

「何かが入入をします!!これは!!」

扉が開いて入ってきたのに驚いている。

「の、ノイズだああああああああああ!!」

現れたのはノイズだった。彼らは研究室にいる研究員たちを次々に炭化をしていきジャンヌとメイはお互いに抱きしめあっていた。

すると一体のノイズが近づいてきた。彼女たちは目を閉じたが……プレートを持っていた。

二人は目を開けるとプレートに文字が書いてあった。

「大丈夫?君たちを助けに来た。」

「え?」

ノイズがプレートで言葉が書いていたので二人は驚いている、ほか

のノイズ達は大人の研究員たちを襲っているが実験にされようとしている子どもたちには手を出していけないからだ。

ジャンヌ達のそばにいたノイズはプレートを出した。

【僕たちはアルカ・ノイズと呼ばれる存在だ。主の命令で君達を助けに来た。】

「私たちを？」

「そのとおりだよジャンヌちゃんにメイちゃん。」

彼女達は声をした方を見るとシルクハットをかぶった男性が現れた。アダム本人である。彼はオーブカリバーを構えながら研究者たちに刃を向けている。

「ご苦労だね君達。純粋な子どもたちをお前たちの実験対象として保護をして過酷な実験で多くの命を散らさせた。よってこの僕アダム・ヴァイスハウプトが断罪をくらわせる!!アルカ!!この子たちを脱出させろ!!」

【了解。】

アルカ・ノイズはジャンヌ達を掲げるとそのまま脱出をする。なんでこのプレートを持ったアルカ・ノイズだけは人が触っても炭化をしないのかというところのアルカ・ノイズのアルカはアダムが最初に作ったアルカ・ノイズでアルカとつけられている。

炭化能力がない代わりに人を避難させたりするのに彼の力が必要となる。アダムは彼が避難をしたのを確認をしてオーブカリバーのエレメントを回転させていた。

すでに完全聖遺物『アルゴスの目』は回収をしたので彼は遠慮なく研究所を壊すことに集中ができる。

彼はカリバーを上空に掲げてそれを振り回して剣先にエネルギーがたまつたのを確認をする。

「スプリームカリバー!!」

放たれた光線が研究所のメインコンピュータに命中をして爆発をさせていきアダムは素早く移動をして研究所の外へと脱出をした。彼はオーブカリバーを肩に乗せてジャンヌたちを見ていた。

「改めて申し訳ないねジャンヌちゃんとメイちゃん。」

「アダムおじさん……………」

「お久しぶりです。」

「ああ君達がF I Sにいた以来だね。すまないもう少し早く君達を見つければほかの子たちを助けることができた。」

「……………」

二人は爆発をする研究所を見ながらアダムはアルカ・ノイズたちを収納をしてアルカだけ出している。

「マスターどうしますか？」

「とりあえず戻ろう。彼女たちを新たな仲間とはいかないけどここに見捨てるわけにはいかないからね。」

「わかりました。」

アダムは転移石を使ってパヴェリア総社へと戻った。

「おじ……………じゃなかった局長どこに行かれていたのですか!!」

「あーすまないサンジェルマン、ちよつとだけね。アルカは完全聖遺物をプレラー・テイのところへもって行ってあげてくれ。」

「わかりました。」

「ティキ!! ティキ!!」

「お呼びですか?」

「ああ呼んだよ。悪いけどこの子たちの服などを用意してあげてくれ。」

「わかりました。ではお二人ともこちらに。」

ティキは二人と連れていきサンジェルマンとアダムだけになり、彼は話し始める。

「ある研究所で人体実験が行われていた。」

「人体実験!?!」

「ああ……………しかも完全聖遺物をアルゴスの目の一体化の実験が行われていたんだ。」

「そんなことをすれば!!」

「ああ僕は見たんだよ。実験によって死んでいた子どもたちの姿をね……………彼女達は唯一実験が行われる前に救出することができた……………それにしても許せないね……………」

「おじさま……」

「サンちゃん、明日僕はアメリカにある聖遺物研究所の方へと行くよ。」

「なら私も!!」駄目だ。「どうして!!私だっておじさまを守るくらいはできますよ!!」

「だからこそだ、君には万一僕に何かあったときに備えて残ってほしい……」

「おじさま……」

「テイキやアंक達を除けば僕と付き合いが長いのは君ぐらいだ……君にしか頼れる人物はいない……頼むサンちゃん。」

「……わかりました。それはおじさまとしてですか?」

「ああ今はパヴェリア総社局長としてではなく、アダム・ヴァイスハウプトとしてお願いをしている。」

「おじさま……なら約束をしてください。必ず無事に戻ってきてください。」

「ああわかってるさ。」

次の日アダムは数人の錬金術師と共にアメリカの方へと飛んで行く。場所はF I Sの研究がある地域だ。

「アダムさま、いったいアメリカには何しに行くのですか?」

「ああ君達は僕がアルカ・ノイズを作ったのは知っているね?」

「はいもちろんです。確かノイズをベースに作られたと……」

「そのとおりだよ。今僕のそばに立っているアルカは基本形態ベースで炭化能力はないんだよね。そのあとに作ったのは炭化能力がつけられているけどね。」

「その通りですけどね。」

プレートを出して言葉が発生をするようにしたアルカであった。

キャラ紹介

アダム・ヴァイスハウプト

性別男

今作の主人公でその正体は憑依転生をした転生者だ。特典は錬金術の力つてことで四つのエレメント属性や黄金錬金など本編以上の錬金術を使うことができ治療錬金術なども得意である。

原作のような性格はなく、彼は自身を作った創生者に復讐をすることとはなく月の技術を使いテイキを作つて彼女と地球へ転移する。

前世の記憶を使いオーメダルとセルメダルを作りグリードたちを誕生させてさらにオーズドライバーとオーブカリバーを錬金術で作つて仮面ライダーオーズに変身することが可能となった。

変身をしなくても強力な錬金術を使つて倒すことができるが自身の体も錬金術で隠しているためあまり強大な錬金術は使用することができない。

ある街でサンジェルマンの見つけて母親を治療錬金術で治してから彼女の父親が住んでいる屋敷に突撃をして火球で抹殺。

そのあとサンジェルマンやカリオストロにプレラーティと仲間が増えていき現在のパヴェリア総社を作り上げる。

本人はひっそりと暮らしていきたいと思つているがこの何百年でどれくらい悪い奴らをオーズの力などを使って倒してきたか覚えていない。

最近の悩みはサンジェルマンやテイキ達が体を隠そうとせず一緒にお風呂に入つてくることが悩みである。

テイキ

アダムが最初に作りだした戦闘機人で、本編のような幼い体ではなく大人の体のため精神的にも落ち着いている女性。姿はリリカルなのはSTSのギンガ・ナカジマ

自身を作つてくれたアダムことはマスターと呼びながらもサンジェルマン同様に彼に恋をしている。普段はそれを出さないようにしている。

武器は己の手を武器に変える力を持ち主に剣や銃にしてアダムの援護をしたりする。目からは本編でテキキがしていたように星空を出すことができアダムはお風呂で夜空を見るのが好きだったことも知っている。

料理も得意でパウエリア総社ができる前はアダムと一緒にご飯を作ったりしていた。現在は新たな姉妹、サナエ、アイカ、レイの三人を始動をしながらもアダムの秘書をしている。

最近の悩みはアダムと二人きりになれないことである。

グリード5

アダムが前世の記憶で作ったコアメダルに欲望とセルメダルを錬金術で作ったオーズに登場をした怪人たちだ。

原作みたいに仲は悪く無くトランプをして遊んだりしている。

アंक

アイスクリームが大好きな鳥型のグリード、プライドが高くたまーに傷つくことを言ってしまうことがあるがそれは彼なりの優しさだっことはアダムはわかっている。

アダムのごとはアダムと呼び捨てをしており彼にアイスクリームをよこせというほどにアイスクリームが好きである。

セルメダルを使い観察をする鳥型を作ってアダム知らせたりする。得意攻撃は火球と羽型爆弾である。

ウヴァ

昆虫型グリードでいつもアंकやカザリとトランプをしていつも負けている。行動隊長の通りに相手に最初に攻撃をするのがウヴァである。

ほかにも実は料理が得意だったことが判明をする。

武器は右手に発生をした鎌と頭部から放たれる雷攻撃である。

カザリ

獣型グリードで冷静な判断能力を持つグリード、トランプでいつも勝っている。本編みたいな裏切ったりすることはなく困っている人がいたら助ける青年である。

武器は高速で移動をして爪で相手を切り裂く攻撃やコードを伸ば

して相手を貫く攻撃だ。

ガメル

重量型グリードで本編みたいな話し方をする。今作ではメズールに甘えたりアダムに甘えたりする。

力もちで力仕事は自らするというぐらいに彼は重いものをもっていくので実はグリードの中では飴ちゃんを皆に渡したりしている。

また子どもたちにも人気でガメルおにちゃんと呼ばれることがある。

武器はその剛腕であいてを叩き潰したり重力を使ったり左手の二連キャノンで攻撃をしたりする。

メズール

本作では皆のお姉さんの存在になっておりテイキも姉さんというぐらいの母性がある。ご飯なども食べれるので料理は彼女がやることが多い。

武器水流と液状化をして相手を窒息死させたり感電させたりする。

サンジェルマン

アダムが最初に仲間にした女性で、奴隷の娘である。貴族の父で病気の母を助けてもらおうとしたが振り払われたところにアダムが現れて錬金術を使うところを見てからじーつと彼を見てこれが恋だつて気づいた。

彼のことはアダムおじちゃんと呼んでおりそれは大きくなってからも変わらない。錬金術は今作ではアダムから学んでおり彼は彼女のことを天才と呼んでいるぐらいに錬金術が得意となり今は本編同様に完全な体に作り替えている。

パヴェリア総社結成後は幹部としてアダムの下についている。彼のことは原作とは違いLOVEでお風呂にはいつも一緒に入っているがアダムは大きい胸を見てしまうので顔を真っ赤にしてしまうぐらいである。

ファーストロープなどは原作同様である。

カリオストロ

かつては男性だったがサンジェルマンの錬金術によって女性の体

となり自身を拾ってくれて暖かい場所をくれたアダムとサンジェルマンには感謝をしている。女になってからは自身に嘘をつかないようにしておりアダムとサンジェルマンや仲間を傷つける奴がいたら殺そうとするほどになっている。

アダムのことはどうおもっているのか？事情を知り自身を拾ってくれた恩人だと思っておおり女性へと変えてくれて自身を助けてくれたサンジェルマンには感謝をしている。

こちらもファーストローブなどは同じである。

プレラーティ

こちらもカリオストロ同様に元は男性で科学者をしていた。アダムが連れていたティキを戦闘機人とわかって彼が使う錬金術を見て彼と一緒に面白いってことでついていくことにした。

そのあとにカリオストロと同様に女性の体に変化してもらい今の生活を木にしている様子。たまーにかつての科学者としての血が出てしまい不敵な笑みを出すことがある。

ファーストローブは原作と同様だがアダムはなぜけん玉と思いなから彼女が戦う姿を見るのであった。

キャロル

本編ではサンジェルマン達同様な形になっており大人の姿で固定をしている。オートスコアラーたちを作りあげてイザークと共に錬金術を使って人助けをしたりしている。

現在はダウルダブラのファーストローブの改良しており乳を助けてくれたアダムには恋をしておりサンジェルマンと激突をするところがある。

料理などは昔から作っていたのでアダムも美味しいといわせるほどの腕をもっている。錬金術は得意で原作で使ったことも可能である。

イザーク

キャロルの父で今作では生存をしておおりアダムに助けてもらい共にパヴェリア総社を支えている人物だ。彼の錬金術としての知能はすぐくてアダムも彼から学ぶことが多く、パヴェリア総社に入っている錬金術師たちはイザークの講義を聞くほどメモをしたりしている。

現在はプレラーティと共に新たな基地を建設をする予定となっている。

錬金術師たち。

村人たちに処刑をされかけられりした人物たちがアダムたちに助けてもらった者たちが多く彼らを慕っているメンバーである。

ほとんどは元は男性だったが女性に変化しているものが多かったり元から女性の人もいる。

彼らもアダムたちほどじゃないが錬金術を使って人を助けたりする。

アルカ・ノイズ

今作ではアダムが制作をしたことになっており。一号機としてアルカという名前を付けたアルカ・ノイズを制作。

彼には炭化能力などはないが人を抱えたりすることができる。もちろんほかのアルカ・ノイズも任意で炭化能力を解除をして人を助けたりするがやはりノイズと勘違いされるのでアダムは普段は出さないようにしている。

仮面ライダーオーズ

アダムが作った錬金術でオーズドライバーとオーズスキヤナーを使って変身をした本編同様と同じである。

メダルは全て持つておりタトバ、ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、タジャドル、シャウタ、プトティラ、ブラカワニに変身をする。

武器はメタジャリバーがないのでオーブカリバーをつかった接近して切ったりする。

オーブカリバー

アダムが自身が使っている四つのエレメントをオーブカリバーに錬金術で作りだした武器で主に使う技はウルトラマンオーブダークの技とオーブオリジンの技を使うことができる。

爆発をする研究所

アメリカに到着をしたアダムたちはすぐに研究所がある場所へ向かっていく。彼は嫌な予感がしており完全聖遺物『ネフィリム』が運ばれているという情報を得ていたのだ。

ネフィリムが暴走をすればその範囲が大変なことになるってことが前世の記憶でセレナは絶唱で繭までの状態にしたが彼女は絶唱のバックファイアーによって動けないときに天井が崩落をして絶命をしてマリアの目の前でだ。

(そんなことは僕がさせないさ。その為にアメリカにやってきたんだよね。)

アダムたちはF I Sの研究所が見えてきたが何か変な感じだと思っていた。

「アダムさま!!研究所が燃えております!!」
「.....」

彼らは降りて燃えている研究所を見ていた。

「いったい何があったのでしょうか?」

「君達は水の錬金術を使い消火活動をしてくれ、僕は中に突撃をする。」

彼はオーズドライバーを装着をしてメダルを装填する。

「変身。」

「タカ!カマキリ!チーター!」

オーズタカキリターに変身をしてタカヘッドの能力を発動させて中の様子を見ていた。

(おそらくネフィリムが暴走を起こして暴れて爆発をしている。とりあえず僕の錬金術師たちが消火活動をしているが.....一刻も早く突撃をしようか。)

チーターレッグの力で加速をして研究所の中へ突撃をする。本来の歴史ならセレナは死亡をしようがアダムはそんなことはさせたくない思いで走っていた。

「まっていたまえ!!たとえ原作ブレイクを起こしても助けて見せる

!!

オーズは燃え盛る研究所の中へと突撃をしていた。

一方で研究所のネフィリムが保管されている場所、白い完全聖遺物「ネフィリム」は暴れていた。研究をしようとするところ突然として制御が聞かなくなり暴走を始めた。

それを止めるために一人の少女が立っていた。名前はセレナ・カデントヴァアナ・イヴ。シンフォギア『アガートラーム』適合者でもある。彼女は絶唱を使うためにギアを装着、13歳の少女にやらせることになる。それには姉のマリアは反対をするが彼女は自ら志願しアガートラームを纏ってネフィリムの前に立っていた。

だがその周りは燃え盛る炎が発生をしていた。

「セレナ……セレナ！待って!!」

「マリア姉さん……私、行くよ。」

彼女は目の前の化け物に対峙をする。

「ネフィリムを何とかできるのは私と、私のシンフォギアだけ。だから私が行くよ。姉さんとママ。生き残っている人たちを救うために。」

「セレナ！あなたが犠牲になることなんてない!!」

「……」

彼女はマリアの手を振りほどき、ネフィリムの前に立とうとした。瓦礫が降ってきて初老の女性に振りかかろうとした。

「ママ!!」

だがそこに謎の魔法陣が発生をして彼女の上空にあった瓦礫が消滅をした。

「どうやら間に合ったみたいだね。」

「「え?」」

そこには赤と緑、そして黄色のメダルを装填したオーズの姿があった。彼はその前に二人の少女たちを救ってからこの場所へとやってきた。

「お久しぶりですナスターシャさん。この姿をしていますですがアダムです。」

「あ、アダムおじさん？」

「どうして……」

「なーにかわいい少女がピンチと聞いてね。はるばるアメリカにやってきたのさ。」

「か、かわいい……」

オーズはセレナの頭をなでなでしてネフィリムの前に立った。彼はメダルを変えて赤いメダルを二枚出して装填をしてオーズスキヤナーにスキヤンさせる。

【タカ！クジャク！コンドル！タージャードール！】

「は!!」

赤き翼が六枚生えて一瞬で消えた。オーズタジャドルコンボに変身をしたのだ。左手にタジャスピナーが現れて彼は前に歩いていく。

「アダムおじさん!!」

「大丈夫、すぐに終わらせる。その時はセレナちゃんの料理を食べさせてくれるかい？」

「はい!!」

「いい子だ。」

ネフィリムはオーズの姿に咆哮をあげて襲い掛かってきた。放たれる剛腕をオーズはタジャスピナーを使いガードをする。

「いい攻撃だ。だけど無意味だよ!!」

右手に炎の火球を作りだしてネフィリムの顔面に直撃させて吹き飛ばす。瓦礫の方に突っ込んでいき彼はタジャスピナーをオープンさせてメダルを一枚ずつセットをしていく。

そのままオーズスキヤナーを持ちタジャスピナーにスキヤンさせる。

【クワガター！ライオン！サイ！シャチ！プテラ！コブラ！ギガスキヤン!!】

「はああああ……」

左手のタジャスピナーにクワガタメダルたちの紋章が現れてタジャスピナーに集まっていき彼は左手をつきだしてそこから強烈な光弾が放たれる。

ネフィリムは瓦礫から起き上がるがそこに放たれたマグナブレイズが命中をしてネフィリムは爆散する。

オーズはネフィリムが爆発をしたのを確認をして水の錬金術を使ってそれを上空へ上げるとそのまま周りの炎を鎮圧させる。

「アダムおじさん……………」

彼はオーズドライバーからメダルを外して変身を解除をしていつものシルクハットをかぶる。

「久しぶりだねマリアちゃんにセレナちゃん、そしてナスターシャさん。」

「アダムさんありがとうございます。」

「気にしないでくれ、これは僕自身が嫌な予感がして助けに来ただけだから。外では僕の仲間の錬金術師たちが消火活動を行っていましたからね。中に入ることは余裕でしたよ。」

彼は外に出て仲間の錬金術師たちと話をしておりマリアとセレナは調と切歌と話をしていた。

アダムたちはそのままパヴェリア総社に戻ることとなりお別れの挨拶をする。

「アダムおじさん、もう行ってしまおうの?」

「ごめんね。僕も仕事などがあるからね……………セレナちゃんの料理はまた会ったときに作ってもらおうよ。」

「わかりました。」

「アダムおじさん、セレナを助けてくれてありがとう。」

「いいってことよ。マリアちゃんは美人になる。必ずってほどに。」

「もうおじさんたら……………でもうれしいです。」

「頑張ってくれ未来の歌姫さん。」

「アダムおじさん!!行かないで(デース)!!」

「調ちゃんとお切歌ちゃん……………ごめんねおじさんも君達と別れるのはつらい、けど僕にも色々事情があるからね……………ただ永遠のお別れじゃないってことは言っておくよ。」

彼は二人の頭を撫でてから飛行機に乗りこんでパヴェリア総社本部へと飛んで行く。飛んで行く飛行機をマリアたちは見ていた。

「美人になる……………か……………」

「マリア？」

「私は決めたわ。今度アダムさんにあつたら告白をするわ!!」

「ずるいですマリア姉さん!!」

「そうデース!!」

「私だつて!!」

アダムに恋に落ちた人物たちがまた増えていることを飛行機に乗っていったアダムが知ることはなかった。

ナスターシャも苦笑いをしながら飛んで行つた飛行機を見るのであつた。

アダムside

「へくしゅん。」

誰だいい僕の噂をしているのは、原作ブレイクをまたしてしまつた……………本来はセレナちゃんはその事件で絶唱を使いバックフアィアで動けなくなつたところに瓦礫が落ちてマリアちゃんの目の前で死亡。さらにはナスターシャ教授もマリアをかばつた際に瓦礫に巻き込まれて下半身が動けなくなり車いす生活を余儀なくされるはずだつた。

だけどイレギュラーである僕が現れてナスターシャ教授の上空の瓦礫を錬金術を使い撤去してネフィリムの戦いは僕が成敗をした。

窓の外を見て僕は色々と原作をブレイクさせているなど思ひながらフイーネの野望が日本で行われることを知っている。

一度やつとは戦つたことがありテイキを破壊しようとしたが僕がプロティラコンボになり彼女をかばつた。だが奴もダメージを与えて撤退させることに成功をした。

その時にテイキが抱き付いてきたのは驚いたな、普段はそんなことを見せない彼女がね（笑）

「アダムさま間もなくパヴェリア総社本部に到着をします。」

「ご苦労。君も帰ったらゆつくりと休んでくれ。」

「しかし……………」

「なーに僕についてきてくれたからね。ありがとう……………」

「いいえ私はアダムさまたちによって救われました。だからあなたのためなら命だって「それはやめてくれ。」え？」

「僕は誰一人命を粗末してほしくない。君達は僕にとつては家族当然だ。だから僕のために死ぬことだけはやめてほしい。」

「あ、アダムさま……」

何て言っているが原作のアダムはそんなことは絶対に言わない。けど僕はアダム・ヴァイスハウプトじゃない……けれど今は僕がアダム・ヴァイスハウプトだから……原作通りなんてしないさ。

本部へと到着をした僕はついてきてくれた錬金術師たちに休むように指示を出してから中へ入る。

「おじさま!!」

「おじさん!!」

「マスター!!」

「うわ!!」

声をした方を見るとサンちゃんにキャロルちゃん、ティキが来たので驚いてしまう。

「ど、どうしたんだい？」

「おじさま怪我などはしていませんか!!していたらすぐに私が治療をします!!」

「おいサンジェルマン!!それは私の役目だ!!さあおじさん私が見てやる!!」

「いいえ二人ともここは私にお任せください。さあマスター手を出してください。」

「三人とも僕は怪我などはしていないから大丈夫だよ。心配をしてくれてありがとう。」

「「ほ……」」

彼女達は安心をしたのかほっとしていた。どうやら僕は心配をかけてしまっていたようだね。カリオストロとプレラーティとも再会をしたが彼女達は元気に過ごしていた。

「そういえばプレラーティ。」

「なんだ？」

「君はイザークさんと一緒に何かを作っていると聞いているが一体何を作っているんだ？」

「ああ今専用の移動基地を作ろうと思っっているワケダ。」

「移動基地かい？」

「そうだパヴェリア総社ごと移動ができれば楽じゃないかなと思っっているワケダ。けどなかなかこれが難しいワケダ。」

「確かにね……移動などを考えると難しいところだね。」

確かに移動をする基地があれば楽だけど……作ったの僕なだけでどき。しかし移動基地か……悪く無いけどまあそろそろ日本に行くべきかもしれない。

「原作通りならそろそろ天羽 奏が長野で襲われているはず……」
「アダム？」

「何でも無いよ。さてプレラーティ、明日僕は日本の方に飛び立つ。ティキが得た情報だと日本に完全聖遺物があるという情報を得ている。」

「ほう完全聖遺物が……」

「ああそのため長野県へと飛び立つ。そこで今回はサンちゃんとティキ、カリオストロにプレラーティに来てほしいんだ。」

「私もか？」

「ああキャロちゃんにはここを任せることにする。」

次の日となり僕たちは日本へと専用のジェット機で向かうことにした。キャロルちゃんは頬を膨らませていたが仕方がない大韓物を連れて行くから留守番をさせないよね。

「おじさまと一緒に、おじさまと一緒に。」

「日本なんて初めてよ。」

「けど今回は観光で行くわけじゃないよ。今回僕たちが行くのは長野県にある遺跡だ。」

「その遺跡に完全聖遺物が眠っているってワケダ。」

「その通りだ。」

僕は飛行機に乗っているのは僕たちだけじゃない今回はグリード

の五人も連れていつている。

「日本か……」

「今回の目的って完全聖遺物が眠っている遺跡だっけ？」

「ええその通りよ。」

「俺樂しみ。」

「ふん、おいアダムわかっているだろうな？日本のアイスクリームとやらを食わせるんだぞ!!」

「わかっているよ。そんなこと言われなくてもね？」

「アंकお前アイスクリームになると欲望になるな。」

「ウヴァ、お前のおごりでもらうぞ。」

「なんだと!？」

五人はがーやがーやしているが僕は窓の外を見ながら日本まで眠ることにした。

アダムたち遺跡探索へ

長野県にある洞窟、今現在10人がその中へと入っていき光が発生をする。パヴェリア総社アダム・ヴァイスハウプトが率いたパヴェリア総社たちだ。

彼らは日本に到着後ティキの中に搭載されている聖遺物反応を元に転移石を発動させて洞窟の中へと入っていく。

彼らは辺りを見ながら中へと入っていく。

「それにしても一体どんな聖遺物が置いているワケダ？」

「わからないね。それは奥の方に行けばわかるものだよ。」

「そうね。」

グリードたちも辺りを見ながら警戒をしており全員は奥の方へと進んでいき遺跡みたいなものを発見をした。

「おいあれじゃねーか？」

「みたいだな……だがいったいどこに聖遺物があるのか……とりあえず皆で手分けして探してみるとしようか。」

アダムたちは奥の方に到着をしたみたいなので辺りを探すように指示を出す。彼らは物を探しながら遺跡をあさっていた。

「メズールこれかな？」

「それは違うと思うわよガメル。」

「これじゃない？」

「違うだろ。」

「つたくなんで俺が……」

ぶつぶつ言いながらもグリードたちは遺跡に隠されているであろう完全聖遺物を探している。

「これは……マスター!!」

「どうしたティキ。」

ティキが声を上げたのでアダムたちはティキが見つけたであろう棺を見ていた。

「棺……だよな？」

「ああ……一体何が……」

「ガメル開けてくれないか？」

「わかったガメル開ける。」

ガメルは棺を開けて全員で中を開けてみるとミイラが眠っていた。アダムは前世でなんか見たことがあるような気がした。その腰部につけているものを見ていた。

「なんででしょうかこれ？」

「ふーむ………」

アダムたちは考えていると突然として声が聞こえてきた。

「ぐあああああああああああああ!!」

「きやあああああああああああ!!」

「声だ!!」

アダムはオーズドライバーを装着をしてメダルを装填してオーズスキャナーでスキャンさせる。

「変身!!」

「タカ!・トラ!・チーター!」

タカトラーターに変身をして声が出た方へと走っていくと調査団と思われるものたちがアルカ・ノイズにそっくりなものに襲われているのを見つけた。

タカトラーターはオーブカリバーで切り裂いて撃破した。彼はもしやと思い急いで走っていく。

???
side

あたしは父さんや母さんがノイズに襲われて妹の香苗と逃げた。

「きや!!」

「香苗!!」

「お姉ちゃん逃げて!!」

「けど!!」

「お願い!!」

「くそおおおおおおおおお!!」

あたしは香苗を置いて逃げてしまった。あたしは………あたしは!!ノイズをぶつ殺してやる!!絶対にだ!!

香苗 side

これでいい、お姉ちゃんが逃げてくれただけでも……私は振り返るとノイズがせまってきた。パパとママを殺したノイズが……私は目を閉じた。

「ロックカリバー!!」

突然として石が大量に降ってきてノイズ達に命中をして撃破していく姿を見た。そこにたっていたのは。

「タ・ト・バタトバタ・ト・バ!!」

メダルを三枚装着されている戦士の姿だった。

香苗 side 終了

アダムことオーズは地面に刺したオーブカリバーを抜いて彼女に近づいた。

「大丈夫かいお嬢さん？」

「えっと……あなたは？」

「僕はアダム、アダム・ヴァイスハウプトというんだよ君は？」

「天羽……天羽 香苗です。」

「香苗ちゃんか、いいなまえだね……とりあえずここは危ないから君は僕の背中に乗りたまえ。」

香苗はオーズの背中におんぶで乗り彼は歩いてサンジェルマンたちのところへと合流をしていく。

「おじさま!!無事ですか!!」

「ああ君たちの方にも現れたみたいだね？」

「その通りよ……ファーストローブで対抗できたわ。」

「俺たちの攻撃も通ったからな。ノイズって奴は大したことないな。」
アंकたちはグリード態になりノイズと戦ったみたいでメズールは考えていた。

「どうしたんだいメズール。」

「いいえアダム、ただ……誰がノイズを出して調査団を襲わさせたのかなって。」

「それは僕も思ったよ。彼らを消さないと行けなかったのかと思ってね。」

「とりあえず先ほどの部屋に戻ってみようか。」

彼らは先ほど探索をしていた部屋に戻っていき確認をしてみると棺が入っていた場所とは違う場所が空いており何かが置いてあった形跡があった。どうやらここに何かが置いてあったみたいだなとアダムは呟いて棺の方を開ける。こちらのほうは何も触られておらず腰につけているものもそこにあった。

「とりあえずこのミイラを棺ごと持って帰るとしよう。ガメル悪いけど先にこの子と一緒にもどってくれないかい？ プレラーティもだ。」
「わかったワケダ。このミイラが装着をしているものを調べてみるワケダ。」

「頼む。」

プレラーティはガメルと共に香苗を連れて先に戻ることにした。彼らが帰ったのを見てアダムたちも転移石を使い彼らが止まるホテルへと到着をして部屋に入る。

アダムはあのミイラの姿を見て思いだしていた。それはサンジェルマンたちと出会う前に出会った戦士のことを……

解析されたもの

アダム side

香苗ちゃんを仲間に加えた僕達・・・あのミイラを見ていて思い出したよ。

実は僕は古代日本にやってきたことがありその時に出会ったのがクウガと呼ばれていた彼のことを・・・

あれはまだサンちゃんたちと出会う前のことだ。日本にやってきた僕達はある村へ到着をした。そこで暴れていたのはグロンギと呼ばれる存在が暴れていた。僕はオーズに変身をしようとした時赤き戦士がグロンギに蹴りを入れて撃破した。それが僕とリクとの出会いだった。

「君は・・・」

「俺はリク、お前たちは？」

「僕はアダムって言うんだ。」

そこからぼくたちはしばらくリクが住んでいる村に滞在をすることにした。彼が変身をした姿はクウガと呼ばれる存在だということを知った。僕もオーズに変身をして共に戦ってグリードたちも協力をしてくれて闇の敵たちを倒してきた。やがて闇の存在を倒したリクと別れて今に至る。

そして現在、プレラーティが解析結果が完了させたという連絡を受けて僕は一度パヴァリア総社へと帰還をして彼の遺体と再会をした。「来たかアダム。」

「ああそれで結果の方は？」

「ああこいつの名前はアークルと呼ばれる完全聖遺物なワケだ。」
「・・・」

僕はリクの遺体を触ると突然として光が発生をして僕は意識を失った。

アダム side 終了

アダムが光に包まれて意識を失ったと聞いてサンジェルマン達は

急いで戻ってきた。

「プレラーティおじ様は!!」

「大丈夫だ。ただ意識が無くなったただけだ。だが突然だったからこそつちも焦ったワケだ。」

「けどどうしてアダムは気を失ったのかしら？」

幹部たちが話している中アダムは目を覚ました。どこかの心の中であろうか……彼はあたりをみると突然声が聞こえてきた。

「アダム……アダム。」

「その声は……まさか!!」

彼は振り返るとそこにいたのは懐かしい人物であった。

「やあアダム久しぶりだね。」

「リック……」

そう彼こそかつてアダムと共に闇の存在を倒した戦士クウガに変身をしていたリックだった。

「久しぶりと言いたいけど僕には時間が無い……アダム君を待っていたのだから……」

「僕を? いったいどういうことだい……」

「それはクウガの力を君に託すためだよアダム。」

「な!!」

リックから言われた言葉にアダムは驚いてしまう。クウガの力を託すということ……彼はずっと待っていた。アダムが再び日本にやって再会をするということ……

「僕は君という友達も得たからこそ最後まで戦えた。だから僕の魂と呼ぶアークルを君に託したい。」

「リック……」

リックの体が光出して彼はフツと笑い彼の右手を握った。

「アダム……最後に君に出会えてよかったよ……」

「僕もだよリック……だけどお別れじゃないよ。君の魂は僕の中で生きていく。だから見守ってくれリック。」

「ああ見守るよ……さようなら友よ。」

「ああさようなら……」。

リクがアダムのと一体化をして腰にアークルが現れる。

「は!!」

アダムは目を覚ました。メンバーたちは彼のが目を覚ましたことに喜んだ、

「アダム……先程解析をしていた遺体が崩れた。そして完全聖遺物アークルも消滅をした。」

「いやアークルはここにある。」

「「え?」」

アダムは立ち上がり腰に念じるとアークルが現れた。そして彼はポーズを構える。

「……見てくれてリクこれが僕の変身!!」

アダムは全身が包まれていき今ここに仮面ライダークウガが復活をした。状況において彼はクウガとオーズを切り替えて使用をする決意を固める。

(そういえば、前に助けたあの家族は元気になっているだろうか? 音楽家の夫婦と子供を助けたことがあったけど元気にすごしているだろうか?)

さて話を戻すでしょう。ジャンヌたちはどうしているかというところ? 彼女たち自信が錬金術を学びたいという思いを受けて錬金術師たちに指導をしてもらっており武器を作ったりして模擬戦をしたりしている。

そしてアダムはある人物を呼び出していた。

「失礼します。アダム様お呼びでしょうか?」

「やあヴアネッサよく来てくれたね?」

彼女を呼んだのはファウストローブの研究を彼女がしているのを知っていた彼はジャンヌたちのファウストローブに使用できないかをしてもらうために彼女を呼び出した。ヴアネッサもまさか自分が呼び出されるとは思ってもいなかったので緊張をしていた。

「ふふ楽にしたまえ。君のファウストローブの研究資料を見させてもらったよ。実に見事だよ。」

「光栄です。」

「そこで君にはファウストローブ開発責任者として頑張つて欲しい。」
「!!」

アダムの言葉にヴァネッサは目を見開いた。彼は椅子から立ち上がり彼女の肩をポンと叩いて局長室を後にした。

その夜お風呂場 アダムは泡風呂に入っていた。そばにはティキも一緒だ。

「マスター今日も見ますか?」

「頼むよ。」

ティキは天井に顔を向けて光らせると夜空が天井に発生をした。彼はこうしてお風呂に入りながら夜空を見るのが好きなのだ。

「綺麗だ……こうして星空を見ながらお風呂に入るのは最高だよ。ありがとうティキ。」

「お礼を言うのは私ですマスター、あなたが私を作ってくれなかったらこうして外を知ることができませんでした。ありがとうごさいますマスターそれとこれからも宜しく御願います。」

「ああこちらこそ……」

彼らは一緒にお風呂に入り過ごしたのであった。

移動基地完成 日本へGO!!

アダムside

リクから彼の形見でもあるアークルを貰い僕はクウガの力を得る。それからオーズとクウガの力を交互に使用をして戦い続けていた。まあそのおかげで錬金術師たちが増えてきている。

さてそれから数年がたち今僕達はプレラーティとイザークさんが前に立ち後ろにはでかいものが包まれているのがわかる。

「さてみんな待たせたワケダ。」

「えっとプレラーティ……その後ろの建物は一体何かしら？」

カリオストロが質問をしているが、僕は気になっているけど一体なんだろうか？確かチフオートシヨートを設計などは彼女がしたのをキャロルが奪ったからね。

「僕とプレラーティ君と協力をして作り上げた僕達の新しい移動基地だよ!!錬金術を全てをかけてね。」

「「いやそこまでしなくてもいいよね?」」

「あははは (?・▽?・;) ハハッ」

僕も苦笑いをしてしまい、2人が楽しそうで何よりだなと思いい彼女たちが待たせたなど言ったので見る。

「では見るといい!!私たちが完成させた移動基地を!!」

プレラーティがめくるとそこには移動をするための物が立っていた。

「すごい。」

「名前はチフオートシャトーとなまえをつけているワケダ。この基地には色々な情報が集まるようにしている、さらには錬金術の応用で外は狭そうに見えるが中は空間になっているワケダ。移動も脚部の6つの足で動けるように改良。さらには見つからないようにステルス機能などを搭載されている。」

なんとというかすごい気がするよ。全員で中へはいると外の狭さよりも広く作られているのがわかる。東方Projectの紅魔館のようだよ。

さて僕は局長室に行きあまり変わっていないなと思いつつ座った。秘書のカテリアが入ってきたので僕は移動基地を移動させることにした。

「さてカテリア全職員に通達、僕達はこれからある場所へ移動をする。」

「その場所は？」

「香苗ちゃんの故郷日本だよ。」

僕は(？▽?)ニヤリツ／＼と笑い香苗ちゃんが居そうな場所に行く、そこにはメイちゃんと仲良く遊んでいる香苗ちゃんの姿があつた。

ガメルとカザリが見守っている感じだね。

「あ、アダムおじちゃん!!」

「やあ香苗ちゃん今日はこの基地を移動させることにしたよ。その場所は日本だ。」

「えー?」

ふふふ驚いているね。ちなみにジャンヌちゃんは専用のファウストローブが完成をしておりヴァネッサいわく彼女が使用するのは名前の通りジャンヌ・ダルクの槍を振り回したりするみたいだ。錬金術も得意で僕も何度か模擬戦をしたことがある。

「子供つてのはすぐに成長して悲しいね……」

僕は考え事をしながらそういえばミラアルクたちは既に保護をしている。体の方は改造をされていたけど、それは僕の錬金術でちよちよいのちよいで人間の体にしてあげたけど懐かれてしまった。

あ、これってシンフォギアXVがなくなるじゃないかな?まあそれでもいいけどね。さてガシンガシンと基地は移動をしているみたいだね。冷蔵庫なども作っているためアंकはアイスが食べれると喜んでいたので思い出したよ。

「アダムおじ様ーーーーー」

「ん?」

声がして振り返るとジャンヌちゃんが走ってきた。あの胸が揺れているのですが?おじさん性欲あるから襲ってみたい感じになつてるよーーーーー

「や、やあジャンヌちゃん。」

アダム side 終了

ジャンヌ side

私はウヴァさんと模擬戦を終えてシャワーを浴びてから歩いているとアダムおじさんが1人で歩いてきた。アダムおじさん……私たちが地獄の底から救ってくれた人。私は走りおじ様に声をかける。けど叔父様顔が真っ赤になっているけど……ははーんおじ様は私の胸のほうをみていた。だいぶ大きくなってきたけどこれで行ける気がするわ。

「あらーおじさん、どこを見ているのですか？」

「あははははジャンヌちゃん、お、大人をからかうじゃないよ（ ???」

;)」

ふふふ動揺をしているのがバレバレですよおじ様(笑) まあそれでも私の好きな人だから逆に襲って欲しいなと思っているのは事実。

だっっておじ様なら私の初めてを捧げたっけいい。だからおじ様……ニガサナイヨ?

ジャンヌ side 終了

それからシャトーは数時間の移動で日本近くに到達をした。それから浮上をし基地が置ける場所を探して大きな空き地を見つけてそこに布陣をした。基地の方はステルス機能を発動させて見えないようにしており、彼らは降り立つ。

「着いたみたいだね。それにしてもすごいねこの基地は……数時間で日本に到着をするとはね?。」

「甘いなアダム、こいつは見た目以上のスピードを出すワケダ。」

「なるほど……」

日本に上陸をしたアダムたち、果たしてどう動くのか!!

現れたノイズ

日本に到着をしたアダムたちは到着後彼は自由にしようとするようにと指示を出してジャンヌやメイと香苗達を連れて街の方へとやってきた。グリードたちもそれぞれが欲しいものがあるのか街へ行ったので彼らも移動をしていた。

「おーおーおーおー (。?ω?。、)」

彼女たちの目が光っておりアダムたちはそれを見て苦笑いをしていた。

「こらメイ!!」

「だってお姉ちゃん私欲しいもん!!」

「わがママを言うんじゃないの!!」

姉妹で喧嘩を初めてしまったのでアダムは2人の頭を撫でることにした。

「まあまあ二人ともメイちゃんと香苗ちゃんほどの味が欲しいのかな?」

「いいの!! (。?ω?。、)」

「ああもちろんだよ。好きなのを買いたまえ。」

「わーいゞ (●▽●)」

二人は喜んでいるがジャンヌは申し訳ないという顔をしていた。彼女は年上つてことで何かと我慢をしているみたいだなとアダムは思った。

「ジャンヌちゃん、そこまで考えない方がいいぞ?君だって欲しいものがあれば言ってもいいんだよ?」

「けど……」

彼女が考えていると警報が鳴りだした。人々が逃げていくのを見てアダムはなにか嫌な予感がしていた。

逃げようとしている男性の手を掴んで状況を聞こうとした。

「どうしたのだい?」

「逃げるんだよ!!ノイズから!!」

「ノイズだって!?!」

彼は前を向くとアルカ・ノイズと同じような姿をしたもの達が前から現れた。アダムは構えるとアークルが現れて彼は発する。

「変身!!」

装甲が彼を纏っていき仮面ライダークウガへと姿を変えてノイズに攻撃をする。クウガの拳はノイズたちにあたり炭化していき次々に撃破していく。ジャンヌは2人を守るためにファウストローブを纏い襲いかかってきたノイズを錬金術で作ったやりに炎を纏わせてもやし尽くしていく。

香苗とメイは錬金術で作った盾でノイズの攻撃を塞いでいた。二人のファウストローブはまだ完成をしておらずテイキが己の手を剣に変えて二人に襲いかかるノイズを切り裂いていた。

「超変身」

姿を緑のクウガ ペガサスフォームへと変身をして錬金術で作った銃がペガサスボウガンへと姿を変えてノイズたちに放ち命中をして爆発する。アダムたちは何とか戦っているが次々に現れるノイズに苦戦をしていた。

「く・・・まだ来るのか。」

「このままでは・・・」

ジャンヌとテイキは疲れてきていた。アダムもこの状況はまずいなど思い錬金術を使おうとした時上空から槍が降ってきた。

5人は放たれた槍を見て上空から降ってきた二人の人物を見る。1人はオレンジの髪でもう一人は青い髪に左のサイドテールをしている女性だ。

アダムは彼女たちが装着をしている姿を見てシンフォギア装者が来たのだなと確信を得た。するとオレンジの髪をいた女性は香苗の姿を見て目を開いていた。

「な!!」

「おねえ・・・ちゃん?」

「なんでだよ・・・どうして香苗が・・・」

「奏、今は戦いに集中をして。」

「ああ悪い翼。」

奏と呼ばれた女性は先程自身が投げた槍を抜いてノイズたちに攻撃をしていく、彼女たちは歌を歌うことでフォルニックゲインが上がっていきその力でノイズと戦うことが出来る。アダムはその様子を見ながらテイキに彼女たちのデータを保存するように指示をして彼女は現在目を光らせて保存するために撮っている。

「さー僕も行くとするかな？超変身。」

ペガサスフォームから青いクウガ ドラゴンフォームへと姿を変身をして武器もドラゴンロッドに変わり素早い動きでノイズたちの間合いに入りドラゴンロッドを突いて封印エネルギーが発生させて爆散させる。

クウガの力に彼女たちは驚いているが、アダムはすぐに声をかける。

「後ろだ!!であ!!」

左手に風の玉を発生させてそれを投げつけてノイズに命中した。くらったノイズを中心に竜巻が発生してズダズダに切り裂かれる。

残ったノイズは彼女たちによつて粉碎されて残ったのはアダムたちになり。彼らは帰ろうとした。

「待ちやがれ!!あんだたちの後ろにいるその子はあたしの妹じゃないのか!!」

「.....」

「答えやがれ!!」

「やめてお姉ちゃん!!アダムおじさんをいじめないで!!」

香苗はクウガの前に立ち実の姉の奏の前に立った。

「やっぱり香苗なのか?」

「そうだよお姉ちゃん。私は天羽 香苗 お姉ちゃんの妹だよ。」

「.....なんだよそれ.....なんですぐに生きている事を言わないんだよ.....あたしは.....あたしは(;ω;) ウウウ」

「それに関しては済まない、彼女を守るためにはこれしか方法がなかったんだ。これを君たちの司令官に渡して欲しい。」

クウガは紙をひとつ投げて翼はキャッチをした。

? (^ o ^) ? | . * . : ≡ * \ (. o . \) キヤツチ!!
「これは……」

「そこには僕達が普段住んでいる場所が書いてある場所でもある。もし会談をするならぜひ来て欲しい僕たちは歓迎をするよ。」

アダムは転移石を割り魔法陣が発生をする。彼らはそれに乗り転送されようとする。

「待て!!お前は!!」

「僕はアダム、アダム・ヴァイスハウストだ。では(*?▽?)ノノノ
マタネー♪」

彼らは転移をして姿を消した。残された二人は司令室と連絡をして彼らとどうすかを話すのであった

2課との会合

特異災害機動2課基地司令室では先程翼と奏が帰還をして翼が貰った紙を2課の司令官風鳴弦十郎は見ていた。

「アダム・ヴァイスハウプト……それが渡してきた手紙には彼らが住んでいる場所だ。」

「どうしてこれを私たちに渡してきたのでしょうか？」

「いずれにしても時間なども書いてある以上行かなければならいな。相手が誰であろうと呼ばれている以上な。」

「しかしおじさま、罨という可能性もあります。」

「確かに、だが翼……基地の場所などを書いてわざわざあたしたちをおびき寄せるにしても変だぜ？」

「と2課の方では色々意見を言っている中アダムたちは何をしているかと言うと？」

「局長どういうつもりですか!!」

サンジェルマンたちに怒られていた。

「どうもこうもないさ。ただ彼らと同盟を組みたいと言うだけだよ。それに彼女たちが纏っているシンフォギアつても興味があるからね。」

「ですがおじさまに何かあったら……(´・ω・´)」

「なーに心配することは無い、サンジェルマンたちにアंकたちを護衛につかせるからさそれにここは僕達のホームなのだよ？彼らがそんな馬鹿なことをしないことを祈るだけさ……それに櫻井了子という女性にも会ってみたくてね。」

アダムが笑っているのを見てティキはつまらないそうに見ていた。

「……マスターノバカ」
「(;・D・)」

ティキのつぶやきが聞こえたのでアダムは困ってしまう。その夜彼は基地の外にいた。

「……」

「マスター風邪をひきますよ?」

「大丈夫だよテイキ、僕は普通の人と違うからね……サンちゃ
んたちとは違うから僕は……化け物だからね。」

アダムは振り返り彼女に言う。テイキは抱きついた。

「そんなこと言わないでください……」

「テイキ……」

「マスターは化け物なんかじゃありません。私はたとえどんなことが
ありましてもマスターの味方です。」

「ありがとうテイキ。」

彼らは中へ入り彼はアークルを出していた。

「リク、結局君は消えていなかったみたいだね？」

『ああそのようだ。僕も最初は消えたと思っていたのにね。あんなお
別れをしたのに恥ずかしいよ。』

「だけどリク、君が近くにいると思うと僕は一人じゃないって感じが
するさ。」

『……そんなことはないだろうアダム、僕だけじゃなくサンジエ
ルマンたちがいるから君は戦えるんだろ？僕も君やアイがいたから
あいつらと戦うことが出来た。最後の戦いの時に究極の姿になった
時僕は暴走をしかけた。だけど君たちの声が聞こえたからこそ僕は
この力を制御ができてあいつを倒すことが出来た。』

「そんなことはないさリク、君は故郷を守るために一人で戦ってきた
んだろ？本来はこの力だつて君は望んでいなかった。」

『やっぱり君には何もかも見透かされている気がするよ。その通り
だ……僕は戦いは嫌いだ、でも奴らは人々をおそうバケモノ……
だから僕は変身をした。仲間や家族を守るためにね。』

リクの言葉を聞いてアダムはアークルを見ていた。自分も彼のよ
うに戦えるのかと戦えるのかと……

『アダム、君は君だ……僕じゃない。だからその力は君の使
いたいと言う時に使って欲しいそれが僕が言える言葉だ。』

「はは、君の言葉を聞いて安心をしたよ。ありがとうリク。」

『どういたしまして、そろそろ寝ないといけないだろ？』

「ああおやすみ」

『おやすみ』

アダムは目を閉じて眠りについた。次の日となりアダムたちは入口で彼らが来るのを待っていた。

「ねえアダム本当に彼らは来るワケダ？」

「ああ彼らは来るさ。」

「本当かよ。」

アングがじーっと見ていると黒い車がやってきた。そして基地の前に止まると扉が開いて風鳴弦十郎たちが降りてきた。

「ようこそ僕達の家。」

「お招き感謝をします。自分は特異災害機動2課の司令官を務めております。風鳴弦十郎と申します。」

「硬いね……普段の話し方でいいよ。そっちの方が馴染みやすいからね。」

「すまない。」

「さてお客さんたちを案内をしないとね。サンジェルマンたち彼らを案内を頼む。」

「わかりました。こちらになります。」

サンジェルマンたちの後について行く中アダムは櫻井了子を見ていた。

(間違いない、あいつが彼女の精神を取り込んで彼女になりすましているね……フイーネ……香苗ちゃんの家族を襲い命を奪った張本人でテイキを壊そうとした人物……だが今はうごかないであげよう。だがお前の計画は成功はさせたりはしない。)

アダムは心の中で思いながら彼らが待っている部屋へと歩いていき扉を開ける。

「すまない待たせてしまつて。」

「いや気にしていないさ。」

アダムは椅子に座り今回呼んだ理由を話をする。

「さて今回君たちに手紙を渡したのは君たちと同盟を組みたいと思つてね。僕達パヴァリア総社としては君たちの力になりたいと思つてね。そしてこれから起こる大きなことをから守るためにね。」

「大きな戦い……」

「そうこちらにもノイズと戦うことは出来るからね、それに君たちは僕が変身をした姿をみているからね。それにこっちとしては君たちとは個人としてでも仲良くしたいからね。」

「アダム殿感謝をする。」

お互いに握手をして今2課とパヴェリア総社の同盟が決まった。

奏side

旦那とアダムの旦那との同盟が決まってあたしはアダムの旦那に妹がいる場所へ案内をしてもらっている。

「そのアダムの旦那。」

「なんだい?」

「ありがとうよ、妹を救ってくれて……あたし妹が死んだと思ってそれで……」

「だがそれでもあの子は今でも君の名前を出して心配をしていたよ。さて香苗ちゃん。」

扉が開いて香苗は友達と遊んでいた姿を見てここで馴染んでいたんだなどあたしは思った。

「アダムおじさんにお姉ちゃん!!」

「香苗!!」

あたしは数年ぶりに妹を抱きしめた。あたしたちはお互いに涙を流して再会を喜んだ。

「よかったよおおおおお(´；ω；´)」

「うんうん。」

アダムの旦那に感謝をするばかりだ、ありがとうな。

フィーネの計画

アダム side

2課との会合を終えて僕はホツとしていたが原作通りならそろそろ彼女が動き出すはずだ。ツヴァイウイングの二人のライブを利用して完全聖遺物「ネフシユタンの鎧」の起動実験を行うためのね。

「カテリア、悪いけど幹部たちを集めて欲しい。」

「わかりました。」

カテリアはサンちゃんたちを呼ぶために部屋を出ていく、改めて僕達パヴェリア総社幹部を紹介しないとね？

幹部はサンジェルマン、カリオストロ、プレラーティ、カテレス、レヴェリア、アグル、レイジン、キャロルちゃんにジャンヌちゃんというメンバーである。

アグルとレイジンは男性の錬金術師であり幹部の一人でもある。さて僕の部屋にカテリアを始め幹部たちが集まっていた。

なおヴァネツサくんは幹部ではなく最高責任者であるため呼んでいない。彼女には香苗ちゃんとメイちゃんのプロアウストロップの作成してもらっている。

「局長、我々幹部を集結させたのにはなにか理由があるのですか？」

「ああサンジェルマン、その通りだよ。実は今度2課である実験を行うことになっている。」

「ほう……」

「ちなみにどのような実験をなさるのですか？」

「そうだね。皆はネフシユタンの鎧という言葉聞いたことがあるかい？」

「確か完全勢遺物だった気がするワケだ。待てアダム……その起動実験を歌で起動させようとしているのか？」

さすがプレラーティだ、彼女が言った言葉に全員が僕の方を向いていた。だからこそ僕は首を縦に降る。

「それって確か今度行われるツヴァイウイングというユニットのコンサートでやるって聞いたような？」

「ああその通りだよレイジン、だからこそ僕は嫌な予感がして先程から冷や汗が止まらないんだ。さてみんな僕が呼んだ理由がわかったかな？僕はその日はライブに行くことになっているから君たちは外で待機をしてほしい。そして僕が合図を出したら一斉に扉を開けて乗客たちの避難を頼みたい。」

「そんな!!」

「局長に何があったらどうするのですか!!」

サンちゃんとかャロちゃんが僕に迫ってきているが仕方がないだろう？招待されているのだからさ……まあほかのメンバーたちが抑えてくれているので今日のところは解散ということでもメンバーたちは部屋をあとにする。

「マスター、私は心配です……本当に一人で行かれるのですか？」

「ああティキ、君にはここを守って欲しい。一応心配することはないと思うけど念の為にね？（それに物語を進めるには悲劇を発生させないといけない……果たして響ちゃんはグレになるのか？それとも原作通りになるか……）」

僕は両目を閉じて休むことにした。

アダムside終了

それから数週間がたちツヴァイウイングライブ会場にアダムはやってきていた。彼は奏からもらったチケットで会場に入場をしてライブが始まるまで自身の席に座って待機をする。

そして会場の周りを見ていた。

（なるほどね、会場を見ているが入口は3個ほどか……幹部たちは透明の錬金術を使い姿を消して待機をもらっている。おや？）

彼はこちらの方に女の子がやってきているのを見つけた、それは原作の主人公立花 響である。

「ここかな？あ、すみません。」

「いや大丈夫だよ？なにせ僕はライブには始めてきたものでね？」
「え」

「えっ、じゃあ私と一緒になんですわね。よかった……友達が用事で来れなくなつたので1人でここへ来たんです。」

「そうだったのか、奇遇だね僕も一人でね。僕はアダム・ヴァイスハウプトって言うんだ。」

「私は立花 響です!!」

「響か……いい名前だね?」

「えへへへありがとうございます。」

彼らはライブが始まるまで話をしていると会場が暗くなっていく、アダムもそろそろ始まるから座つたらといい響は彼の隣の席に座る。

そしてライトがステージの真ん中に光ると中からツヴァイウイングの2人が出てきた。会場の人達は彼女たちが現れるとサイリウムの色を青とオレンジの色に変えて降っている。

アダムも錬金術を使いサイリウムを生成をして響もツヴァイウイングの2人を見て目を光らせていた。

ステージのふたりは色々と歌を歌っていきファンのテンションもフォルテツシモになっていく中アダムは嫌な予感がしていた。

「の、ノイズだああああああああああ!!」

突然としてノイズという言葉聞いてアダムは石を光らせると扉が一斉に開いた。

「皆様早く避難をしてください!!」

アダムは隣の響に避難をするように指示を出してノイズがいる頃へと走っていきオーズドライバーを装着をしてメダルを三枚装填する。

そしてオースキャナーをスキャンさせる。

「変身!!」

「ライオン!トラ!チーター!ラタラター!ラトラター!!」

ラトラターコンボに変身をしてチーターレッグのすばやきで人々を襲いかかろうとしていたノイズをトラクローを展開させて切り裂く。

「早く逃げるんだ!!」

「は、はい!!」

女の子は扉の方へと走っていくのを見てから彼は再び前を向きオーズカリバーを構える。エレメントを回転させて青のエレメントのところを止めてトリガーを引く。

「アイスカリバー!!」

刀身を振るい氷柱の槍がノイズたちを貫いていき撃破していく中ステージでは翼たちがギアを纏って交戦をしていた。

オーズもそこに参戦をして3人でノイズたちを倒していく中奏の動きがおかしかった。

「奏くんどうしたんだい?」

「いや・・・何でもねえよ・・・」

(やはり原作通りLINKERをやらずにギアをまとっているのか・・・)

アダムは原作を知っているので瓦礫が動いたのが見えた。

「あれは!!」

「くそ!!」

奏は響を守るためにギアを回転させているがノイズの攻撃にギアが砕けてその破片が響に刺さってしまう。

オーズはオーズカリバーで奏を狙っていたノイズを切り裂いて響の所へ行くと奏が必死に声をかけていた。

響は僅かに目を開いて確認が出来たのか奏はギアを持ち決心を固めた目をしていた。

「何をやる気だい奏ちゃん。」

「なーにこんなにもあたしの歌を聴いてくれるヤツがいるからな、特大のものをプレゼントをしてやろうとってうぐ!!」

だがその前にオーズが奏のお腹を殴り彼女を気絶させる。

「悪いけど・・・君を死なせない、翼ちゃんや香苗ちゃんを悲しませるからね。」

アダムはオーズドライバーを外すとアークルが腰に装着されてさらにアークルの形状が変わる。

「リク・・・かつて君がなったあの姿に僕は変身をするよ。人々

を守るためにね……」

『ああやろうアダム。みんなを守ろう!!』

アダムは静かにポーズを取る。

『変身』

アダムに装甲が纏っていくがそれはいつもの赤い色の鎧ではなく、黒い鎧を纏っていた。かつてリクが闇の存在と戦った際に変身をした究極のクウガの姿である。

アルティメットクウガが再び降臨をした。その目の色は黒ではなく赤い目をしていた。

「すごい力を感じる……リクはこれを使って戦っていたのか……だが!!」

ノイズたちはクウガに襲いかかるが彼は腕を振るうとき竜巻がはっせいをしてノイズたちを切り裂いていく。

彼は手前にかざすと発火能力が発動をいってノイズたちを燃やし尽くす。翼はクウガの姿を見て圧倒的な力を恐れていた。

ノイズたちはクウガを倒すために合体をしていき巨大なノイズへと姿になるが、クウガは脚部にエネルギーを集めていた。

そのまま走りジャンプをして一回転して蹴りを入れる。必殺のアルティメットキックが命中をして巨大ノイズにクウガのマークが発生をして彼は後ろを振り返り歩いていくとノイズは爆さんをしてノイズたちは全滅をしたが一人の女性は笑っていた。

「くつくつくアダム……まさか貴様がいるとは予想はしていなかったがまあいいさ、貴様の戦闘データは集めさせてもらった。そして何よりもネフシュタンの鎧を奪うことが出来たのだからな。」「させるでも思っているのか?」「なに?」

彼女は回避すると後段が飛んできた、放ったのはアグルの技リキテイダーだ。彼は右手に水エネルギーを集めて刃にして女に向けていた。

「貴様がアダムが言っていたフィーネという女か、お前を逃がす訳にはいかないのな。」

アグルはフィーネに刃を振るうが彼女は回避をして笑いながらア

グルのこうげきをかわしていた。

「はっはっはっは悪いが私は忙しいのでな、さらばだ。」

「逃がすか。」

彼は刃を振るうが彼女が発生をした煙で見えなくなってしまう。彼は右手に発生させた刃を手に持ち回転させて煙を晴らすぐすにフィーネの姿が消えていた。

「アグルやつは?」

「ごめん、逃げられてしまった。」

「しようがないさ、アダムも許してくれるはずだ。」

「僕………役に立てなかった………」

アグルは(・ω・)と落ち込んでいた。

こうして発生をしたライブ事件はパヴェリア総社幹部たちの避難誘導やアダムが変身をしたオーズなどの活躍で死亡者はいなかったが重傷者などは発生をしてしまった。

アダム side

僕は基地へと帰りアグルが落ち込んでいたのでどうしたのかと聞いてみるとフィーネを逃げられてしまったことで落ち込んでしまっていた。

「アグル、落ち込むことはないさ。君たちがお客さんたちを逃がしてくれたあら僕達は戦うことができる。ありがとうね?」

「僕役に立った?」

「ああもちろんだよ。」

だがフィーネが動いたつてことはネフシユタンの鎧は盗まれてしまったで間違いない。ならクリスはまだ攫っていないと見ていい。それなら彼女が捕まる前に色々調べないといけないな。

やれやれ………サナエやカナ、レイにも手伝ってもらおうか考えてしまうね。彼女たちにもテキキと同等の戦闘力を持たせているからね。

「フィーネ、香苗ちゃんの家族の仇は取らせてもらおうよ。絶対にね?」

クリスを探せ。

ネフシユタンの鎧の起動実験が成功をしたがライブ会場にノイズが発生をしてしまうという事件が発生をする中フィーネは起動したネフシユタンの鎧を盗んでいき迎撃をした錬金術師アグルは彼女を追いつむが相手は煙幕を利用して逃げてられてしまう。

パヴァリア総社本部のアダムの部屋

「……………」

『どうしたんだいアダム?』

リクはアークル内におり心の中から彼に声をかけている。アダムも最初は彼が消滅をしたと思っていたので声が聞こえたときは驚いてしまいが現在は慣れたので彼は考え事をしていることを彼に伝える。

「いやフィーネはネフシユタンの鎧を盗んでいったからね。それを止めれなかった僕たちの責任だなんて思ってね。」

『だけど君はライブの人々を逃がすために戦ったじゃないか。その結果誰も死ななかつたのが一つだよ。』

「リク……………そうだね。今は誰も死ななかつただけでも良かったと思わないとね?待てよ……………フィーネはネフシユタンの鎧を奪っただけで自身で装着をすることはしない……………ならばどうするか?」

彼はすぐに二課の弦十郎に連絡を取る。

『どうしたアダム殿?』

「やあ弦十郎君すまない。シンフォギア装者を選んだりしていることはあるのかい?」

『どうしてそれを?』

「話は後で、あるのだね?」

『ああもちろんだ。候補をしているものならいる。名前は雪音 クリスという少女だ。』

(やはり彼女か……………狙うとした間違い……………)」弦十郎君、クリスは狙われている可能性がある。彼女のフォニックゲイ

ン値が高いのなら狙われている可能性がある。僕たちは彼女を保護するよ。」

『なんだと!!わかったこちらも情報を提供をするさ。』

「感謝をするよ。」

通信が切れてアダムは出る準備をしているとウヴァ達がやってきた。

「どうしたアダム?」

「何を慌てているんだい?」

「丁度良かった……君たちの力を貸してほしい。前に助けた雪音クリス君を覚えてるかい?」

「俺覚えている。クリス元気な子!!」

「ええもちろんですよ?でもどうしてかしら?」

「彼女が狙われている可能性がある。フィーネにね?」

「そういうことか……あのババア厄介なことをしやがる!!」

アंकが舌打ちをして彼らはクリスを探すことにした。彼らはそれぞれで探す為に通信機を持ち街へと探索をする。

アダムはオーズドライバーを装着をしてメダルを装填してオースキャナーをスキャンさせる。

「変身!!」

【タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バタトバ!タ・ト・バ!!】

アダムはオーズへと変身をしてバッタレグで一気に上昇をしてビルの上に立ちタカヘッドの視力で街の中を探索をしていた。だがいくら万能のアダムでもこの中から彼女を探すのは難しいのだ。

「やはりこの数の多さでは駄目か。次の場所に移動をしよう。」

バッタレグの力を使い彼はビルの上を次々に飛んで行きそこからタカヘッドの能力を使用して視力を高めていた。

「やはりだめか……ん?」

彼はあきらめようとしたとき追い駆けられている銀色の髪をした女性を見つけた。

「間違いない。黒服を着た男達が追いかけている……フィーネが指し向けた者たちか!!」

バツタレツグでその場所へと移動をしてそのままトラックローを展開をして彼女を襲い掛かろうとしていた黒服の人たちに攻撃をする。「悪いけど彼女に手を出さなくてもらおうか？」

クリスside

「はあ．．．．．はあ．．．．．」

私は全速力で走っていた。その理由は突然として学校帰りに黒服の人たちにさらわれかけたからだ。その時に奪ったペンダントと一緒に走っている。

「くそ銃を使い!!」

嘘だろ!!こんなところで銃を使うなんて!!

「助けて．．．．．助けて!!」

私は必死に声をあげると上から戦士が降りてきた。その姿はかつて私やパパとママを助けてくれた人たちで間違いない。

クリスside終了

オーズはクリスが無事なのを確認をして黒服を着た人物たちはオーズの姿を見て銃をとりだした。

「ひい!!」

クリスは怯えているがオーズはトラックローを展開して構えている。黒服の人たちはトリガーを引き弾が発射されるが彼はタカヘッドの能力で弾が放たれるのを見て腕を振った。

「どうしたんだい？君達が撃った弾は全部で．．．．．12発だね？」

トラックローに放たれた弾が回収されて彼は地面に落とした。黒服達はこれはまずいと思い逃げようとしたときノイズが現れて二人を炭化させた。

オーズはクリスを守るためにトラックローを展開させてノイズ達を切りつけて攻撃をする中クリスは突然として聖詠を言う。

「Killter Ichai val tron」

「えっ？」

彼は振り返ると赤いアーマーを装着をしたクリスが立っていた。

「なんだこれええええええええええ!!」

アダムside

まさかイチイバルの欠片のペンダントだったのか？とりあえず彼女は装着をしてしまった以上僕は彼女を守るために奮闘をするしかない。

ノイズは次々に襲い掛かるがそこに雷などが発生をして僕は上空を見る。

『やお待たせオーズ。』

「カザリたちかまっていたよ。」

『ちいまさかノイズどもがいるとはな。』

『まあそんな俺達には関係ないけどな。』

『俺戦う!!うおおおおおおおお!!』

ガメルは突撃をしていきその剛腕でノイズ達を殴り飛ばしていく。クリスはどうしたらいいのかわからない状態だった。

「落ちて着いて武器を想像をするんだいいね？」

「武器……あいつらが使っていたような武器を!!」

すると彼女の手にはガトリングが現れてノイズに向かって発射される。いやーイチイバルは射撃系だからすごいなー僕はそう思いながらメダルを変える。

「クワガター・クジャク！チーター！」

ガタジャーターへと変身をして左手に現れたタジャスピナーから炎の弾を飛ばしてから頭部のクワガタヘッドに雷を集めてそれを発射させて高速移動で翻弄させる。

「くらえ!!あたしの特大の弾だ!!」

彼女は腰部を展開させて小型ミサイルを発射させてノイズ達を撃破した。僕はあれで初心者だっけ？と思うぐらいに彼女戦闘強くね？

「……………」

僕は冷静にメダルをタトバコンボのメダルに戻して彼らが来るのを待つことにした。数分後彼女達が到着をしたので僕たちは撤退をしようとした。

「待って!!」

声が出たので振り返るとクリスが僕の方を見ていた。なんでか涙

目になっているのが気になったが一体どうしたんだらうか？

「やつと会えた……あの時私やパパとママを助けてくれたメダルの戦士……私はずっとお礼が言いたかった……私がお礼を言う前にあなたは姿を消してしまったから言えなかった……あの時はありがとうございました!!あなたがいなかったら私はパパとママを失っていた。だから……だから!!」

僕はその言葉を聞きながらアंकたちと共に転移石を割り総社の方へと戻っていく。

「ありがとう……か。」

僕は変身を解除をした後クリスが言った言葉に複雑な気持ちになっていた。それは僕は本来だったら彼女達の敵として戦う運命なのにお礼を言われたからだ。

本来のアダムはシンフォギアAXZでラスボスとして戦って死ぬ運命の人物だ。だけどその結果を僕という憑依転生をしてしまった結果が原作ブレイクを多数起こしてしまっている。

「まあ考えたってしょうがないか……とりあえずお風呂に入つて気分すっきりするでしょう……」

僕はお風呂に入るために扉を開けた。

「あ……」

「え？」

そこにはパンツを脱いでいたジャンヌちゃんがいた。僕は出ようとしたが彼女に手をつかまれる。

「ジャ、ジャンヌちゃん!？」

「いいよ……おじさまなら見せても……一緒に入る？」

「ええええええええええ!!」

アダムside終了

アダムは驚きながらも脱いでいき、ジャンヌと共にお風呂に入ることにした。アダムは彼女の方を見る胸の方はだいぶ大きくなり響ぐらしいの大きさになっていることに……けれどなぜ彼女が自分と一緒に風呂に入ると言ったのが不思議だなと思いつつ体を洗ってからお風呂に入る。

「ふう……いい湯ですねおじさま。」

「あ、ああ……」

アダムはジャンヌの体を見ないようにしていたが、先ほどのお風呂に入る前に見てしまったので脳に記憶をしてしまった。

(うーむサンちゃんもそうだけどジャンヌちゃんも胸が大きくなって
いるんだよね……こうして僕と一緒にお風呂に入るなんて……
ね?)

アダムは考えながらもお風呂で疲れていた体が休まっている感じがした。

「ふう……」

「おじさまお疲れですか?」

「まあね……ジャンヌちゃんも幹部として色々大変じゃないかな?」

「確かに色々大変ですけどおじさまから学んだ錬金術やサンジェルマンさん達が教えてくれますので助かっていますよ。」

「そうか……ならよかったよ。」

彼は上を見ながらこれからのことを考えることにした。

一方でフィーネの屋敷

「くそ!!アダム・ヴァイスハウプト!!よくも私の計画を潰してくれたな!!クリスをさらいネフシユタンの鎧のデータをとるつもりが奴のせいで失敗に終わってしまったではないか!!おのれおのれええええええええええ!!」

彼女は計画をかなり狂わされて怒り心頭であった。本来の原作ならクリスをさらってネフシユタンの鎧のデータを集めることができただがこの小説ではアダムがその前に動いてクリスを助けたので失敗に終わったのだ。

「だがまあいい、私にはまだクローン技術というのを残している。これで雪音 クリスのクローンを作ればいいだけだ。ふっはっはっはっはっはっは!!」

フィーネは笑いながらいつもまにか摂取をしていたクリスの細胞を使いクローンを作ることにした。

アダムの休み

アダム side

僕は今暇をしていた……その理由はサンちゃんたちに仕事を休むようにといわれてしまったからだ。パヴァリア総社を作ってから僕はどうやらあんまり休んでいないようでほかのみんなもかなり心配をしていたようでサンちゃんが今日はお休みしてくださいといわれたのでどうしようかと悩んでいた。

『ならアダム、君が助けたあの子のところへ行ったらどうだい?』

「響ちゃんのことか……そうだね行ってみるとしよう。」

僕はリク of 言葉を聞き彼女が入院をしている病院へと向かうことにした。病院のことをなんで知っているかって?僕は天才なアダムだからね調べておいたのさ!!

それから数分後僕は到着をして彼女の知り合いといい案内をしてもらうとそこではリハビリをしている響ちゃんがいた。

「頑張っているね響ちゃん。」

「うえ!?アダムさん!!うわわわわわ!!」

「おっと。危なかったね……」

「ふええええええだだだ大丈夫ですよ!!」

なんか顔が赤い気がするが風邪を引いているのかな?とりあえず僕は彼女を抱えていたので座らせる。

「す、すみません……」

「気にしないでくれ、あとこれは僕からお土産だよ。」

僕は途中で買い物をして果物セットを買ってあげた。まあリクからもそれがいいといわれたので彼女はじゅるりとよだれを垂らしているのを見て僕は笑ってしまう。

「あ、すみません……」

「気にしないで、とりあえず君を病室まで送るよ。」

「ありがとうございます。」

響ちゃんを連れて僕は彼女が入院をしている病室へとやってきた。どうやらお客がいたみたいだね?

「あ、響大丈夫？」

「未来ごめん来ていたの？」

「さつきね。あの……あなたは？」

「あー僕はアダム・ヴァイスハウプトっていうものだ。まあ彼女とはライブ会場だね……」

「そ、そうですか……私は小日向 未来といいます。」

（一瞬だけ動揺をした……彼女はもしかして……）

僕は未来ちゃんと話をしたいといい響ちゃんは病室で待機をするようにと行って僕は彼女を連れて屋上の方へと向かっていく。

アダム side 終了

未来 side

アダムさんに連れられて私は病院の屋上に来た。いったいどうしたんだろう？

「さて……でいいかな？未来ちゃん……君は後悔をしているじゃないかな？」

「え？」

アダムさんに言われて動揺が走ってしまう。なんでばれたか。

「簡単だったよ。僕がライブ会場と行ったとき君は動揺をしていた。それは事実だね？それも響ちゃんが入院をしよう重傷をおったと聞いて君はあの時私も一緒に行けばよかったと……」

「……そうです。響を誘ったのは私なのに用事でこれなくなつて……それで新聞で知って病院に駆けつけてそれで……それで!!」

するとアダムさんは私を抱きしめていた。

「そうか……辛かったんだね君も……今は泣いてもいい……」

「う、うわああああああああああああああああああ!!」
私は泣いた、アダムさんの胸の中で……辛かったことなどを話しながら。

未来 side 終了

数分後

「す、すみません……………」

「気にしないでくれ……………あ、ごめんね？」

彼は連絡が来たので通信を取りわかりましたといい通話を切る。

「ごめんね未来ちゃん、今日は用事で帰らないと行けなくなっただ。響ちゃんのこととは任せるよ？」

「えつとアダムさん!!」

「なんだい？」

「ありがとうございます!!」

「気にしないでくれじゃあね？」

彼は階段を降りると見せかけて錬金術を発動させて分身を作り本体は屋上の後ろに回りこんでおり腰にアークルを発動させる。

「……………変身!!」

直接クウガ ドラゴンフォームへと変身をしてビルの上を飛んで行く。分身は数分後消滅をした。

クウガは飛びまわりながら現場の方へ到着をして長い棒を拾ってドラゴンロッドへと変えて地面に降りたちロッドを振り回してノイズ達に当てて爆散させる。

「アダムさん!!」

「待たせたね……………ん？」

彼は電撃の力がバチバチと体中にめぐっていくのを感じた。リクの方は驚いている。

『なんだいこれは？アルティメットフォームとは違うものだけど……………』

「……………ふふなーに見ればわかるさ。超変身!!」

ドラゴンフォームのアークルに金色の装着されていきドラゴンロッドも姿が変わっていく。クウガライジングドラゴンフォームに変身をする。

(しかも時間無制限な感じがするね……………まあアルティメットフォームになれるから当然かな?)

翼と奏はクウガのボディに金色がついたので驚いている中、クウガは走っていきライジングドラゴンロッドを振り回してノイズ達に当

てた後姿が変わる。

「超変身!!」

緑のクウガライジングペガサスフォームへと変わりライジングドラゴンロッドもライジングペガサスボウガンへと姿を変えて後ろの引っ張ってトリガーを引き連続した弾が放たれてノイズ達を次々に撃破していく。

「すごい……………」

「ええ……………」

二人はクウガの戦いを見てすごいと思っていた。さらにライジングペガサスフォームの色が紫になりライジングタイタンフォームへと変身をした。

彼はライジングタイタンソードを振り回して彼女たちのところへ行くと翼のアームドギアを奪った。

「え?」

「借りるよ!!」

するとアームドギアがライジングタイタンソードに姿を変えて二刀流で切っていく。そのまま剣を振り回してノイズを次々に倒していき。

「超変身!!」

ライジングマイティフォームへとなりとどめを刺そうとしたが……………止めた。

「どうしたんですか?」

「……………忘れていた。この姿ではマイティキックを使ったらおそろくかなりの被害が出てしまう。」

「まじかよ!!」

「本当ですか?」

「あだからライジングマイティキックは使えない……………とりあえず殴る!!」

彼は殴りに行きノイズ達を倒していく、翼たちもアームドギアを構えてノイズたちを撃破していき最後は奏の槍が突き刺さって撃破した。

「作戦終了!!」

「そういえばアダムさん。」

「なんだい?」

「実は私たちにも新しい仲間が増えたんです。名前は雪音 クリス。なんでか知りませんが10年前盗まれたイチイバルを持っていたのですよ。」

「・・・あーそれは助けたのは僕なんだよ。彼女が追い駆けられているところを僕が助けたのはいいけどノイズが現れてね。するとあら不思議なことが起きたんだよ。イチイバルを纏ったクリスちゃんが現れたってことだ。」

「なるほどな・・・けど黒服なんてあたしたちのところにもいるけど襲ったのか?」

「それはないと思いたいけど・・・とりあえずおじさまに報告はしましょう。ありがとうございますアダムさん。」

「気にすることはないよ、僕たちは仲間じゃないか・・・とりあえず僕は帰るよ。」

彼はそういつて変身を解除をして歩くことにした。

アダム side

僕は彼女たちと別れてから考え事をしながら歩いていた。おそらく二年後に動きだすと思いたい。

だがこの世界は僕というイレギュラーのせいではほとんどが原作崩壊をしている。サンちゃんたちがいい例だ。

「・・・とりあえずフィーネの野望を食い止めないかね・・・君が思っている主さまは君を捨てたのにはある敵と戦ったからだよね・・・シエムハという・・・だが奴は一体どこにいるのか僕にも見当がつかない・・・」

僕はこれからの敵のことを考える。今はフィーネが先決だね・・・それからはどうするかと考えていくしかない。それともマリアちゃんたちが敵として現れる可能性はあるかな?

フロンティア事件を起こさせるべきか・・・それとも僕は敵として立つべきなのか? いやそれはないな・・・おそらく僕は

彼女達とは戦えない……それほど彼女達と一緒にいるのが長いのでいいのかな……

「はぁ……」

『アダム……さつきからため息だね。』

「まあ色々もあるんだよ僕の方も……ね？」

『まあ僕は聞かないことにしておくよ。』

「ありがとうリク。」

僕は。パヴァリア総社へと帰ってきた。

「ただいまー。」

「おかえりなさいおじさま。」

「おやジャンヌちゃんも今おかえりかい？」

「ええ例の取引先をぶっ潰してきたところ、やっぱりおじさまの言う通り奴らは麻薬を取引をしていたわ。」

「ご苦労だね。やはりマークをして正解だったね……ほかには何か情報を得れたかい？」

「いや残念ながら答えはNOだ。」

「アグル君も一緒だったのかご苦労様。」

「照れる……」

アグル君は男の娘としていけるじゃないかな？容姿的にも……とまあそんなことは置いといて僕たちは幹部たちが集まる部屋に入る。

そこにはサンちゃんを始めメンバーたちが集まっていた。

「おじ……じゃなかった局長……」

「やあご苦労さま、やはりあそこは麻薬取引をしていたみたいだね。先ほどジャンヌちゃんとアグル君から話はきいた。これも皆のおかげだねありがとう。」

「局長わざわざ頭を下げないでください。」

「そうです!! 私たちを地獄から救ってくれた局長のためです!!」

「……ありがとう。」

「全くアダム局長はすぐに頭を下げるわいがっはっはっは!!」

レイジンは笑いながら言っておりほかの幹部たちも笑っていた。

さてここで紹介をしておくかな？

カテリアは僕の秘書官を務めており幹部の一人だ。得意なのは銃を使った攻撃で錬金術を応用をした弾丸を使用をする。

レヴェリアは二刀流を使った攻撃が得意で主な錬金術は炎と氷を使っている。それをファウストローブは武将達が来ている鎧みたいな形になっている。

レイジンはその名の通り雷を使った錬金術が得意でその剛腕から振るわれる斧が強力である。

アグル君は前回も紹介をしたが水の力を使って戦う戦士だ。

「……………」

「どうしたワケダ？」

「何でもないよプレラーティ、何か聖遺物の情報でも得たのかい？」

「いやそれに関しては何にもないワケダ。オートスコアラーたちに当たらせているが……………結果は無しだ。」

「そうかい、だが彼女達にも休ませてあげたまえいいね？」

「わかっているワケダ。」

プレラーティにはほかにも聖遺物があるかわからないので調査をお願いをしているがヒットはしていないみたいだ。彼女の研究心が燃えている気がしてたまらないね……………

「さてとりあえず今回の麻薬事件は解決をしたからね、さて最近ノイズの数が増えている気がするのはいせいだろうか？」

「局長、確かに最近はノイズの数が増えているのは事実ですね。」

「そーねーあーしもそう思うわ。まるであーしたちの力を試しているかのようにね。」

「……………ちいあのババア……………」

「局長どうしたのですか？」

「何でもないよキャロルちゃん……………(くそファイネめ……………おそらくソロモンの杖を起動させることに成功をしてそのテストをしたのか!?だが変だ……………クリスちゃんは二課で保護をされているから杖を起動させることは不可能のはずだ……………くそ!!全然わからないな……………)」

僕は考え事をしているが正解が導かれない……やはり二年後を待つしかないのか？とりあえず会議は解散をして僕は専用の部屋である局長室へと入る。

「おかえりなさいませマスター。」

「ただいまテイキ、サナエ、アイカ、レイ……ふう」

「どうしたのマスター？何かお疲れだよーレイの胸もむ？」

「ありがとう……. だけど大丈夫だよレイ。」

「……マスターにならままれてもいいのに…….」

ボソリといっているが聞こえているよレイちゃん。

「抜け駆けは許しませんよレイ。」

「そうよレイ!!」

「そうつす!!アイカの胸ならいつでもいいつすよ!!」

「……. ふふ。」

僕は彼女達の喧嘩を見てふふと笑ってしまう。だがそれでも先ほどよりはスッキリをしている。

「ありがとう四人とも。」

「えへへへ。」

「どういたしました。」

「私たちはマスターの命令に従う人形ですから。」

「そうつすよ!!」

「それは違うよテイキ、君達は人形じゃないさ…….」

「マスター…….」

(いずれにしてもフィーネがソロモンの杖を起動させたことは間違いないとみていいだろう……. なら僕がすることは彼女達と連携をして戦うことだ。)

僕は呟きながら決意を固めるのであった。

覚醒の時

アダムが響と出会って二年がたった。彼は今もノイズを倒す為に二課と協力をして倒していた。

「スキヤニングチャージ!!」

「せいやああああああああ!!」

オーズタトバコンボのタトバキックが発動をして上空へとびノイズ達を吹き飛ばした。そのそばをミサイルが飛んで行きオーズめがけて走っていたノイズに命中をした。

「ナイスだよクリス君!!」

オーズは後ろを振り返ると赤いギアイチイバルを装着をしたクリスが腰部のミサイルポットから小型ミサイルを発射させてアダムに向かっていたノイズ達を撃破した。

『あらあらお疲れ様ね。』

そこにメズールとガメルが現れる。なお彼女達がグリードという怪物つてことは知られておりクリスたちは最初は驚いていたが二年も共に戦っているため慣れてきた。

「メズールさんにガメル。」

「やあ二人ともノイズは倒したのかい？」

「もちろん。俺頑張った!!」

「そうかよく頑張ったねガメル。」

オーズはガメルの頭を撫でて彼は照れていた、その様子をクリスは見ていて羨ましいと思った。

「あらあらねえアダム、クリスちゃんにも助けてもらったんだから撫でてあげたら？」

「ちよ!!」

メズールの言葉にクリスは慌てているが彼はそうだねといいクリスに近づいて彼女の銀色の髪を撫でている。

「ありがとうクリス、君がいなかったら僕がやられていたね。」

「.....(ヾ、ヾ)」

そして二課のメンバーが後処理をしている中アダムは変身を解除

をして緒川と話をしていた。

「ではノイズは何者が?」

「ああ弦十郎君はおそらく二課の誰かがやっている可能性があるといっているね。僕もその通りじゃないかなと思ってきたんだ。あの時盗まれたネフシユタンの鎧……さらに10年前に盗まれたはずのイチイバルがクリスちゃんが持っていたことなど……それを含めてもね。」

「そうですね……それとアダムさん、翼さんが最近あなたと話をしていないとブツブツ言い始めまして……」

「あははははすまないね、僕も忙しい身だからね。奏ちゃんと翼ちゃんのCDなどは買ったたりするけどね(笑)」

彼はツヴァイウイングのCDを買ったりしているフアの一人で響とはツヴァイウイング同盟を組んでいるほどである。

あれ?どうして響の名前が出てきたのかというと彼女がリハビリが終えてからも交流を続けておりそこからツヴァイウイングの話となりそれから彼女とは同士とお互いに手を組むほどである。

アダムは緒川と少しだけお話をした後ガメルたちを連れて総社へと戻っていく。転移石を割り魔法陣が発生をして彼らは戻ってきた。

「お帰りのワケアダム。」

「ああプレラーティありがとう。それから何かあったかい?」

彼女は首を横に振ったので彼はそうかいといい両手を組んでいた。二年間で発生をしたノイズの数が増えていることに加えて彼自身も探しているがまだ見つからないのだ。

(やはりシエムハの遺体などは簡単に見つかったりしないか……いずれにしてもあれは厄介な存在だからね……)

アダムは考えながらも局長室へと戻っていき疲れているとサンジェルマンが入ってきた。

「失礼します局長。」

「やあサンちゃんどうしたんだい?」

「局長が戻ってきたと聞きました。それでやってきました。」

「はははそういうことか、なら今の僕は局長じゃなくてただのアダムおじさんになるね(笑)」

「もうおじさまったら……しかし最近はずの数が増えて来ましたね。」

「ああそれは僕も思っていたところだよ。敵の数は僕が予想をした以上になってきているね。あるところでは完全聖遺物の研究をしているところがあつたりしているから油断ができない。」

「わかっています。聖遺物はきちんとした方法で使わないと危険なもの……それを回収するのが私たちの使命でもあります。」

「そのとおりだ。さて僕はお風呂に入るとするかな。」

アダムはお風呂場に移動をするがサンジェルマンも一緒にいる。

「あれ?」

「その……わたしもよろしいですか?」

「……まあいいけど。」

彼女は服を脱ぎだして大きなものが出てきた。彼はそれを見ないように脱いでいき二人でお風呂に入っていく。

「いい湯ですねおじさま。」

「ああ……」

「どうしたのですか?」

「ちよつとだけね考え事をしていただけだよ。僕たちは随分長い生きをしてきたなと思つてね。この日本だつて前に来た時よりも発展をして驚いているぐらいだよ。」

「おじさま日本に来たことがあつたのですか?」

「といつても古代時代になるけどね……そこで僕は親友と呼べる男と出会つている……. だけど彼はもういない……. でも彼は僕の中で生きていると信じている。」

『アダム……』

「おじさまが言っていたリクさんって人ですか……. どういう人なんです?」

「……. リクは本当は戦いなど好きじゃない男だつた。彼はこういつていた戦いは憎しみを生むものだから僕は戦うだけにクウガの

力を使いたくないとね……この力は妹や仲間を守るための力だつて言っていたのを思いだすよ……だからこそリクは大いなる闇に勝てたんだと思っっている。」

（それは違うよアダム、確かに僕は戦いは嫌いだよ？最初は戸惑ったよ……この力で次々に襲い掛かる怪物に僕は疲労などがたまって……いつまで一人で戦い続けるのかって……でもそこに現れたのは君たちだった。アダムたちの協力がなかったら僕はおそらく逃げだしていたかもしれない。感謝するのはこっちだよアダム。）

リクはアークル内で彼に感謝をしながら力を貸そうと決意を固めるのであった。

「……サンちゃんは今も後悔をしていないのかい？僕についてきてお母さんと永遠の別れをしてきたじゃないか……」

「……いいえ私はおじさまについていくことに後悔など一度もありません。錬金術やカリオストロやプレラーティたちとの出会いなど私にとつても長い歴史をおじ様たちと廻れたので満足しております。母のことは……永遠に忘れません。アダムおじさまがリクさんの魂が心の中で生きてるように私の心の中に母は生きております。だから後悔などありませんよ。」

「サンちゃん……そうだったね。」

二人はお風呂で色々話をして上がった後は各自の部屋へと戻っていき、部屋へと戻ったアダムは錬金術で作った電話機を出して電話をする。

「やあ弦十郎君僕だよ。」

『アダムかどうした？』

「なにそちらの状況は進んでいるかなと思っただね。」

『……こちらの間抜けではないからな……ある人物を怪しんでいるところだ。』

「その人物は僕もあつたことがある人物で間違いないか？」

『……なら答えを合わせてみるか？』

「いいだろうせーの」

『櫻井 了子(君)』

二人は同時に答えたのでふふふとお互いに笑っていた。

「やはり君も彼女が怪しいと見ているわけだ。」

『ああだが確実とは言えないからな、もう少しだけ泳がせてみる。』

「わかったよ。何かあつたら協力をさせてもらうよ。」

『感謝をする。』

「すまないねではお休み。」

『ああ……』

アダムは電話を切り布団の中に入り眠ることにした。

アダムside

次の日僕は外に出ていた。そばにはテイキと一緒に車で移動をしていたところ木が動いているのが見えた。

僕たちは車を止めて降りてその木のそばへとやってきた。

「マスター上に生命反応が二名確認できます。」

「了解だ。」

下の方でスタンバイをしていると上から女の子が落ちてきたので僕はキャッチをした。その髪など見たことがあり僕は名前を出す。

「響ちゃんじゃないか。」

「アダムさん!?はわわわわわわ!!」

彼女は顔を真っ赤にしているが一体どうしたのだろうか?テイキの方は頬を膨らませているし……とりあえず僕は彼女をゆっくり降ろして話をすることにした。

「響ちゃんとりあえずなんで木の上にいたのだい?」

「えつとですね。『にゃー』あららら。」

なるほどね、猫を助けるために彼女は木に登って助けようとしたのか、だが彼女は制服を着ているけど……時計を見て僕は苦笑いをする。

「響ちゃん時間は大丈夫かい?」

「……ああああああああああああああああああああああああああああああ!!どうしよううううううううううううううううう!!」

「仕方がないテイキ。悪いけど車をリディアン音楽学園に向かってくれないか?」

「了解しました。」

「えつとなんかすみません。」

「気にすることはないよ。」

響ちゃんを無事に学校まで送った僕たちは学校を離れて移動をする。さて今日はツヴァイウイングの新曲の発売日でもあるからね。予約をしたお店に向かっていた。

彼女達は一時的に休止をしてからの発売になるので僕としては楽しみになんだよね?

「すまない予約をしていたアダムですが。」

「はいはいアダムさんいらっしやい!!いつものだよね?」

この人はマスター、僕がいつも予約をしているショップ屋の店長である。最初のころからの付き合いでいつもこうして予約をしたCDを買っている。

「ふふーん」

「好きだねアダム君。」

「まあね。」

僕はCDをもらって車に戻って車を走らせていると誰かが逃げているのが見えた。

「響ちゃん? 追いかけているのはノイズ!」

僕はいそいでテイキに車を止めてもらいオーズドライバーを装着をして変身をする。

「変身!!」

【シャチー・ウナギー・タコー! シャシャシャウター! シャシャシャウター!】

シャウターコンボへと変身をして液体状となり僕は彼女たちのところへと急ぐ。

アダムside終了

現在響は女の子を連れて逃げていた。彼女はツヴァイウイングの最新曲を買いに行くときにノイズが現れて泣いている女の子がいたので一緒に救助をしたのだ。だがノイズ達はそれでも彼女たちを追

いかけており現在追い込まれていた。

「お、お姉ちゃん……私たち死んじゃうのかな？」

「大丈夫大丈夫……そう最後まで生きなきゃ……あの時の奏さんのように!!なに?歌が聞こえる……Billwisyall Nescell gunnir tron」

響の制服が敗れていきインナースーツが創成され装着されて行き最後はヘッドギアが装備されて彼女は着地をした。

目を開けた彼女は一言。

「なにこれええええええええええええええええええ!!」

「お姉ちゃんかっこいい!!」

響に装備されているのはガングニール、奏が装着をしているのと同じの物だ。ノイズ達は響に襲い掛かってきた。

「うわわわわわ!!」

響は殴るとノイズが炭化していきだが彼女は一般人である。襲い掛かるノイズに苦戦をしていると。

【スキヤニングチャージ!!】

「せいやああああああああああああ!!」

そこにオーズシヤウタコンボの必殺技オクトパニツシャーが命中をしてノイズ達が粉碎されていく。

「え?」

「仮面……ライダー?」

オーズはちらつと彼女たちの方を見てから振り返りメダルを変えてオースキヤナーをスキヤンさせる。

【タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バタトバタ・ト・バ!】

タトバコンボへと戻り地面からメダガブリューを抜いてノイズ達を切り裂いていく。

「すごい……」

すると上空からミサイルが飛んできてノイズ達に命中をして三人が着地をした。

「ええええええええええええええええええ!!奏さん!!翼さん!!クリス先輩!!」

「あ、響じゃん。」

「あーあたしのせいか……」

「二人とも今はオーズの援護を!!あなたはその子を守っていて!!」
「えつとはい。」

一方でオーズはメダガブリューにセルメダルをセットをしてバズーカモードにしている。一応ファイナルステージでタトバコンボで使おうとしていたが暴走をしたという結末に（笑）

【タ・ト・バーの必殺!!】

「は!!」

トリガーを引き赤と黄色と緑のオーズランクが発生をして砲撃が命中をして撃破した。オーズは振り返るとノイズ達の数が多くて翼たちも苦戦をしていた。

「仕方がない。四人とも離れろ!!」

オーズは右手に火の錬金術を発動させてそれをノイズ達に投げつける。その火球がノイズたちに命中をして燃えていった。

だがオーズ自身は膝をついてしまう。確かに錬金術は使うことが可能だが彼の姿を維持をするためにはあまり大きく錬金術を使うわけにはいかないのだ。

「「アダムさん!!」」

「え!?!アダムさん!!」

三人がオーズのところへ走ってきたが彼は左手を前に出す。

「大丈夫だ。」

彼は立ちあがり変身を解除をした。先ほどの疲れはなくなったが……おそらく原因は自分自身わかっている。

（やはり僕自身のメンテナンスが必要になってきている。テキタたちの調整などは僕がしているが……. だけど僕自身の体はほかのみんなとは違うからね…….）

アダムは一度目を閉じてから自身の体の調整が必要だなと考えるのであった。

アダム再び月に

「……………」

朝早くアダムは誰もいないのを確認をして転移石を持っていた。その理由は彼の体のメンテナンスのことだ。

知っている人もいればそうだが彼の体はテキタたちのような体とはかなりの構造などが違うため彼は今までは簡単なメンテナンスだけで終わらせていたのだ。だが彼自身もこの頃調子が悪いなど思いながらも彼らの前でその姿をさらしていない。

彼は両手を動かしながらも辺りを見ながら転移石を割りある場所へとやってきた。そこは地球より離れた場所であり彼が生み出された場所だ。

「もう二度とここには戻ってこないつもりだったが……………まさかメンテナンスだけで戻ってくることになるなんてね……………」
『ここがアダムが生み出された場所なのかい?』

「ああそのとおりだリク、僕が生まれた場所でもある……………さて扉がしまっているな……………まだ使えるならいいが……………ナンバーズZX001コードネームアダム・ヴァイスハウプト。」

【アダム・ヴァイスハウプト承認確認。】
しまっていた扉が開いて彼は中へと入っていき辺りを見ている。
「妙だ……………生命反応がない感じがする……………」

彼は歩きながら警戒をしていき突然として何かが接近をしてきたあまりの速さにアダム自身は構えることができない。

(速い!!)

「アダム?」

「え?」

彼は振り返るとそこには金髪の女性が立っていたが彼のメモリーにそんな人物はいない。

「誰だい君は……………それにその体は……………人間?」

「ああそういうこと、私はこのメインコンピューターですよ?」

「は?」

彼はメインコンピューターがなぜ人の体をもっているだろうかと思っっていると彼女は近づいてきた。

「回路などが焼き切れているのと各部関節部分に異常があるわね。なるほどあなたがここにやってきた理由はわかったわ。これは本格的なメンテナンスが必要になるわね……ほらはやくはやく。」

彼女は彼の手を握りメンテナンスルームへとやってきた。アダムはここで生み出されたなと思いつつ眠らされる。

「さてとりあえずアダム、あなたの回路を一度落とすわね？」

「ああわかつていると思うがメモリーを消去などをしたら君を潰すよ？」

「わかつているわよそんなこと私はしないわよ。とりあえず一旦お休み。」

彼女に回路を切られてアダムは機能を停止をした。彼女はさてつといい彼の体を調べている。

「彼の体は人とだいたい同じように作られているから男性としての機能はもちろん一部分を機械類にしているからね。例えば人造人間……みたいな感じね。さてつとうわ……よく数百年以上稼働ができたわ。まあ彼自身が誰にも正体を明かしていない感じね……とりあえず自分ができる範囲でのメンテナンスをしている感じ。一度パーツなどを取り換えておかないとね。ついでに出力なども上げておいてつと……」

メインコンピューターであるコードレイはアダムの体を色々といじっていく、彼の調整などもしておりついでに彼のメンテナンスをやるように新たなものを作ったりと色々と彼女は改造をしていくのであった。

アダム side

「さあ目を覚ましてアダム。」

声を聞いて僕は目を開ける。そこには金髪の女性がいたがメインコンピューターのレイだとわかる。僕はメンテナンスベットから起き上がり指などを動かしていた。というよりも何か知らないが力がかなりみなぎっているのはなぜだろうか？

「何か僕の体にしたのかい？何か知らないが今まで以上の力を感じるだけど？」

「あーそれは簡単よ。あなたの体の調整をしたときにバージョンアツプをしているのよ。これでああなたが錬金術を使っても気にしないで済むようにね。」

なるほどね。これならバンバンと錬金術を使うことができる。前はそれを気にしながら錬金術を使っているからこれならいいか？それと気になったけどその後ろの物は何でしょうか？

「あーこれ？ここまで戻ってくるのめんどくさいでしょ？だからあなたの体のメンテナンスができるようにと作っておいたのよ。それと私もついていくからよろしく。」

「はあ!?ここはどうなるんだい？ここは創成主がいただろう。」

「主ならもういないよ？随分前に亡くなったから。私はずっとここで一人で過ごしていたのよ……そこで廃棄処分をしていた体たちを使って体のフレームを完成させたというわけ。」

なるほど、それで彼女はこの中を自由に動いているわけか、まあここは彼女一人しかいないってこともあるからね。

さて僕たちはこのデータなどを回収をして転移石を使って転移をした。

「おかえりなさいおじさま。」

「やあサンちゃんにカリオストロにプレラーティじゃないかお疲れ様。」

「まああー私たちは簡単に事を済ませるからね。」

「それでアダム、その後ろの女は誰なワケダ？」

プレラーティに指摘されて僕は後ろの彼女をどう紹介をしようか迷っていた。どういったらわかりやすいかなと……

「私はメインコンピュータレイと申します。」

お辞儀をして挨拶をしたのでまあ適当な説明をして彼女はチフォートシャドーのメインコンピュータにアクセスをしていた。

「マスターよろしいですか？」

「気にするなティキ。」

テイキがレイのことをじーつと見ているが僕は気にしないでいい、弦十郎くんと連絡を取ることにした。

「やあ弦十郎君、そのあとのこと聞きたくて連絡をさせてもらったよ。」

『ああアダム、響君は君の言う通りに仲間として加わるようになった。現在は俺や奏を中心に彼女を鍛えているところだ。』

「そうか、彼女が加われれば今まで三人でまわしているところも楽になるからね。だけど弦十郎君彼女は一般人だったからね。それはクリス君とかも言えないけどね。」

『ああわかつている。』

「とりあえずまた何かあったら連絡をくれないかい？すぐに駆けつけるさ。」

『ああよろしく頼む。』

お互いに通信を切り、原作みたいに進んでいるみたいだね……だが問題はネフシユタンの鎧などはどうなるのだろうか？ソロモンの杖を起動させるには原作ではクリスが起動させているからね……なら今回はどうなるのか……僕は気になりながらも眠ることにした。

襲い掛かるネフシユタンの鎧を着た人物。

アダムside

響君が仲間になってから数日が立った。彼女は戦いに苦戦をしながらも苦勞をしていたが僕もクウガやオーズに変身をして彼女達を援護するためにサンちゃんたちとも会合をしておりこちらからはサンちゃんやカリオストロ、プレラーティにアグル君にカテリア、レヴェリアにレイジンにキャロルちゃんたちを手伝わせている。

ほかにもテイキヤサナエたちも彼女たちと共にノイズを倒す為に奮闘をしている。さて今日は流れ星が現れると聞いていたが……：僕の目の前にはノイズがたくさん現れていた。

「さてなら……」

僕は変身をする決意を固めるとアークルが現れて僕はポーズを取り左腰のスイッチを押す。

「変身!!」

赤い装甲が纏われて行き僕はクウガへと姿を変える。剛腕でノイズ達に封印エネルギーを纏わせて爆散させる。うじやうじやと数が増えていくが突然として上空から何か放たれて僕は何かと思ってみていると響ちゃんがガングニールを纏って空から降ってきたから驚いている。

「ひ、響ちゃん?」

「……っかく。」

「ん?」

「せっかく未来と流れ星を見ようとしていたのに!! あんたたちのせいであええええええええええええええええええええええ!!」

「……」

彼女は勢いよくノイズ達を殴っていき撃破していく、怒りのままに攻撃をしているので僕は啞然として彼女を見ていた。

『なんていうか今の彼女は暴走特急だね?』

「ああまさに……危ない!!超変身!!」

響ちゃんに何か狙っているのが見えたので僕はタイタンフォー

ムへと変身をして彼女に放たれた攻撃を受け止めた。

「アダムさん!!」

「大丈夫だ!!」

タイタンフォームのボディを貫こうとした鞭が戻っていき僕は錬金術で剣を出してそれがモーフィングされてタイタンソードへと姿を変えた。

「さて何者だい?彼女を狙った敵かな?」

タイタンソードをつきつけて煙がはれるとそこに立っていたのは白い鎧を着ていた少女だ。だがその姿を僕は知っていた。

「雪音………クリス?」

『どうしてクリスちゃんか!?』

「へえーあんたがフィーネが言っていたアダムって奴か………まあいいあたしの目的はそいつだ!!」

「狙いは響ちゃんか!!」

僕はタイタンソードで彼女が放つ鞭を切っていく、彼女もほほーといい何かを手を持って指示を出している。

「出て来やがれノイズども!!」

「なに!?!」

あの杖からの影響かノイズ達が現れた、いくら僕でもこの数を一人で戦うのはまずい………だけどオーズに変身をする隙がない。

僕は超変身をしてドラゴンフォームへと変わりドラゴンロッドを振り回してノイズたちに攻撃をしているとミサイルなどが飛んできた。

僕は回避をしてミサイルがノイズ達に命中をするとクリスちゃんが到着をした。

「アダムおじさん大丈夫!!」

「ありがとうクリスちゃん。」

「来たかオリジナル!!」

「え?」

クリスちゃんは驚いている中翼ちゃんや奏ちゃんたちも到着をして驚いている。あれはネフシュタンの鎧だとわかっている。そこに

リキティダーが飛んできて僕の周りにアグル達が現れる。

「アダム大丈夫？」

「ありがとうアグル君。」

ネフシユタンの鎧を着ているクリスちゃんそっくりな子はこちらの人数が増えているのに舌打ちをしていた。

「まさかここまでそろろうことになるとは思ってもいなかったぜ。だが!!」

彼女は肩部の鞭を振り回してエネルギーの刃を発生させてこちらに投げつけてきた。全員が散開をして僕はマイティフォームへと変身をして彼女に攻撃をする。

「君はいつたい何者なんだい？」

「あんたはわかるはずだぜ？」

「……………やはりクローンで合っているみたいだね。」

「そういうことだ!!おら!!」

彼女が振り回した鞭がボディに命中をして吹き飛ばされるがサンちゃんにキヤツチされる。

「大丈夫ですか？」

「ああありがとうね。」

キヤツチされた僕は着地をしてどうするか考えていた。クリスちゃんの偽物に対してどう戦おうかと……………って敵が増えてきたな……………

「超変身!!」

僕はペガサスフォームへと変身をして銃を生成をしてペガサスボウガンに姿を変えて現れたノイズ達を次々に撃破していく。翼ちゃんたちもネフシユタンの鎧を着た人物に苦戦をしていた。

「仕方がない……………プレラーティ!!」

「わかっているワケダ!!」

彼女が放ったけん玉が命中をしてネフシユタンの鎧を着た人物は吹き飛ばされたのを見て僕はマイティフォームへ再び変身をして走りだして回転をしてマイティキックをお見舞いさせる。

「おりゃあああああああああ!!」

「ちい!!」

彼女は両手でガードをしてマイティキックをガードをした。

「ちい……これは厄介だな。まあいいここは撤退をする!!」

彼女は地面に鞭を叩いて煙が発生をした。僕はペガサスフォームになり視力などをあげてみたが……どうやら彼女は僕でも遠くに行ってしまった彼女にペガサスボウガンを放つのは無理だな……

『せめてゴウラムがいたら楽だね?』

「確かに……ゴウラムがいないのはつらいかもね……」

「ゴウラム?」

「ああクウガの相棒のメカだよ。最後の戦いの後はどこにいったのか僕もわからない状態だけどね?」

ゴウラムがいたらその足につかまって上空からペガサスフォームで見れたんだけどね……さて変身を解除をしないとね。

僕たちは変身を解除をして二課の方は話をしている中ジャンヌちゃんがこちらに来た。

「アダムおじさんどうなるのかしら?」

「わからないね。あのネフシユタンの鎧がなぜ今になって現れたのか……その狙いは響ちゃんだったこともわかった。」

「響ちゃんですか?」

「ああそのとおりだよ。だがなぜ彼女を狙っているのかは不明だね……(おそらく響ちゃんの戦闘データ及び自身がネフシユタンの鎧を装着ができるように動いているのかなフィーネ……)」

だがいずれにしてもこれからのことを考えて彼女の動きを見張っておかないとね……さておそらく次はデユランダル護衛の時期になるが、今回は翼ちゃんは絶唱をつかっていないから問題ないね。そういえば僕ってバイクなかったな……どうしようかな?

遺跡再び

アダム side

ネフシユタンの鎧を着た女の子を退かせて二課の方ではネフシユタンの鎧がなぜ現れたのかと話をしている中僕はある遺跡にやってきていた。そこはかつてリクの遺体が放置されていた遺跡へとやってきた。

「またここにやってくるとはね……だがゴウラムを探すことを考えたらここしかないな。」

『そうだね……僕の遺体があったってことはゴウラムもおそらく……』

「だといいいね。」

再びこの遺跡に探索をするのはいいけどペガサスフォームに変身をした方がいいのかな？今回は僕一人だからな……皆がいなのは最初の頃を思い出すよ。

「……僕も甘くなったかもね。ん？」

何かの形がこちらにやって来る……あれはノイズ!? オーズドライバーを装着をしてオースキャナーを取り出して変身をする。

「変身。」

【タカ！ トラー！ バッター！ タ・ト・バ タトバタ・ト・バ！】

オーズに変身をしてトラクローを展開をして襲いかかってきたノイズを切っていく。だがなぜノイズがどうしてこの遺跡に現れたのか？

考えても仕方がないオーブカリバーを装備をしてエレメントを回転させて地のエレメントで止めてトリガーを引く。

「グラントカリバー」

地面に突き刺してノイズたちに命中をして撃破する。メダルを変えて戦おうとした時何かはこちらに近づいてきたのがわかった。クワガタのようなものがノイズたちに体当たりをして撃破した。

『ううううううううう』

「あれは……」

『間違いないゴウラムだよ。だがなぜ？もしかしてアダムに託したクウガの力に反応をして蘇ったのか？』

「だったら助かるね、ゴウラムが体当たりをしていき僕はオースキヤナーを取る。」

【スキヤニングチャージ!!】

「せいやああああああああ!!」

タトバキックが命中をしてノイズたちを撃破してゴウラムはこちらの近くに浮いている。目的のものを見つけたので僕は一安心をする。

「.....」

原作通りなら完全聖遺物デュランダル護衛が始まる可能性があるね。とりあえず一旦総社に戻って作戦会議をしないとイケないな。

石を割りゴウラムと共にもどるとサンちゃんたちがこちらに走ってきた。

「「おじさま!!」」

「え?」

「なんで自分たちを連れていかなかったのかと色々と言われて僕は(.....)をする。僕は一人で行動としては行けないのかな?」

まあ局長という立場の人間だからもし僕に何かあったら彼女たちはどうするのかと聞いてきたので僕は君たちを置いては死なないさというティキが僕の所へやってくる。

「私はマスターを信じています。でもマスターが死んだら私もあとをおわせてもらいます。マスターがいない世界にいても意味が無いので。」

「ティキ.....」

少し潤んでしまったけどしなせないからねってあれ?もしかして僕が死んだら彼女たちも後を追って心中をするつもりなのか?」

「どうしてこうなったんだ?」

デュランダル護衛

アダム side

ゴウラムを発見をして僕はパヴァリア総社へと帰還をしたゴウラムはすぐに僕の部屋の中で眠りについた。疲れていたのかすぐに目が閉じられてゴウラムの力が必要だと思っただら念話すればいいかな？

とりあえずお風呂に入ろうとしたが青い髪をした男の子が立っていた。

「アグル君じゃないか？」

「うえ!？」

「え？」

彼はこちらに向いたが……驚いてしまった。そう彼……いや彼女だったからだ。最初は男の子と思っていたがアグル君は元々女の子だということに今気づいてしまった。

「えつとその……」

「とりあえずお風呂に入ろうか？」

「はい……」

僕たちは一緒にお風呂へと入りアグル君と話をする。

「さてアグル君……どうして男の子と嘘をついたんだい？僕は驚いてしまったよ。」

「ごめんなさい……でも僕この力でおじさんを助けたかった。だから女よりも男として活動がした方がいいかなと……それ……」

「なるほどね。ありがとうアグル君……」

僕は彼女の頭を撫でていた。だから彼女は顔を赤くしていたんだね……さてアグル君のことをどう説明をしようかな？まさかさらしをして胸を隠してたんだね。大きき的にはどれくらいだろうか？

「……おじさんのエッチ。」

「すまないすまない(笑)」

僕は笑いながら一緒に風呂から上がった体を吹いてあげたりする。アグルちゃんも落ち着いてたのかいつものさらしを巻いて服を着ている。

「おじさん、これは内緒でお願いするね？」

「わかったよ。君は幹部アグル君だからね……期待をしているよ。」

「局長のために戦う。」

お風呂から上がった僕に通信が来ていた。通信をとると弦十郎が映っていた。

「やあ弦十郎君どうしたんだい？」

『すまないアダム、実は……』

説明中

「なるほど完全聖遺物デュランダルをね……（櫻井了子だな……まさかガ・デインギルを使用をしているのか……そのためのガ・デインギルか……）」

僕は考えてから彼女達の護衛任務についていくと連絡をして直ちに幹部たちを集めた。

「やあ皆すまないね。今日は二課から協力要請が出てね……」

「協力要請ですか？」

「ああ完全聖遺物「デュランダル」の護衛だよ。」

「二!!」

「おいアダム!!なんで向こうに完全聖遺物が所持されているのじゃない?」

「それに関してはおそらく僕たちよりも早く動いたんだろうね。彼女達が使っているシンフォギアはプレイヤーティわかったかい？」

「ああバッチリなワケダ。あれは聖遺物の欠片を使ったものだってことがわかったワケダ。だが完全聖遺物は違う……あちらは完全に形が残っているため完全聖遺物と呼ばれているワケダ。」

「なるほど……では局長私たちも共にですか?」

「ああ今回はよろしく頼むよ。」

僕はサンジェルマンたちと協力体制がとられたのでゴウラムを起

こすことにした。

「ゴウラム起きてほしい。君の力を借りたい。」

ゴウラムは僕の声に反応をしたのか目を開けてくれた。じーつと僕の方を見てから背中の中の羽を開いて喜んでいた。

「ありがとうゴウラム……」

夜となり僕たちは二課のみんなと合流をして護衛任務に当たるためファウストローブを纏っている中僕はクウガに変身をする。

「アダム完成をしたワケダ。お前が要望をしていたバイクと呼ばれるものなワケダ。」

そうプレラーティに頼んで完成をしてもらったのはビートチェイスー2000だ。するとゴウラムはがしつと変形をしてビートゴウラムに合体をして僕はそれに乗りこんで車にはサンジェルマンたちが搭乗をして護衛任務が始まった。

僕が先に走りその後ろをデュランダルが摘まれている車がついてくる。

アダムside終了

一方トラックの中では。

「……………」

「大丈夫か響?」

「サンジェルマンさん……あはははは大丈夫じゃないかもです。」

「そうか……とりあえず緊張をしているなら一旦深呼吸をするべきだ。」

「すー……は……すー……は……あ、少し楽になりました。」

「そうだ。君はまだシンフォギアを纏ってからそれほど立っていない。最初の時の私を見ているようだ。」

「サンジェルマンさんですか?」

「ああおじさま……いや局長と共に戦っている時に最初の戦闘時では足を引っ張ってしまつてね。でも局長は怒りもせず気にしないでといわれたんだ。だから私は局長を守るために戦い方を学んだりしてきたんだ。」

「そうだったんですか……アダムさん優しいですからね。」

「ああおじさまは優しい……私に色々と錬金術の基礎などを教えてくれたのはおじさまだから。」

「おじさまなんですね。」

「ごほんごほん!!忘れてくれ……さてそろそろだな。」

サンジェルマンは銃剣を構えていると外で爆発ノ音が聞こえた。

二人は外を見るとカテリアが銃を構えて電撃を纏わせた弾をノイズたちに命中をして撃破していた。

「ノイズだと。」

「どうするの!!」

「僕は引きうける!!ティキ!!君達は別のルートを使って移動をしてくれ!!」

「わかりましたマスター。」

ティキは運転をしているトラックを別方向へと向かって走っている。クウガはカテリアから銃を生成してもらいそれを受け取った。

「超変身!!」

ライジングペガサスへと変身をしてライジングペガサスボウガンから連続した弾が放たれて次々にノイズ達に命中をして撃破していく。一方で別方角に走っていたトラックは工場へと到着をしたがそこにのノイズが現れていた。

「あーもう!!しつこいんだから!!」

カリオストロは拳にエネルギーをためてそれを連続してビームが放たれてノイズたちを貫いていく。

「確かにその通りなワケだ!!」

プレラーティはけん玉にエネルギーを集めてそれを振り回してノイズ達を撃破していく。全員が交戦をしている中鞭が襲い掛かってきた。

「させませんよ!!」

ティキは右手を剣にして放たれた鞭を切り裂く。そこにキャロルとオートスコアラたちも合流をして構えているとネフシユタンの鎧を着た人物が現れる。

「ちい……まさかここまで護衛をしているとはな……
だがあたしの目的は完全聖遺物だ!!くらいやがれ!!」

鞭をたくさん生成をしてそこから棘をたくさん放ってきた。

「くそ!!」

「近づけない!!」

翼と奏は槍と剣を使ってはじかせている。ジャンヌとレヴェリアも槍などを振り回して動けない。

「くそ!!」

キャロルは障壁を張り響と了子を守っていた。ネフシュタンの鎧はチャンスと思い近づこうとしたとき。

「おりゃあああああああああ!!」

「ぐ!!」

マイティキックを放ったクウガの攻撃を受けて吹き飛ばされる。着地をしたクウガは彼女たちを見る。

「大丈夫かい!!」

「二「局長!!」二」

「ちいノイズたちを倒したのか!!」

「ああ僕の仲間たちがね。」

アダムが指を鳴らすとノイズが現れたので驚いている。

「ノイズだと!?!」

「いやあれはアルカ・ノイズ……局長が作ったものだから安心
をしてくれ。」

「アルカ!!」

【攻撃開始!!】

アルカの指示でアルカ・ノイズはノイズに攻撃をしていた。翼たちは唾然として見ている中何かが飛びだしたのを見た。

「あれは!!」

「おらあああああああああああああ!!」

ネフシュタンの鎧を着た人物が飛びたちデュランダルをつかもうとしたが響が蹴りを入れてそのままデュランダルをつかんだ……だが突然として彼女のギアが黒くなっていく。

「いかん!!超変身!!」

クウガはライジンググマイティフォームへと変身をした。響はそのままデュランダルを振り下ろした!!

「おりゃああああああああああ!!」

ライジンググマイティキックを放って響が放つデュランダルに命中させてお互いの力が衝撃波を与えてほかの人物たちを吹き飛ばしていく。

アルカはすぐにアルカ・ノイズ達を戻してからサンジェルマンのところへとび彼女はキャッチをして障壁を張る。

そしてデュランダルが地面に突き刺さりそこにクウガが地面に倒れる。

「ぐふ．．．．．」

「!!「おじさま!!」!!」

サンジェルマン、キャロル、ジャンヌたちがクウガのところへと行きライジンググマイティから白いクウガクローイングフォームに変わってから変身が解かれる。

「なんて力だ．．．．．ライジンググマイティでも相殺ができるかどうかわからなかったからね．．．．．」

彼はデュランダルの力がこれほどかと思うぐらいに力を気を付けないと判断をする。こうしてデュランダル護衛任務は失敗に終わったのであった。

アダムは（ ⊠ω⊠ ）スヤア

パヴァリア光明結社の基地であるチフォードシャトーの一室。アダム・ヴァイスハウプトは眠っていた。

だがその周りには幹部たちが全員集まっていた。彼はなぜ寝かされているのかその理由は二課の完全聖遺物デュランダル護衛任務の際に響がつかんだデュランダルの強力な力に対抗をするためにライジングマイティへ変身をしてライジングマイティキックを放ち彼女が持っていたデュランダルに命中をしたが彼自身もダメージを受けてしまい膝をついてしまう。

「おじさま……………」

サンジェルマンは眠っているアダムの姿を見て涙を流そうとしていた、だが今は全員がいるため涙を流すことをしない。

「あら皆ここにいたの?」

「何やっているんだお前ら。」

そこにグリードVの面々が現れてプレラーティが話をする。

「そんなことがあったのね。」

「ふーむだがアダムが眠るほどのダメージを受けるなんて初めてじゃねーか?」

「そうだね……………とりあえず彼は何て指示をしているの?」

「一応は各自の仕事はやっておくことだそうだ。」

「なら仕事を開始をしておかないとね?」

メズールの言葉に全員が心配そうにアダムの方を見ていた。

「お前らアダムはお前らが思っているほど弱い奴じゃねーだろうが……………あいつを信じて仕事をしやがれ。」

アंकの言葉を聞いてアダムの部屋を出ていく幹部たち。

「やれやれ全くアダムもひどいね?」

「だな寝てるふりをしているだろ?」

「いや実際には先ほどの声で起きたよ。」

アダムはそういつて布団から起き上がりどれくらい自分が眠っていたのかと聞くことにした。

「そうねあなたが倒れてから二日になるわね。」

「そこまでか……あのデュランダルの攻撃は僕が思っていた以上強かった……おそらく奴はあのエネルギーを使って何かをしようとしているが今に不明だ……」

彼は立ちあがりゴウラムの傍にやってきた。ゴウラムは目を閉じており（ ⊠ ⊙ ⊠ ）スヤアと眠っている。

「さて彼女達にも僕が起きたことを報告アンドこれからのことについて話をしないといけないね。やれやれやる仕事が増えそうだ。」

アダムは苦笑いしながらはあとため息をついていた。そのあとにサンジェルマンたちが彼に抱き付いてきたので彼がおわわわとなったとだけ書いておく。

アダム side

とりあえず起き上がった僕はリクと話をしていた。

『アダムどうやら目を覚ましたみたいだね……まさかあのデュランダルのいう力があれほどの力を出すとは僕は思ってもいなかったよ。』

「ああ僕も甘かったよ……フィーネはチャンスだと思っているけど……ならこつちも新たな力を手に入れようじゃないか?」
『新たな力?』

「テキキ、大至急サンジェルマンたちに連絡をしてくれ。」
「わかりました。」

僕の連絡を受けて彼女達が入ってきたので本題に入ることにした。
「やあ皆……実はある完全聖遺物を見つけたという連絡を受けてね。僕たちは今からその征伐及び捕獲をしに行くよ。」

「局長その名前は?」

「ああ魔剣ダインスレイフさ……」

僕たちは転移魔法を使いダインスレイフが置かれている場所へ到着をした。僕はオーズへと変身をしてオーズカリバーを構えている。するとダインスレイフが光りだしてそこに立っていたのはダインスレイフを構える黒騎士の姿だ。

「おじさま。」

「待つてくれ僕がやる。おそらく奴の力は強大だからね……」
僕はオーブカリバーを構えていると黒騎士が走ってきて振り下ろしてきた。僕はオーブカリバーを使いそれを受け止めてその斬撃をはじかせていく。

後ろに下がった僕はエレメントを回転させて風のエレメントを発動させる。

「ハリケーンカリバー!!」

放たれた風の刃が黒騎士に当てるが聞いていなさげだね。僕はオーブカリバーを収納をしてメダルを変えてスキャンする。

【サイーゴリラ! ズウ! サゴーズ サゴーズ!!】

サゴーズコンボへと変身をして黒騎士は僕に剣を振り下ろすがパワー型のこの形態はそれを体で受け止めて右手のゴリバゴーンで殴り飛ばして吹き飛ばした。

「これで終わらせるよ。」

オースキヤナーを取りスキャンさせて必殺技を放つ。

【スキヤニングチャージ!!】

「はあああああああせいやあああああああああああああ
!!」

黒騎士をこちらに吸い寄せてからサイヘッドなどで攻撃をして黒騎士を撃破する。ダインスレイフは僕の方を見ていたが気にせずそれを手に取る。

「ぐうううううう……」

「おじさま!!」

サンちゃんたちがこちらに来るが僕は手で制止させる。

「負けるものか……僕がこのような力に!! うおおおおお
おおおおお おおおおお おおおおお おおおおお おお
おおお おおお おおお おおお おおお おおお おおお
お!!」

僕は気合でダインスレイフから流れる力を克服すると変身が解除されていたがなんかサンちゃんたちがおどろいているけどどうしたの?

「お、おじさま．．．．．ギアを装備されています。」
「ギア？」

僕は改めて姿を確認をするためにアグル君が作った鏡を見るとそこには僕の体を纏うかのように鎧が装着されており右手にはダインスレイフが装備されている。どうやらダインスレイフが僕用にファウストローブのように姿を変えてくれたみたいだ。

「悪く無いねこのデザインも．．．．．」

背中にはマントが装備されており僕は回転をってしまったいやー僕もファウストローブがほしかったけどまさかこうやって手にいれるなんて思ってもいなかったよ。

「おじさまも私たちと同じファウストローブを．．．．．」

「ああ僕自身も驚いているよ、だからこそダインスレイフが力を貸してくれたかもね。さて戻るとしよう。」

でもダインスレイフが僕の手に渡ったらイグナイトモジュールできないじゃん。

「まあいいか（笑）」

こうして僕は新たな力ダインスレイフをファウストローブにした力を似ていれました（笑）

響正体を明かす

アダム side

ダインスレイフを手に入れた僕はジャンヌちゃんと一緒に外に出
ていた。仕事を終えてからなので丁度暇をしていたのがジャンヌ
ちゃんだ。

「おじさまと一緒に。」

楽しそうにしているジャンヌちゃんを見て僕はほっとしている。
確か原作通りならそろそろ響ちゃんが未来ちゃんに正体をばらして
しまうきっかけが確かクリスちゃんがネフシユタンの鎧を着て襲い
掛かってきたときだったよね？

どかーんと音が聞こえてきた。

「そうそうこのときって……え？」

「おじさま!!」

音がしたのでまさかなと思いつつ僕はシルクハットを深くかぶ
りながら走っていき現場に到着をする。

そこにはガングニールを纏った響ちゃんが立っていた。そばには
未来ちゃんがいて彼女の方を見て目を見開いていた。そこに鞭が飛
んできたので僕はシルクハットを投げて鞭を切り裂いた。

二人は後ろを振り返ると僕が立っていることに驚いている。

「アダムさん!?!」

「二人とも無事かい?」

戻ってきたシルクハットをかぶり僕はオーズドライブバーじゃなく
てアークルを発動させる。

「変……身!!」

照井 竜が変身をするみたいな掛け声でクウガへと姿を変えた。
未来ちゃんの前で一度変身をしているので彼女は驚かない。ジャン
ヌちゃんはファウストローブを纏い隣に立っているとノイズが現れ
た。

「ジャンヌちゃんは未来ちゃんの避難をさせてくれ。未来ちゃ
ん……響ちゃんを怒らなくてくれ?彼女にも言えない事情つ

てもものがあるからね。」

「わかり………ました。」

彼女が連れて行くのを見て響ちゃんの方を向く。

「後でちゃんと話しあいなさい?」

「はい………」

僕は現れたノイズに拳で殴っていき倒していきライジングマイティへと姿を変える。蹴りの威力を抑えてライジングマイティキックを放ちノイズ達を撃破した。まさか威力調整ができるとは思ってもいなかったけどね?

響ちゃんもノイズを倒したのかこちらの方へ来ているが僕はこっちには来ないように指示を出してライジングペガサスフォームへと変身をして辺りを見る。

「そこだ!!」

ライジングペガサスボウガンを発生させてトリガーを引きライジングブラストペガサスを発射させるが相手はこちらの攻撃に気づいたのか回避をした。

「ちい!!隠れてい様子を見ていたが………まさかばれるとはな………」

現れたネフシユタンの鎧を着たクリスちゃんそっくりな女の子が現れた。ライジングペガサスボウガンを構えながらも響ちゃんの援護をするためにトリガーを引く。彼女は僕が放つ光弾を鞭ではじかせて響ちゃんが接近をして蹴りを入れる。

「ぐ!!前よりも戦闘力が上がっているだ!!」

「師匠直伝!!必殺技を放つ際に叫べ!!うおおおおおおお!!
剛腕粉碎激!!」

響ちゃんは右手にエネルギーを込めてバンカーが作動をして一気にネフシユタンの鎧の子を吹き飛ばした。

てかなんで剛腕粉碎激?一瞬だけゴッドフィンガーが思い浮かんだのは僕だけかな?ネフシユタンの鎧の子は立ちあがり頭を振っていた。

「いつて………てめえよくもやりやがったな。仕方がない………」

本当だったらこいつらに使うつもりはなかったけどな……イ
チイバルをベースに作られたあたし専用だ!! パージ!!」

キャストオフ!! 僕はライジングドラゴンになりライジングドラゴ
ンロッドを振り回してネフシユタンの鎧をガードをする。

【K i l l e r h e a v y a r m s t r o n】

今なつていった? ヘビーアームズとか言つたよね間違いない。す
ると彼女が光りだして装甲が纏われて行くと両手にダブルガトリン
グ、肩部と脚部にミサイルポットが装着された蒼いイチイバルともよ
ばれる形態になっていた。

うん間違いないヘビーアームズじゃないかな? それは。

「くらいやがれ!!これがあたしのヘビーアームズだ!!」

「ですよねえええええええええええええええ!!」

僕は叫びながら放たれたフルオープンアタックを回避をして素早
く響ちゃんを回収をした。

「アダムさん!？」

「さすがの僕もこの砲撃をふさぐ方法は難しいよ!!ちい!!」

錬金術で作った盾を出してガードをする。さてどうしたらいいの
かな? あつちちは撃ちまくっているせいで接近などができない状態だ。

すると上空から槍や剣、ガトリングが放たれてクリスちゃん偽物の
方へと放たれる。

「ちい!!」

あつちは回避をしたみたいで僕は錬金術で作った盾を消して立ち
あがる。奏ちやんたちが到着をしたみたいだね。

「お待たせしました!!」

「ごめんなさい!!」

「気にしないでくれ。」

「んでなんだあれ? イチイバルの青いバージョンか?」

奏ちやんが言うが確かにあれは青いイチイバルと言つた方がいい
ね。すると声が聞こえてきた。

「やっぱりに立たないか……」

「フイーネか。」

「まさか貴様がここにいるとはなアダム・ヴァイスハウプト。」

「そうだね。君がテキキを攻撃をした以来だよ。悪いが君をここで倒させてもらう!!」

ライジングドラゴンロッドを構えて彼女に攻撃をしようとしたがその前にノイズが現れてライジングスプラッシュドラゴンが当たってしまい僕は投げ飛ばして爆発させる。

その間にフィーネは撤退をしたみたいでノイズや青いイチイバルを纏っていた彼女が姿を消していた。

「逃げられてしまった。(思いましたよ……櫻井 了子はリディアン学園の地下でガ・ディングルを作っていたことを……)」

僕は呟きながらも彼女の野望を止めるためにガ・ディングルを先に抑えてしまえばいいじゃないかなと……その為にも僕は急いで総社へと帰ってから錬金術を使って開発をしなければならぬな……ガ・ディングルを奪うためにね? さあフィーネ……悪いけど君の野望壊させてもらうよ。

「そう僕、アダム・ヴァイスハウプトがね? ふっふっふっふ。」

アダムたちこっつそりと終わらせることにした

夜、静かになったリディアン学園……その周辺で錬金術師たちを筆頭に先頭に立っている人物はアダム・ヴァイスハウプトである。

「局長。誰もいません。」

「よしでは転移石を使いここの地下へと行く。」

「は!!」

錬金術師たちは転移石を割り彼らはある場所に転移をした。そこにあつたのはエレベーターシャフトのように見えるが間違いなくカ・ディングルで間違いなかった。プレラーティはそれに近づいて驚いている。

「これは驚くばかりなワケだ。確かにこれじゃエレベーターシャフトには見えないようにしている。」

「そのとおりだよ。さあ準備を始めようじゃないか。このような兵器は僕たちがいただくことにしようか?」

彼らは色々と準備をしていたのでカ・ディングルに色々と設置などをしていきサンジェルマンたちはカ・ディングルを見ていた。

「しかしフィーネはいつたいこれで何をやる気だったのでしょうか?」

「おそらくバラルの呪詛を解放させようとしたのだろうね。そんなことをしても……あのほうが喜ぶとは思えないしね。」

アダムが素晴らしいながらカ・ディングルの方を見ていると一人の錬金術師が声をかけてきた。

「アダムさま!!準備が完了をしました!!」

「よし転移発動目標はチフォードシャトーだ。」

「了解です。」

転移石を使ってカ・ディングルを運ぶことにしたアダムはさーてといいながら彼女を待つことにした。サンジェルマンたちも残ることにして全員がファウストローブを纏って待つことにした。

フィーネside

私はカ・デインギルを最終調整をするために二課のエレベーターシャフトへとやってきた。扉を開いてまず驚いたのがカ・デインギルがなくなっていることだ。

「なに!!なぜだ!!なぜカ・デインギルが消えているどこに行つた!!」

「それは僕たちが回収させてもらったからだよ。櫻井了子……いやファイネ。」

私は声をしたので振り返ると白いシルクハットをかぶった男がいた。

「アダム・ヴァイスハウプト!!貴様か!!」

「ああ僕だよ。カ・デインギルを使った月の破壊を止めるためにね……悪いけど月は破壊させないしバラルの呪詛は破壊させない。」

あいつは腰にドライバーとメダルを出していた。あれはオーズの方か。私はネフシユタンの鎧を着てあいつが変身をしたオーズと戦う。私の野望を砕いてくれた奴を殺すために!!

ファイネside終了

オーズへと変身をしたアダムはファイネが纏つたネフシユタンの鎧の前に立っていた。その後ろでは幹部たちがファウストローブを纏っておりファイネに攻撃をするために構えている。

「アダム・ヴァイスハウプトおおおおおおおおおお!!」

彼女は鞭を振るいオーズに攻撃をしてきた。オーズはトラクローを展開をして彼女が放つ鞭をはじかせていくとサンジェルマンとカテリアの二人が放つ銃がファイネに向かって放たれる。

「ちい!!」

彼女は鞭で二人が放つ弾丸を落としていくとそこにレイジとカリオストロが接近をして電撃と光の拳をファイネに当てて吹き飛ばした。

「ぐお!!」

「これでもくらうワケだ!!」

プレラーティイがけん玉を振り回してそれを投げつけて玉がファイネに命中をして彼女を吹き飛ばした。

「ぐ!!」

「でああああああ!!」

ジャンヌとレヴェリアが槍と剣をふるって攻撃をしてフィーネは鞭で二人をはじめかすると光弾が飛んできて彼女を吹き飛ばした。

「リキティダー。」

アグルが放ったリキティダーが命中をしてオーズはオースキヤナーを持ち必殺技を放つ。

「スキヤニングチャージ!!」

「せいやああああああああああああ!!」

タトバキツクが放たれてフィーネのボディに命中をして吹き飛ばした。

「があああああああ!!馬鹿な……ネフシユタンの鎧を着た私がやられるだと……」

「フィーネ……なぜエンキが君を遠ざけたのか……してなぜバラルの呪詛を発動させたのか君は知らないみたいだね。」

「なに……あれはあの方が私を遠ざけるために。」

「それは違う。真実は裏切り者のシエム・ハを復活させないためにバラルの呪詛を発動させたんだ。」

「なに……どういうことだ!!」

「シエム・ハは自らの権力と力を欲し彼らを裏切った。その時に迎撃をしたのがエンキだったんだ。だが彼も左手を自ら切断をしてシエム・ハを倒したが彼女は地球人類の遺伝子に自身の情報を紛れ込ませて自らのスペアボディにしていたんだ。だからエンキは自らも致命傷を負っていた彼はそれを止めるために自らの命と引き換えにバラルの呪詛を発動……残された者たちはシエム・ハの遺体を封印をして地球をさってしまった。だから君は何も知らされないままだったからね。彼は君のことを拒絶をしたわけじゃない……彼は人類の生命と尊厳をシエム・ハから守るためにバラルを起動させたんだ……」

「なら……私はそれを知らずに月を破壊をしようとしたのか？あの人在必死になって守ろうとしていたのを私は私は!!」

彼女は涙を流しているのを見てアダムはそつとハンカチを出して彼女の涙を吹いた。

「お前……」

「フイーネ……まだ君は罪を償うことができる。これからは櫻井了子としてこの世界で生きていくんだ。それが彼が君に対して言える最後の言葉でもある。君も彼の後を追うようなことはしないでくれ。」

「……だが。」

「わかっている君がしてきたことは犯罪だ。だからこそ今ここでフイーネという存在は死んだことにして君は櫻井了子としてこの世界を見守ってほしい。エンキが望んでいた世界を守るためにね。」

「オーズから変身を解除をしたアダムは素晴らしいながら彼女を連れて二課の方へと行くことにした。」

「アダムじゃないかどうした？」

「君が思っていた事件は終わったってことを伝えにね？」

「そういうことか……わかったこちらで犯人は死んだことにさせてもらう。」

「弦十郎君私は……」

「たとえ君が誰だろうと俺にとつては櫻井了子だつてことに変わりない。」

「……そうね。なら私はこれからも変わりなく櫻井了子として関わっていくことにするわ。」

「ああこれからもよろしく頼むぞ了子君。」

「ええ弦十郎君。」

二人が握手をするのを見てからアダムはソロモンの杖をどうするのかを聞く。

「とりあえずこちらの方で何とかしてみよう。ソロモンの杖を抑えればノイズが発生をすることはないと思うしね？」

アダムの言葉を聞いて二人は納得をしてアダムは轉移石を使ってチフオージュ・シャトーへと戻ってきた。すでにカ・ディングルの調

査をしていた。

「プレラーティどうだい？」

「アダムおかえりなワケダ。ああ………確かにこいつは強力な砲塔になるけどその分エネルギーをかなり使ってしまうのが欠点なワケダ。解体をしてチフオードシャトーの砲撃ユニットとして付けたほうがいいと思うワケダ。」

「なるほどね。じゃあこれは解体をするってことで決定だね？」

「それいいワケダ。」

カ・ディングルは解体されることとなり砲撃をするユニットだけはチフオードシャトーに装着されて攻撃力がない移動基地にはいいじゃないかなということとで砲身だけはつけられることになった。

「それよりもこれだね。」

「ソロモンの杖じゃないの。それをどうするのよ？」

「とりあえずふん!!」

アダムはソロモンの杖に封印の錬金術を施してノイズ達がこちらに來ないように制御を完了させる。これによりノイズが発生をすることはなくなるだろう………たぶん。

世界の歌姫

アダム side

やあ皆、アダム・ヴァイスハウプトだよ。久々にこの挨拶をしたよ
うな気がするよ。フィーネの野望を打ち砕いてから二か月がたった。
あれからノイズの出現はなくなったけど僕たちの仕事は残っている
からね。

パヴァリア総社は裏側でも活動をしていた。裏で動いている犯罪
者たちを捕まえたりと案外忙しい状態だ。

サンちゃんたちも働いておりそのトップである僕は皆以上に動い
ていたけど……

「おじさまは休んでください!!」

「そーよトップが動くのはいいけど働き過ぎ!!」

「その通りなワケだ。」

つと幹部皆に言われたので落ち込む僕であった(・ω・)。そこ
から僕は仕事をセーブをしながら働いており二か月がたった。

ある日二課から連絡が来たので僕は丁度暇をしていたので通信に
でる。

「はいこちらパヴァリア総社ですが?」

『アダムさん翼です。』

映像に映し出されたのは長い青い髪の一部をサイドテールにして
いる翼ちゃんの姿があった。そういえばこの後の話をしていなかった
たね? クリスちゃんのクローンは結局雪音家に引き取られてクリス
ちゃんの双子の妹の名前はえつとイリスちゃんになったそうだ。

さて話を戻して翼ちゃんから連絡なんて珍しいことはあるね。

「どうしたんだい? 装者としての仕事がまたできたのか?」

『あはははまあそれもありますけどまあ今回は違いますよ、実はツ
ヴァイウイングがコラボコンサートをすることになりましたそのチ
ケットをアダムさんに受け取ってもらいたいと思ひまして、すでに立
花たちにも渡しております。』

「転送確認をしたよ。確かに受け取ったよ。それでその相手はいつた

い誰なんだい？（もし僕の予想が正解をしていたらあの子だと思うが……）」

『はいアメリカで二か月で歌姫のトップに立ちました。マリア・カデ
ンツアヴナ・イヴです。』

やはり彼女か……。そりゃあそうか……。あれから6年
も立っていたら彼女だって成長をしているからね。とりあえず行
くって約束をしたので僕は眠ることにした。

さてあつという間にコンサートの日となり僕は響ちゃんたちと合
流をするためにいつもの格好でやってきた。そばにはティキと香苗
ちゃんがおりサンちゃんたちも一緒に行きたかったと嘆いていたが
すまないねとしか言えなかった。アグルちゃんも頬を膨らませてい
たのでかわいいなと思いつつ彼女の頭をなでなでしたな。

「アダムさーん!!」

「あの人がビツキーの知り合いの人!」

「やだかつこいいじやない!!」

「これはこれは響ちゃんのお友達かい?」

「はい!!安藤 創世です。」

「寺島 詩織です。」

「はいはい板場 弓美です!!」

「あつはつは元気な友達だね。僕はアダム。アダム・ヴァイスハウプ
トって言うんだよろしくね?彼女はティキというんだ。」

「よろしくお願ひします。」

「それでもう一人紹介をするよ。」

「天羽 香苗です!!」

「天羽?どこかで聞いたような……」

流石にばれるかな?まあ奏ちゃんの妹だからねってあれ?二人の
少女がこちらの方を見ているがうーんと首をかしげている。

「さすがに創世も変なあだ名つけないよね?」

「あ、当たり前だよ。（い、言えないアダッチとティティって言いかけ
たなんて。）」

なんか考えているのを見て嫌な予感はしていたが中へ入らないと

いけないだろと僕がいい未来ちゃんもはつとなり中へと入る。辺りを見てツヴァイウイングの人気もそうだがマリアちゃんの人気もすごいじゃないかと思いきや、始める前にサリウムをもらったがティキはサリウムを持ちながら首をかしげていた。

「マスターこれはいったいなんでしょうか？」

そういえばティキはこんな場所には連れていったことがなかったな、僕は前世の記憶で覚えているから何とも言えないけどね……それから始まるまでは響ちゃんが学校での様子などを聞いて楽しんでいるだなどと思いつつ話を聞いているとブザーが鳴りだした。

照明などが消えていきステージが光りだす。そこから現れたのはツヴァイウイングの二人だ。

香苗ちゃんはサリウムをぶんぶん振り回しながら姉の奏ちゃんが出てきたので興奮をしていた。

「おねえちゃああああああん!! かつこいいいいいいいいいいいい!!」

香苗ちゃんを見ながら僕は苦笑いをしながらツヴァイウイングの曲を聞いていた。まさか再びこうやって聞くことになるとは思ってもしなかったよ。さて彼女達が歌い終わると次の曲が流れてきた。

そしてステージの真ん中から出てきたのはマリアちゃんだ。あれから6年もたっているから美人さんに変身をしていた。

「ほう……元氣そうでよかったよ……」

僕は彼女が歌っている姿を見ながら元氣に過ごしていたのでほつとしていて自分がいたのでそして3時間後ライブが終わり響ちゃんたちは寮の方へと戻っていく中僕は彼女達がいる控室の方へと歩いていく。

そしてツヴァイウイングの二人を見つけると香苗ちゃんが走りだす。

「おねえちゃーん。」

「香苗!! お前も来ていたのか!!」

「うん!! アダムおじさんに連れてきてもらったの!!」

「やあ二人ともお疲れ様。いいライブだったよ。」

「ありがとうございます。アダムさんも忙しいのに来てくださってありがとうございます。」

「なに気にすることはないよ。僕は今仕事をセーブされているからね。」

「またサンジェルマンさんたちに心配をかけられたのですか（笑）」
「う…………その通りだよ翼君。」

まさか正解を言われるとは思ってもおらずに笑っているところを見つけて走ってきた女性がいた。

僕はすぐにわかった。彼女は僕の顔を見ながら涙目になりそのまま走りだしてきた。

「アダムおじさまああああああああ!!」

僕に抱き付いてきたのは皆の前ではびしっと決めている女性、マリ
ア・カデンツァヴナ・イヴが今僕に抱き付いてきた。

「おじさま、アダムおじさま…………ああ…………またお会いできて光栄です。」

「マリアちゃん6年ぶりだね？本当に美人に育ったね…………先ほどのライブ見させてもらったよ。見事な歌だったよ。」

「ありがとうございますおじさま。」

「おいおいアダムさん、あんた歌姫と知り合いだったのかよ…………」

「ああ彼女がまだ小さいときからのね？」

それから彼女とお話をしていて、あの後僕が去った後はアメリカで歌姫として動いていたそう。それから色々とお話を聞いているとこちらに走ってきた人物がいた。

「もう姉さん勝手につて…………え？」

「これはこれはセレナちゃん。」

「アダム…………おじさん？」

「久しぶりだね。」

「はい。」

セレナちゃんとも再会をした僕はそろそろ戻らないといけな
じやないかといいい二人も時間に気づいて僕も後にする。

香苗ちゃんとテイキが待っていてくれたので転移石を使って総社

へと戻っていく。ちなみにマリアちゃんとセレナちゃんとはLINEの交換はしている。

「ジャンヌちゃんマリアちゃんとあったよ。」

「マリアとですか!?それで彼女は元気でしたか?」

「ああ元気に過ごしていたよ……」

「そうですか……良かった。」

「実は明日彼女たちと会うことになっているが来るかい?」

「はい!!」

次の日、僕とジャンヌちゃんとメイちゃんが後ろにいた。僕は指定された場所へ到着をしたのでマリアちゃんにLINEで連絡をする。

『今到着をしたよ?』

『わかりました、今迎えを行かせますので。』

つと返信が戻ってきたので待っていると二人の人物がこちらの方へと走ってきた。あれは……

「「アダムおじさん!!」

「おっと。」

調ちゃんと切歌ちゃんが僕に抱き付いてきた、彼女達も大きくなっている原作通りの姿をしているがあれ?調ちゃん胸が当たっているのですが……切歌ちゃんと同じぐらいに成長をしている……だと……それから案内をされて中へ入るとナスターシャさんがいた。

「お久しぶりですねアダムさん、それにジャンヌにメイ。」

「はいナスターシャ教授。」

「お元気そうでよかったですよ。」

「あなたたちも……本当によかったです。」

「ナスターシャ教授、もしかして彼女たちはシンフォギアを持っていますね?」

「ええその通りです。」

やはりか……マリアちゃんがガングニール、調ちゃんがシユルシヤガナ、切歌ちゃんがイガリマ。そしてセレナちゃんがエンキの忘れ形見……アガートラームを纏っているか……僕はあ

決意を固めた。

「なら四人と戦わせてもらえませんか？」

「「「え!?!」」」

「君達の今の實力を知りたいからね。翼ちゃんたちとどのぐらい違うのかをね?」

アダム対FIS装者

アダム side

今僕はナスターシャさんが用意をしてくれたシユミレーション室に立っていた。そう僕は今の彼女達の実力を知りたいと思い戦うことにした。

するとまず入ってきたのは切歌と調の二人だ。サババコンビと呼ばれる2人の力を見るつてことか。

「さあ見せてもらおうよ……君たちの力をね？」

「あれ？アダムおじさんオーズに変身をしないの？」

「ふふふさあーでどうするかな？見せてもらおうよ君たちの力を!!」

僕はシルクハットを深くかぶり腰に力を込める。アークルが発生して僕は一定ポーズをとる。

「変身!!」

クウガに変身をして二人は驚いている。

「デデデデース!!」

「オーズ……じゃない？」

「この姿の時はクウガさ。次は君達の番だよ？」

「うん行くよ切ちゃん。」

「了解デース!!」

「V a r i o u s s h u l s h a g a n a t r o n」

「Z e i o s i g a l i m a r a i z e n t r o n」

二人が光りだしてピンクのギアと緑のギアが纏われていく、あれはシユルシャガナとイガリマか……。二人の準備が完了をしたのを見て僕は構える。

「行くデース!!」

切歌ちゃんが鎌を出して僕に振り下ろしてきた。彼女が振り下ろす鎌を横にかわして殴りかかろうとしたがそこに小さな鋸達が飛んできた。

「ちい!!」

マイティキックを使い僕は鋸を爆発させて煙幕を発生させて超変

身をする。

「超変身!!」

煙幕で見えない二人に接近をして素早い蹴りを入れてイガリマの鎌を奪ってモーフィングさせる。

「あー私の鎌が!!」

ドラゴンロッドへと変わったのを見て調ちやんが両手に持ったヨーヨーを上空へ合体させてそれを投げつけてきた。

「おっと。」

僕は回避をして切歌ちゃんたちにスプラッシュドラゴンを決めようと走りだして突きだす。二人は回避をして切歌ちゃんはアンカーを飛ばしてきた。僕はドラゴンロッドを離してから姿を変えて街の中へと消えた。

「消えた!?!」

「どこに……………」

さて僕を探しているけど今の僕はビルの上……………

「超変身!!さーて狙い撃つぜ!!」

ペガサスフォームへと変身をして銃を生成をしてペガサスボウガンへと変える。さらにライジング形態を発動させて彼女達が見える場所へと移動をしてライジングペガサスボウガンを構えて二人に向かって放った。

「あう!!」

「う!!」

二人はライジングブラストペガサスを受けて吹き飛ばされた。僕は着地をして彼女たちは驚いている。

「姿がさつきと違うデース!!」

「まさか今の攻撃はアダムおじさん?」

「そのとおりだよ。さてナスターシャ教授シユミレーションストップで。」

『了解です。』

シユミレーションが止まり二人はギアを解除をする。僕自身もクウガを解除をして二人にお疲れ様といって次の相手を待つ。

次に現れたのはセレナちゃんだ。僕は今度はクウガにはならずに
ダインスレイフを装着をしてファウストローブを纏う。

「オーズじゃない…………それは!!」

「僕の新しい力さ。さあ見せてもらおうよセレナちゃん…………」

「はい!! Seililien coffin airtgetlamh
tron」

セレナちゃんが光りだしてエンキの忘れ形見とも言われるアガ
トラームが装着される。元は彼の腕と考えるとやりづらいけ
ど…………僕はダインスレイフの剣を構えて彼女は短剣を構えて
いる。

「さあ遠慮なくきなさい!!」

「はい!! はああああああああああああ!!」

セレナちゃんは持つている短剣でこちらに攻撃をしてきた。僕は
ダインスレイフの剣で彼女が放つ短剣を受け止める。

「ぐ!!」

「ふん!!」

振り下ろして攻撃をするが彼女は後ろへと下がり短剣を二つほど
投げつけてきた。僕ははじかせたが短剣が僕を攻撃するように動
いている。

「これは…………ちい!!」

僕は回避をするが短剣が僕を追撃をするファンネルのように襲い
掛かる。僕はダインスレイフを置いて短剣を生成させてセレナちゃ
んが投げつけた短剣に放つ。だが作ったのはただの短剣じゃないぶ
つかった瞬間爆発が起こり僕は刺していたダインスレイフの剣を拾
い彼女に接近をする。

「!!」

彼女は短剣をすぐに二刀流で生成をして僕が振り下ろすダインス
レイフの剣を受け止める。

「お、重い……………」

「まさか短剣を追撃をするようにするとは思ってもしなかったよ。だ
けどそれで終わったらつまらないからね。だけど終わりだよ。」

「え?」

後ろから彼女に剣が突きつけられる。それは分身をした僕だった。爆発をさせた際に分身をして前からは僕が後ろからは分身が彼女に襲うようにした。

そしてシミュレーションが解除されて僕はダインスレイフ及び分身を解除をする。さて最後はマリアちゃんか・・・僕はオーズドライバーを装着をしてメダルを装着をする。

まっついているとマリアちゃんが入ってきた。

「ねえアダムおじさんお願いがあるわ。」

「なんだい?」

「私と戦うときはネフィリムを倒したあの姿で戦ってくれないかしら?」

「タジャドルかい?」

「ええ。」

「君が望むなら。」

僕はタカ、クジャク、コンドルのメダルをオーズドライバーにセットをしてオーズキャナーをスキャンさせる。

【タカ!クジャク!コンドル!タージャードル!】

僕はオーズタジャドルコンボへと変身をしてマリアちゃんは笑いだす。

「本当に・・・その姿は私たちを助けてくれた姿だわ・・・おじさまありがとうございます。」

「気にすることはない。さあマリアちゃん見せてもらおう・・・」

「ええ・・・Cranzizel bilfen gunnir zizzl」

彼女が光りだしてガングニールが装備されて行く。奏ちゃんや響ちゃんが使用するものとは違い黒い鎧でさらに背中には僕が使用するダインスレイフのマントの用に装備されている。

「・・・なるほどね。さあ始めようか!!」

僕は背中から炎の羽を発生させて彼女に向かって放つ。マリアちゃんは槍を振り回して僕が放った羽を次々に落とす。

「でああああああああ!!」

彼女は振り回す槍をこちらに向けて放ってきた。僕はそれをかわして拳で攻撃をしようとしたが彼女は背中のマントでこちらの攻撃をふさいで後ろへ下がり槍をこちらに向けて展開される。

「くらいなさい!!」

特大なビームが放たれた。僕は背中の羽を開いて空へと飛び回避をする。そしてオースキャナーをスキャンさせる。

【スキヤニングチャージ!!】

脚部のコンドルレッグが変形をして必殺のプロミネンスドロップを放つ。

「はあああああああああああ!!」

マリアちゃんはこちらに槍を構えて突撃をして僕たちは激突をした。

「ぐ!!」

「う!!」

僕たちは吹き飛ばされて僕は着地をしてマリアちゃんは吹き飛ばされたので槍を地面に刺してセーブを試みた。

「さてどうする?まだ戦うかい?」

「降参よ.....アダムおじさんに勝てない気がするわ。」

その言葉を聞いて僕は変身を解除をしてマリアちゃんもガンガンニールを解除をした。そのあとはご飯などを頂くことになり普通にナスターシャ教授と調ちゃん、セレナちゃんが作ったご飯を頂いた。

うん美味しかったとだけ書いておくさ。

「アダムおじさまお話がありますからちよつとこっちへ来てくれませんか?」

僕はマリアちゃんに呼ばれて外が見える場所へ来た。こんなところで僕を呼びだしてどうしたんだろう?

「.....あー緊張するわ。」

「マリアちゃんどうしたんだい?」

くるっと彼女は振り返り僕の方へ近づいてきた。

「.....好きです。」

「ん？」

「私はアダムおじさんのことが好きです。マリア・カデンツアヴナ・イヴはあなたのことが異性として好きなんです。あの時からずっと……」

「……マリアちゃん……」

「マリアずるいデース!!」

「抜け駆け。」

「姉さん!!」

「え？」

僕は振り返るとセレナちゃんたちが頬を膨らませていた。

「アダムおじさん!!」

「はい!？」

「私月読 調はアダム・ヴァイスハウプトのことが好きです!!」

「私もデース!! 暁 切歌はアダム・ヴァイスハウプトのことが大好きでーす!!」

「ふふ最後になります私セレナ・カデンツアヴナ・イヴはあなたのことが大好きです。」

「……え？」

告白されたのは人生で初なのかな？あ……いや前世のことも考えたら何度目になるのか……僕は化け物だからね……彼女たちといえるのは……ならサンちゃんたちはどうなるんだ？

僕自身のこと何にも教えていない。あの子たちの前でもあの形態だけはなっていない僕の本来の姿……見られたくない教えたくない。嫌われたくない……か。

「……僕は……」

「おじさん!!」

「ジャンヌちゃんどうしたんだい？」

「サンジェルマンさんから連絡があつてすぐに戻ってきてほしいって。」

「わかったよ。ごめん返事は今度させてもらうよ。」

た。そういつて僕は逃げるように転移石を割り総社の方へと戻ってきた。

黒いノイズ。

アダムside

サンちゃんから連絡を受けた僕はパヴァリア総社移動基地に帰還をして事情を説明をしてもらったことにした。

「やあサンちゃん急いで帰ってきたけど状況を説明をしてもらってもいいかな？」

「はい局長。実は連絡を受けたのは我らの調査団でして突然として謎の黒いノイズが現れたそうなので彼らはすぐに撤退をしたので被害はゼロです。」

「黒いノイズ……か……」

僕は知っている。黒いノイズってことはカルマノイズで間違いないね……まさかこの世界に現れるなんてね思ってもいなかったよ。

「なあ現場に向かうとしよう……」

僕は立ちあがり幹部や錬金術師たちを連れて現場の方へと向かった。

「この辺で陣地を撮っておりますたら。黒いノイズが現れたのです。」

「この辺でとっていたらか……」

僕は辺りを見ている。ここは遺跡に近い場所での陣地になる。だがどうしてカルマノイズが発生をしたのか不明だな……いずれにしても「局長!!」声がして振り返ると黒いノイズが立っていた。

「あれです!!黒いノイズは!!」

「……カルマノイズ……」

「カルマ……ノイズ？」

「ああ気を付けたまえ……アルカ!!」

『御意!!』

僕の前に現れたアルカ・ノイズたちは現在はノイズと同じような姿をしているってことで彼ら専用の鎧を作った。てかコードギアスのナイトメアフレームとほぼ同じだけどね(笑)

その中でアルカはランスロットアルビオンを装着をしている。

まあ原動力は違うけど空を飛んだりすることが可能で翼はエナジーウイングなどが搭載されておりほかのアルカ・ノイズたちもナイトメアフレームのヴェンセントなどを装着をしている。

アंकたちもグリードに変身をして僕はオーズに変身をしてオーブカリバーを装備をして構える。

「はあああああああああ!!」

ウヴァとアグル君が接近をしてカルマノイズに攻撃をするが回避をした。

「な!!」

「回避をした!？」

「この!!」

カテリアが銃を構えてサンちゃんと共に攻撃をするがカルマノイズは回避をして彼女達に攻撃を加えようとしていた。

「させないよ!!」

僕はシールドを発生させてサンちゃんたちの前に落としてガードさせる。カルマノイズたちにヴェンセント装着のアルカノイズたちがヴァリスを構えてこうげきをするがカルマノイズは回避をして僕はその間にオーブカリバーのエレメントを一周させる。

「スプリームカリバー!!」

オーブカリバーから強力な光線が放たれてアルカノイズに命中をする。

「やったか?」

レイジが言うが嫌な予感がする。煙が晴れてそこにはカルマノイズが立っていた。

「な!!アダムの攻撃が効いていないワケだ!？」

「嘘でしょ!？」

「これは……」

僕は驚いてしまう。スプリームカリバーを受けたはずなのに無傷のカルマノイズが立っていた。さすが厳しい敵だな……するどミサイルなどが飛んできて僕たちはいったいどこからと見ていると上から響ちやんたちが到着をした。

「アダムさん!!」

「無事ですか!!」

「二課のみんな!? どうしてここに。」

「ああ突然として謎の反応が出てな。それで二課に出動命令が出たってことだ。んでなんだあの黒いノイズは……」

「気を付けたまえ奴は強い!!」

僕たちは構えていると鋸や鎌、ビームや短剣がカルマノイズに命中をした。FIS組の方も到着をしたみたいだ。

「おじさま!!」

「マリアちゃんたちどうして!!」

「ナスターシャ教授から謎の反応が出たと聞きました。」

「急いで飛んできたんです。」

「その通りです!!」

ここで9人の装者が集まっているが……カルマノイズにくのかどうか……僕はメダルを変えてこの形態に変わる。

【コブラ! カメ! ワニ! ブラカーワニ!】

ブラカワニコンボに変身をしてカルマノイズが攻撃をしてきた。

僕は腕部のカメラームでカルマノイズが放つ攻撃をガードをした。

「ぐ!!」

「二であああああああ!!」

奏ちゃんとマリアちゃんのダブルガングニールの槍が命中をしてカルマノイズは後ろへ下がる。そこに調ちゃんと切歌ちゃんのコンビネーションの鎌と鋸が放たれて回避をするが突然として動き止まった。

「謎のノイズにも影縫いは効きましたか……今だ雪音姉妹!!」

「よっしゃ!! フルオープンアタックを受けてみやがれ!!」

「ファイア!!」

雪音姉妹が放つ一斉射撃がカルマノイズに命中をして爆発を起きます。

「やった!!」

「……………」

煙が晴れてそこにいたのはカルマノイズだ。だがアツチコツチにダメージがあるみたいで効いている様子だ。

「……………」

「おじさま……………」

「わかつているが……………まさかここまで苦戦をするとはね……………カルマノイズたちの方もダメージを負っているようだしね。」

僕はカルマノイズがダメージを受けているので一機にとどめを刺そうとしたときに砲撃を受けて吹き飛ばされる。

「アダム!!」

「マスター!!」

「おじさま!!」

「……………」

僕は攻撃を受けてオーズの変身が解かれてしまう。だが今の攻撃は……………

「ほーう僕の攻撃を受けてそれだけのダメージで済むとはね……………」
その声に僕は聞き覚えがあった。いや違う……………聞き覚えとかじゃない……………間違いないこの声は。

「流石異世界僕ってところかな?」

「……………最悪だね。」

そう目の前にいたのは僕と同じ姿をしているアダム・ヴァイスハウプトがいたからだ。白いシルクハットをかぶっていた。

「おじさまと同じ姿?」

「お前はいったい誰だ!!」

「僕かい? 君達も知っているはずだよ?」

「なんだと?」

「僕はアダム・ヴァイスハウプト……………まあこことは違う世界から来たのだけどね。」

「並行世界……………か。」

「ご名答。この世界は月が壊されていないか……………まあいいさ。」
彼は持っているシルクハットを投げつけてきた。僕は手から風の弾を作りだして彼のシルクハットを相殺をした。

「ほーう錬金術をうまく使えるのかい……面白いね並行世界は。」
「何が目的だい君は……」

「決まっているじゃないか、神の力を再び手に入れるためだよ!!」
「神の力だと……」

そういうことか、つまりこの僕はかつてシンフォギアたちに敗れた
アダム・ヴァイスハウプトで間違いない。だが彼の怨念をカルマノイ
ズが吸収をしたのかこの世界で復活を遂げたというわけか。

まずいな……おそらくあいつは僕と同じならあの怪物の姿
になることができる。だが僕はあの姿になるだけにはできない……
サンちゃんたちの前で……

「まあいいさ、黄金の錬金術を発動をさせるとしようか?ここにいる
全員を殺すまでのね。」

彼は上空に浮かんで大きなものを出していた。まずい……
こんなところで発動をさせたらサンちゃんたちに被害が出てしまう。

ぼくはどうしたらいいと考えていたとき。

「Balwisyall Nexecell gungnir tr
on」

起動聖詠?だが GANG ニールと言ったね。僕は振り返ると響ちや
んはここで纏っているしなら誰が?

「おりやああああああああああああ!!」

上空から僕に攻撃をしている女の子がいた。あれは響ちゃん!?だ
が装備などはXVの装備ってことはさらに5人のシンフォギア装者
たちが降りたつ。

「アダム!?まさかギャラルホルンを通つてみたらまさかあなたがいる
なんてね!!」

「それに二人もいる……だがあちらは。」

「まさか君たちから来てくれるとはね。まあいいここは退かせてもら
う!!」

「逃がすと思うかい!!ロックカリバー!!」

僕は地面に突き刺して岩などをたくさん飛ばしたが逃げられてし
まう。

「……ちい。」

「おじさま大丈夫ですか!？」

「ありがとうサンちゃん……」

さて問題はあつちの方かな？あちらの世界の響ちゃんたちは僕の姿を見て驚いているね。

「なんだあれはアダムにあんな装備はあつたか？」

「それに今きいたかよ。あいつにおじさまって呼んでいたぞ!？」

まあそこまで驚かれてもしようがない。

「えつと助かったよ君達、とりあえずこつちに来てもらえたらうれしいのだけど?。」

「ごめんなさい。でもあなたもアダムなんですよ?。」

「そうだね。僕はアダム・ヴァイスハウプト……パヴァリア総社の局長を務めているよ。」

「サンジェルマンたちを利用をしているの?。」

「利用ね……」

すると僕の前にサンちゃんたちが立ちふさがった。

「貴様!!おじさまに向かって!!」

「え?。」

「アダムがあーしたちを利用をしている?冗談じゃないわ!!」

「その通りなワケダ。」

さらにほかの幹部たちも前に出てきた。それは錬金術師たちも……

「私たちはアダムさまに助けてもらった!!」

「そうよ!!私たちは自分たちの意思であの方についてきているの!!だからもしこの人のことを悪く言うなら……」

全員が武器を構えている。これはまずい……

「やめないか君達!!」

「邪魔をしないでください局長!!」

「そうじゃ!!このわからない餓鬼どもを!!」

「やめろ!!」

「!!」

僕は思いつきり大声を出したから全員がびくつとなっていた。普段僕はこんなんで大声を出したりしないからだ。

「君達の気持ちは嬉しい、だけど彼女たちと戦っても意味がないからだ。無意味な戦いを起こそうとしないでくれ。彼女達を許してもらえないだろうか？」

「あ、ああ………」

「す、すみません………」

まあ原作の方から来ているってことはおそらく僕を倒した後だからね。とりあえず彼女たちを連れて帰る前にほかの装者たちも連れて帰らないとね。もちろん弦十郎君たちともね。

ギヤラルホルンからやってきた装者たち。

アダム side

並行世界から僕がやってきたことには驚いていたがそこからさらに異世界の装者たちも現れて僕は彼女達を移動基地へと転移をしてほかのみんなも連れてきている。

僕は局長室の椅子に座って並行世界から来た装者たちをソファ―に座らせる。

「椅子に座りたまえ。」

「えつとありがとうございます。」

響ちやんが座つたのを見てほかのメンバーたちもソファ―に座らせる。扉が開いてヴァネッサ君が入ってきた。

「え!?!ヴァネッサさん!?!」

「え?」

響ちやんがヴァネッサの名前を呼んでいたがもしかしてXVの方は終わっていたのかな? なら可能性はあるのかな?

「さて改めて僕はアダム・ヴァイスハウプト……この組織パヴァリア総社の局長をさせてもらっている。」

「えつと私たちは。」

「ギヤラルホルンを使ってこの世界へやってきた並行世界の装者たちってことだね? わかるさ……君達が僕に向けた殺意などもね?」

「「ツ!!」」

「僕がわからないかと思っていたのかい? あれだけ僕に向けられていた目はなんで生きているのかって目をしていたからね……まあそれほど君たちの世界の僕が何をしたのかってわかるさ……」

「マスター……」

「あの……気になっていたのですが……その人は何者なんですか?」

「ああ彼女の紹介をしていなかったね。」

「始めまして並行世界の装者の皆さま……私はテイキと申しま

「本当に厄介ですね．．．．．申し訳ありません。」

「謝ることないさ．．．．．いずれにしても僕を止めないといけないね．．．．．(おそらく僕はあるの姿にならないといけないかもね．．．．．彼女達を守るためなら．．．．．僕はあの姿になる。)

アダムの決断。

アダム side

「そうか……間に合わないか。」

「申し訳ありません。プログラズキーと呼ばれるものは完成をいたしました……それを制御をするベルトがまだ完成がされておられません。」

「いや気にすることはないよ。僕も急に頼んだのに作ってもらって感謝をするよ……だが間に合わないのは残念だが……」
彼はあるものを頼んでいた。それは仮面ライダーゼロワンのプログラズキーを作成をすることだった。それと同時にゼロワンドライバーも開発をしているがまだ完成をしておらず……アダムは今回の戦いでは間に合わないなど判断をして引き続いて作っておくように指示を出す。

基地に警報とアラームが鳴りだした。

「来たみたいだね……異世界の僕。」

アダムは目を閉じて白いシルクハットを深くかぶり出動を命令を出して異世界のアダムのところへと向かう。

「やあまっていたよ。」

現場に到着をすると二課やFIS、さらに並行世界の装者に錬金術師たちがいた。アダム自身も立っており笑っていた。

「まさか並行世界の僕は仲間というくだらないものを作っていたのかいあつはつはつは!!」

「……悪いがこれ以上君を生かすわけにはいかない……君はここで倒されるさ……僕の手によってね。」

「なれるのかな君に!!あの姿を嫌っているような君が!!」
「なるさ。」

「おじさま?」

僕は後ろを振り返り彼女達に話をする。

「すまないサンちゃんに皆……僕は一つだけ皆に話していなかったことがある。」

「くらうがいい!!」

ちい大きな火球を作ったか!!今から作っては間にあわない。

「僕は人間じゃない……ぐおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

僕は服などが破れていき本来の姿、邪悪な真の姿に戻ってあいつが放った火球を吹き飛ばした。

「……これが僕の正体さ……僕の正体はただの
化け物さ……」

「お、おじさま……」

「僕は知られなくなかった。君達と一緒にいて僕は楽しいかったしこれからも君たちと接していきたいと思いいこの姿を隠してきたんだ……」

「……」

「所詮は人の真似ごとをする化け物でしかないってことだ……
なら僕は化け物らしく「化け物じゃない!!」え?」

僕は振り返るとアグル君が叫んだみたいだ。

「おじさまは化け物なんかじゃない!!」

「そうです!!おじさまは化け物じゃありません!!」

「サンちゃん……」

「アダム、お前はいったワケだ。私たちは家族だつてな。確かに隠していたことに関しては怒っている。けどそれはお前が私たちを仲間や家族だと思つての行動だろ?」

「そうねーあーしもあれだけいたのに隠されていたのは正直言えばショックよーでもその姿をさらしただけで私たちの絆が途切れるとも思っているの?」

「プレラーデイ、カリオストロ……」

「その通りだぜ旦那!!あんたは俺達を導いてくれた救世主だ!!」

「アダムさま、私たちはあなたが人間じゃなくてもたとえそのような姿をしていても私たちはあなたさまについていきます!!」

「私たちの命はすでにあなたと共にあります。」

「アダムさま!!」

「アダムさま!!」

「カテリア、レイジ、皆……ありがとう……」

「ふんくだららない……何が仲間だ!!何が絆だ!!「黙れ!!」ツ!!」

「君には永遠にわからないことだ。絆や愛をくだらないといっている君ではね!!」

僕は背中の中の翼を開いて右手の剛腕であいつを殴り飛ばした。

「貴様ああああああああ!!」

「僕はもう迷わない!!お前のような奴を生かしたりしない!!僕はアダム……アダム・ヴァイスハウプト!!彼女達を守るために僕は戦う!!」

僕はあるいつを殴っていき連続した百裂拳があいつを吹き飛ばすと僕の体が光りだす。

「え?」

突然として光出して一体何があったのかなと見ていると後ろのメンバーは僕を見て驚いている。

「お、おじさま……」

「きれいな羽……黒き羽に鎧……」

「黒き羽に鎧?」

僕はいったん着地をして鏡を生成をして確か化け物の姿になっているはずだよな?鏡を見たら僕の体には剛腕が両肩部に装着されており人間として擬態をしていた顔が現れていた。さらに装着をしている姿がダインスレイフのような黒いアーマーのようになってうた。

「あれってアマルガム!」

「ああ立花がしているような姿だ。」

「おのれええええええええ!!」

僕の周りに皆が集まっていく。そこには僕がラッシュで吹き飛ばしたアダムが立っていた。

「もう許さん!!下等な猿が!!」

「その猴にやられた君はどうなのかな異世界のアダム・ヴァイスハウプト君。僕は君のようにはならない。完璧な存在など必要ないからこそ君は処分されたんだ。」

「黙れ黙れ黙れええええええええええええええええ!!」

「皆・・・・・・・・いくぞ!!その前に受け取りたまえ・・・・・・・・僕の奇跡を!!」

僕はフォルニックゲインを響ちやんたちに当てると彼女たちのシンフォギア形態の姿が変わっていく。

「こ、これは!？」

「エクストライブモード!？」

「なんだよこれ!!」

初めてなった響ちやんたちは驚いているが僕はこのアダムギアを纏いまさかあの化け物の形態がシンフォギアのようになるとは思ってもいなかったよ。

「ふふふ。」

『アダム・・・・・・・・笑っているよ(笑)』

「そういうリクこそ、驚いていないね?」

『僕は知っていたよ?君の中で過ごしているからね。』

そうだった、リクは僕の中にいるから考えていることなどがわかってしまうんだった。さて話は後だね?

「ぐおおおおおおおおお!!こうなったら・・・・・・・・お前たちを殺してこの世界を僕の物に!!」

「させるか!!僕たちは戦うさいくぞ並行世界のアダム・ヴァイスハウプト!!」

決戦。

「許さんぞ!! 貴様たちいいいいいいいいいい!!」

並行世界のアダムは真の姿に変身をして全員に襲い掛かってきた。アダムは黒い腕を展開させて彼が放つ剛腕をガードをした。

そこにダブル響が接近をしてアダムのお腹を殴った。

「うご!? おのれ!!」

連続した光弾を飛ばしてきたがアグルとカテリアなどが相殺をしてそこに翼などが接近をして攻撃をする。

「すげー!! 力がみなぎってくるぜ!!」

「ああ私も今までギアを纏ってきたがここまでの力は今までない!!」

「くらいやがれ!!」

「プレゼントですよ!!」

ダブルクリスはレーザー砲を放ちイリスはターゲットロックをしていた。

「くらえ!! フルバーストアタック!!」

ミサイルやガトリングの雨も命中をしてアダムは吹き飛ばされる。さらにそこにダブル切歌とダブル調が接近をしてお互いのコンビネーションアタックでアダムにダメージを与えていた。

そこに黒い鎧を装着をしたアダムが肩部の拳で並行世界のアダムの顔を殴る。

「ば、馬鹿な!! 僕は君なのになんでここまで違うのさ!!」

「.....僕は僕でしかない。この長い時を過ごしてきた僕は色々と見ていたからね。彼女たちとの出会いもその一つだ。そして何よりも家族として彼女たちといることで僕は心が嬉しかった。だからこそそれを否定をする君は永遠にわからないことだ!!」

そのまま殴り彼は手にダインスレイフを持つ。響達はアダムが持っている剣を見て驚いている。

「あれって!!」

「ダインスレイフ!?!」

「どうして彼があれをもっているデース!!」

「おのれ!!」

「させないアグルストリーム!!」

「雷撃砲!!」

「そーれ!!」

「くらうがいいワケダ!!」

アグル達はアダムの邪魔をさせないために並行世界のアダムに攻撃をして吹き飛ばした。

「であああああああああああ!!」

サンジェルマンとジャンヌが銃剣と槍を突き刺して彼の体を切りつける。

「おのれええええええええええ!!」

「であああああああああああ!!」

ダインスレイフを持ったアダムが並行世界のアダムを切りダメーヂを与える。彼はそのまま蹴りを入れてそこに装者たちが手をつないでいた。

「今だよシンフォギアのみんな!!」

「皆立花に力を託すんだ!!」

並行世界の翼の言葉に全員が手を出してエネルギーが響に集まっていく。

「させるかああああああああ!!なに?」

「邪魔はさせないよ!!」

並行世界のアダムはアダムが発生させた鎖で動きを止められる。

「うおおおおおおおおお!!シンフォギアああああああああああ!!」
ああああああああああああああああああああああ!!」

彼女の右手のギアが大きくなりそのまま突撃をしていき並行世界のアダムは口を開いて砲撃をしたが彼女はそのままドリル状に回転させた拳でアダムが放った砲撃を粉碎をしてそのまま彼の口に突撃をして巨大なドリルが回転をして彼の体をえぐらせていく。

「ぐおおおおお・・・」

「終わりだよ。君は再び彼女達に負けた・・・それはなんでかわかるかな?それは仲間や絆、そして諦めないという心が君を打ち破つ

たんだ。だから彼女達は今までの戦い抜いてきた。フィーネにネ
フィルム、そしてキャロルに君……そしてシエム・ハの戦い
をね。そして今回も僕たちの絆などが君に勝ったんだよ。」

「ぐああああああああああああああああああ!!」

並行世界のアダムは体を貫通されて響はそのまま着地をした。ア
ダムはシルクハットをかぶり並行世界のアダムを見る。

「さようなら並行世界の僕……」

そのまま爆発をしてアダムは終わったなど呟いて爆発をした場所
を見ていた。

「アダムさーん!!」

彼の世界の響が手を振ってこちらを見ていたので彼は歩いていき
彼女たちのところへと到着をする。

「よく頑張ったね皆。強大な力を持った敵も恐れずによく戦った。本
当によく頑張ったね?」

「もちろんです。」

「おうさ。」

「ありがとうございますおじさま。」

「褒められたデース!!」

「えへへへ。」

「局長。」

「君達もありがとう……こんな化け物である僕を家族とって
くれて……」

「まあそれはいいワケダがアダム、あの怪物の姿になることはできる
のか?」

「……やってみよう。」

彼は皆から離れて先ほどの姿に変身をしようとしたがああ黒き
アーマーが装着される。彼自身もこれはいいんかと思いつつ考え
ているとレイが近づいてきた。

「アダム、それは進化をしたのよ。」

「進化?」

「そう奇跡の進化ってやつね。あなたはあの化け物になることはなく

なっただってことよ。」

「そんなことが起こるのかい?」

「普通は起こらないわよ。けどあなたのことを思う彼女たちの思いがあなたに新たな力として目覚めたってことね。」

「そんなことが………」

彼は色々と考えることがあるが……今は解決をしたことを喜ぶことにした。

「さあ皆パヴァリア総社へと戻るとしよう。今日はパーティーだ!!」

「「パーティー!!」」

何人かは目を光らせて苦笑いをしているメンバーが多かった、アダムはパヴァリア本社に連絡をしてパーティーの準備するように指示をして基地へと戻る。

アダム side

「ふう………」

僕は局長室に戻って椅子に座っていた。まさかあの化け物形態が新たなファウストローブのようになるとは思ってもいなかったし……あの化け物になることがなくなったのは嬉しかった。

『さらに言えばあの子たちの言葉を聞いて一番うれしかったじゃないの?』

「リク……人の心を読むんじゃないよ。」

『あはははごめんごめん。』

全く、だがリクの言う通りだから事実なんだよね? 家族として受け入れてくれた彼女達を僕は守るためにね?

僕はプログライズキーを持ちライジングホップパーキーを持ちゼロワンドライバーは完成をしないかなと待つことになる。これさえ完成をすれば三人のライダーに変身することになるからね。

ティキにイズのようにしてもらおうかな(笑) さーて………どうしようかな?

「マスター失礼します。パーティーの準備が完了をしたそうなのでお呼びに参りました。」

「速いねティキ。」

「ええ皆が手伝いをしてくれましたのですぐに終わりました。」
「わかったよすぐに行くよ。」

テイキに連れられて僕はパーティー会場へと移動をした。そこには皆が話をしており僕が到着をした。

「局長。」

「やあサンちゃんお疲れ様。」

「いいえおじさまこそ。」

「おじさまあああああああああああ!!」

「うぐ!!か、香苗ちゃんにメイちゃん。」

勢いよく抱き付いてきたのは香苗ちゃんとメイちゃんだった。僕は腰を抑えながらもなんとか踏ん張った・・・けど痛いのは事実だ。

「こらメイ!!」

「お姉ちゃん痛いよ!!」

「痛いよじゃない!!アダムおじさんだって痛いだよ!!」

「あははは大丈夫だよジャンヌちゃん（本当は痛いけどね?）」

僕はこつそりと腰に治療鍊金を使い回復させてほかのところをまわっていた。まあ響ちゃんたちはががつと食べているね。ってあれ?並行世界の調ちゃんが胸を見ている?・・・

「えつとどうしたの?」

「な、なんで・・・」

「え?」

おそらくこの世界の調ちゃんの胸が発達をしているから自分の胸を見ているからね・・・僕はさすがに胸の大きくする鍊金術は知らないからな・・・そういえばカリオスト口達のあの胸にしたのってサンちゃんだよね?」

「?」
そういえば彼女は男装をような格好をしていなかったな、すげー今更だけど・・・今はお姫様のようなドレスを着ているしいつもの格好を思っていた。うん移動をする時だけ男装のような格好をしていたわ。

移動をしないときはスカートを普段はいているのを．．．．．さ
て僕もお酒を飲みながら今回の戦いに勝利をしたので外を見ながら
綺麗な星空が空を映し出していた。

「ふふ夜空に乾杯ってね？」

あんたを止めることができるのはこの僕だ!!

並行世界のアダムを倒した我らのアダムたちは勝利パーティーを開いてそれぞれでお酒を飲んだりして楽しんだ。

そして並行世界の装者たちが元の世界へ戻ることになる。

「アダムさん色々とありがとうございました!!」

「僕の方こそ感謝をするよ。またいつでも遊びに来るといいよ……」

「はい、定期連絡の時は必ず……」

「なるほど君達はほかの世界にもここだけじゃなくて別の世界にも行くことができるってことか……イイナー……僕も行きたいんだけどな……」

「「おじさま!!」」

「じよ、冗談だよ……」

サンジェルマンたちの気迫にビビってしまうアダム、並行世界の装者たちは苦笑いをしながら彼らを見てギャラルホルンへと入っていく。

「響君。」

「はい。」

「君の拳は確かに攻撃をするかもしれない……だがつかもうとする手を離したりはしないでくれ。」

「わかりました!!」

響が入っていくと扉が小さくなりアダムはじーつと見ていた。

(あちらではシエム・ハも止めたんだ……だがもし困ったときはいつでも来たまえ、君たちも僕にとっては大事な家族だからね。)

アダムは心の中で彼女たちの無事を祈りサンジェルマンたちの方を見る。彼女達は笑顔でアダムを見ていた。

「さあ僕たちも戻るとしようか?」

「はいおじさま。」

「そうですよアダムお・じ・さ・ま(笑)」

するとレヴェエリアがアダムの右手に抱き付いてきた、その豊満な胸

分でとどめを刺すとは思ってもいなかっただよ……目を覚ましたらサンちゃんたちがごめんなさいごめんなさいとずっと謝っているし、別に僕は怒ったりしてないから大丈夫なだけだな……さして話は置いておいて僕は開発室へとやってきた。

「やあドクター例のあれが完成をしたって来たよ?」

「はっはっはっは!!私の1000パーセントの頭脳により開発されたこのゼロワンドライバーですぞ!!やはり私は才能の神だああああああああああああああ!!」

うわーこの人なんだろう?壇 黎斗神みたいなテンションなんだけど開発としては一流の腕をもっている。けどそのテンションだけはなんとかしてもらえないだろうか?とりあえず僕はゼロワンドライバーを腰に装着をしてライジングホッパーキーを押す。

【ジャンプ】

そのままゼロワンドライバーの前に置きオーソライズする。

【オーソライズ】

無理やりではなく許可が得たのでキーを展開をしてゼロワンドライバーにセットをする。

「変身。」

【プログライズ!ライジングホッパー!!】

バッタ型のが出てきたときは驚いたけどそのまま僕に装着をして仮面ライダーゼロワンに変身する。

「……………」

僕は腕や足、首などを動かしていた。ライジングホッパーの姿のままとりあえずジャンプを試してみた。オーズのバッタレッグと同じ感じだね?チェックなどを完了をしてほかのライズキーを使ってフォームチェンジを試みよう。

「これはハヤブサかな?」

【ウイング!】

先ほどと同じようにハヤブサのライブモデルが発生をして僕の周りを飛んでいる。

【オーソライズ!】

展開されたキーをライジングホッパーキーと入れ替えてセットをする。

「プログライズ！フライングファルコン！」

仮面ライダーゼロワン フライングファルコンへと変身が完了をする。ライジングホッパーの装甲がずれてそこにフライングファルコンがアーマーとなり姿が変わった。僕は空を飛んでいる。

「なるほど……フライングファルコンは空を飛んだりすることが可能ってことか……タジャドルだね？」

それからバイテイングシャーク、フレイミングタイガー、フリージングベアなどをチェックをしてからゼロワンドライバーを外して変身が解除される。

「アダムさまついでに武器も完成をさせております。」

「カバン？」

そこには緑色をしたカバンに青色をしたカバン、最後は紫のカバンみたいなのが置いてあった。まさかこれが武器？

「はいアタッシュシリーズというものです。それぞれアタッシュカバリバー、アタッシュショットガン、アタッシュアローという武器になります。さらにキーをセットすることでそのキーに対応をした必殺技を使うことが可能ですよ。」

「なるほど……ありがとうドクター。大切に使用してもらおうよ。」
「いっっひっひっひっどういたしまして、まだまだキーは作成をしていますのでお楽しみに待っていてください。」

「了解だ。」

一応今現在キーを確認をしようか？ライジングホッパー、シューティングウルフ、フライングファルコン、バイテイングシャーク、フレイミングタイガー、フリージングベア、パンチングゴング、ラッシュングチャーター、ライトニングホーネット、ブレイキングマンモスぐらいだね。

それで次に完成をするのがステイングスコープオンとアメイジングヘラクレスとガトリングヘッジホッグ、さらにはショットライザーという武器兼変身アイテムを作るそうだ。

そういつていると連絡が来た。

「やあどうしたんだい？」

『局長申し訳ございません、忙しいところ……実はある麻薬組織が動きだしまして……』

「なるほど……わかった。場所を教えてくださいませんか？僕自ら向かうとしよう。」

『局長自ら!?!』

『そんな!!局長が来なくても我々だけでも!!』

「いいや君達が奮闘をしているのに何もできないのはいけないからね。」

『わかりました。奴らは飛行機を使って逃走をしようとしております。我々もここを占拠したら向かいます。』

「わかったよ。」

さて僕は転移石を使って彼らが使おうとしている飛行機のところへ行くとしよう。

アダムside終了

外国。

「くそ!!パヴァリア光明総社め!!せつかくの取引が!!」

「ボス奴らはオートマシンに苦戦をしているぜ今のうちに逃亡を!!」

「逃がすでも思っているのかい？」

「「な!!」」

彼らは声をした方を見ると飛行機の前にアダムが立っていた。彼はシルクハットをかぶって彼らを見ていた。

「き、貴様は!!」

「パヴァリア光明総社局長、アダム・ヴァイスハウプト。」

「貴様がアダムか、おいお前ら!!」

「「へい!!」」

するとボディが敗れていき機械の体が現れる。

「ロボット……」

「そのとおりだ!!お前らそいつを殺せ!!」

「「へいボス。」」

ボスの言う通りにロボットたちはアダムに襲い掛かってきた。一機のロボットが放つ剛腕を彼は回避をしてゼロワンドライバーを着する。

彼はパンチングコングキーを持ちスイッチを押す。

【パワーー】【オーソライズ！】

ゴリラ型のライブモデルが発生をしてロボットを殴っていく。

「変身。」

【プログライズ！パンチングコング！】

仮面ライダーゼロワン　パンチングコング形態へと変身をした。

「な、なんだその姿は!!」

「ゼロワン。それが僕の名前だ。」

「ちいお前ら!!」

ボスの前にロボットたちが立ちふさいだ。パンチングコング形態のゼロワンはそのまま突撃をしていき一機のロボットの右手で殴り頭部を破壊した。

「な!!」

ほかのロボットたちは攻撃をしようとしたがゼロワンは振り返りロボットの胴体に蹴りを入れて一機が吹き飛ばされる。

残りの一機を彼は必殺技を決めるためにキーを押し込む。

【パンチングインパクト!!】

右手にエネルギーを集中させて彼は走りだしてそのまま強烈な剛腕をお見舞いさせる。

パ

ン

チ

ン

グインパクト

パンチングインパクトを受けたロボットはそのまま後ろに倒れた爆発をした。

「一丁上がり。」

「ば、馬鹿な俺のロボットが簡単に破壊されるなんて!!」

するとボスの体に鎖がガチガチに巻き付けられる。

「捕まえたぞ!!」

「観念しろ!!」

錬金術師たちが走ってきてゼロワンは無事みたいで良かったと心の中で呟く。

「ご苦労さま。皆無事みたいだね?」

「アダムさま、もちろんでございませす。誰一人も死なせないで捕まえることができました。」

彼はゼロワンドライバーを外して犯人を国の警察に渡してから錬金術師たちと共にパヴァリア移動基地に帰還をした。

彼はオーズドライバー、ゼロワンドライバーを置いて腰にアークルを発動させた変身をするわけじゃないがこれを一機に三つの力を使えないかと考える。

「あ、そうか分身を作ればいいじゃん。」

彼は次に使おうかと決意を固めるのであった。

アダムの退屈な一日。

アダム side

「.....」
やあ世界の諸君、僕の名前はアダム・ヴァイスハウプトだよ。今僕は局長室の椅子に座ってクルクル回転させていたその理由は.....
「退屈だ.....」

そうこの世界暇すぎるのだ、ではどうして暇なのか原作通りならフロンティア事件が発生をしてキャロル率いるオートスコアラーたちと激闘、さらにそこからサンジェルマンたち錬金術師たちの戦いなどがあるはずだったがそれを僕が見事にぶち壊してしまったからね.....まず月を破壊するカ・ディングルは現在はこの基地の砲撃ユニットとして使っているから月が破壊する前に事件は解決をしている。

そのため月は今でも満月を見せている。いやー月見にはいい感じだよ全く。キャロル君は僕の組織の幹部をしているしイザーク君も生きている。

オートスコアラーたちもこちらの味方だしさらに言えばダインスレイフは僕の鎧となっているからイグナイトモジュールは使用不能。さらにヴァネッサ君たちも預かっているからXVは起こらないしサンちゃんたちを元々助けているからAXZもない。

「.....あれ？もしかして原作ブレイクカーナリーしている.....事件が起きないかな？」

僕はそう思いながら考えている。いや僕が悪人をしたらおそろくだけど勝てないじゃないかな？ほら彼女達僕になんというか.....信用をしているからおそらく戦えないし僕もオーズやクウガ、ゼロワンの使つて戦うから並行世界のアダムよりも強いじゃないかな？

さて冗談はこれくらいにしておいてとりあえず暇なので僕はこの移動基地の中を歩くことにした。そういえば中を詳しく紹介などしていないかった気がするな。

さて移動をしまさずやってきたのは新入りの錬金術師たちに錬金

術とはどういうことかの講義をする教室だ。今は授業はしておらず誰もいないはずだが一人の女の子がいた。

「やあ居残り勉強かい？」

「ええって局長!?!し、失礼しました!!」

「はははは気にしないでくれ、どうだい?色々覚えることが多いじゃないかな?」

「ええ錬金術は色々とありまして大変ですがでも覚えるのは楽しいです!!」

「そうかいそうかい、色々大変かもしれないがわからないことがあれば局長室にも来なさい。僕が個人的に教えたりするよ。」

「ええええええええそれはちよつと。」

「構わないよ。君も大事な家族だからね?頼ってくれてもいいんだよ?」

「は、はい!!」

「さて僕は次の部屋に行くからまたーねー」

手を振り僕は次の場所へ向かう。次にやってきたのはトレーニング室だ。ここでは自身の筋力などを鍛えたりする場所でもある。錬金術は体力などが必要だからね。戦いなどになったら特にだ……そのための場所がここで行われる。

おや今日はアグル君にレイジ君がいた。レイジ君はサンドバックにパンチを入れていた。アグル君は腹筋をして運動をしていた。

まあここは声をかけずにそーつとスポーツドリンクを置いておこう。そこから移動をして僕は図書室へとやってきた。

ここにはイザークさんが作った錬金術の資料などがかかれており僕もここにお邪魔をして調べたりすることがある。

どうやら今はサンちゃんたちが授業で授業をしているみたいで僕は寄らずに移動をする。食堂へとやってきた。

「おばちゃんご飯はあるかい?」

「おやおやアダムさんじゃないかい。ええできていますよ。」

「じゃあもらおうかな?」

そういつて僕はおばちゃんからご飯をもらい椅子に座って食べる。

うんお婆さんのご飯はいつ食べてもおいしいね。ご飯を食べた後は局長室へと戻りまた椅子に座った。

「……………暇すぎるから外へ行こう。」

とりあえず手紙を置いていき僕は街へと向かった。バーなどを持つていき僕は街へと向かった。

ノイズなども出てこないの僕はシルクハットをかぶりながら街を探索をする。いやー本当に暇だな……………いきなり上から少女が降ってこないかなーんてね（笑）

「あああああああああ……………」

「そうそう上から落ちてきた!?やばいやばい!!変身!!」

「ライジングホッパー!」

僕はゼロワンに変身をして上から落ちてきた女性をキャッチをして着地をした。危ない危ない……………まさか言ったことが本当になるなんて思ってもいなかったよ。

「しかし上からなんで落ちてきたんだ?」

僕は上の方を見ているがいったい誰なんだろうか彼女は……………シンフォギアキャラにこんな子いたかな?すると僕の周りに突然として何かが降りてきた。

「なんだい?」

『ぎぎぎぎぎぎ……………ソイツワタセ。』

奴らが言うそいつって僕の手にいる子で間違いないってことか?ならこの子はいったい……………僕が考えていると襲い掛かってきた。

「くその子を抱えながらは戦えない。なら!!」

僕は分身を作りクウガとオーズの僕が現れて二体の敵に蹴りを入れる。

「さーて仮面ライダークウガ!!」

「仮面ライダーオーズ!!」

「そして仮面ライダーゼロワン……………お前を止めれるのはこの僕だ!!」

僕はアタッシュカリバーにライジングファルコンキーをセットを

して構える。オーズの方はオーズカリバーをクウガは構えている。

【ファルコンズアビリティ！フライングガバンストラッシュ！】

【スプリームカリバー!!】

【マイティキック!!】

【「はああああああああああ!!」】

ハヤブサ型のエネルギーが発生をしてロボットに命中をしてほかのライダーたちの必殺技も命中をして爆発した。

「さて。」

僕たちは彼女たちのところへと行き倒れている彼女を見る。

「特にロボット反応とかは出ていないね。」

「ああだがあのロボットの目的は一体?」

「とりあえず彼女を連れて帰ろう。」

僕たちは一つに戻り僕はライトニングホーネットキーを出す。

【サンダー！オーソライズ！】

キーを展開をしてゼロワンドライバーにセットをする。

【プログライズ！ライトニングホーネット！】

ライトニングホーネットに変身をして背中羽を開いて僕は飛びたち基地の方へと帰還をした。だがそれが新たな事件になるとはこのときは僕は思ってもいなかった。

暴れる謎のロボット

チフォージユ・シャトー病室。アダムは運んだ少女の様子を見ていた。医師の錬金術師は今現在彼女を介護をしていた。

「……………どうだい？」

「大丈夫ですよ。傷の方は錬金術で回復させました。ですがアダムさま彼女は上空から落ちてきたといっておりましたね？」

「ああ僕も空からまさか女の子が降ってくるとは思ってもいなかったよ……………（まさかの天空の城のラピユタのようにね。）」

彼はそう呟きながらも破壊をしたロボットの残骸は回収をしていたのでプレラーティに調べてもらっている。いずれにしてもあのロボットは別次元からやってきたと想定を言いと判断をする。

「いずれにしても子のロボットのことを知っていそうな子は今ここで眠っているからね……………」

「そうですね、この子は一体何を隠しているのでしょうか？」

「それがわかれば苦労は……………ん？」

アダムは通信機がなっているのに気づいて外に出る。相手は弦十郎だったのですぐに出た。

「もしもし。」

『アダムすまない、援護をしてもらえないだろうか？突然として現れたロボットに装者たちが苦戦をされていてね。』

「ロボットだって!?!わかったすぐに向かうよ。」

アダムはすぐに幹部たちに連絡をしてプレラーティ以外を集めて出動をした。一方で二課の装者たちはロボットに苦戦をしていた。

「この野郎!!」

イリスは肩部と腰部のミサイルポットを開いて発射させてロボットに命中させる。だが後ろからロボットが次々に現れる。

「あーしつこい!!」

「は!!」

翼は剣を大剣にして衝撃刃を放ち撃破した。だが彼女たちはロボットたちを撃破しているがあまりの数の多さに苦戦をしていた。

「はあ………はあ………」

「くそ………多すぎるだろ!!」

「まだまだ出て来ますか?」

ロボットたちはシンフォギア装者たちにターゲットをロックをしておりそこからミサイルが放たれた。全員が目を閉じていた。

【ファング!オーソライズ】

するとサメ型のライブモデルが発生をして放たれたミサイルを撃破した。

【バイディングインパクト!】

「でああああああああ!!」

両手に刃状が発生させて挟み込むようにロボットたちを撃破する。

バ

イ

テ

イ

ン

グインパクト!

仮面ライダーゼロワンバイディングシャークが着地をした。響達は誰?と思ったがすぐに彼は振り返り声を出す。

「無事かい君達!!」

「アダムさん!?!」

「また新しい姿!?!」

「そう仮面ライダーゼロワンさ、この間の戦いでは間にあわなかったからね。とりあえず………」

彼は青いカバンアタッショットガンを構えてトリガーを引きロボットたちに命中させる。

さらにサンジェルマンたちも現れてロボットたちに攻撃をする。次々に現れるロボットを全員で当たって撃破した。

ゼロワンはシューティングウルフキーを出した。

【バレット!オーソライズ】

狼型のライブモデルが発生をしてロボットを次々に爪で切っ

き、ゼロワンドライバーにセットをする。

【プログライズ！シューティングウルフ！】

青い姿シューティングウルフ形態へと変わったゼロワンはアタッシュュショットガンを使い青い狼型の弾丸を飛ばしてロボットに命中させて撃破していく。そのまま走りだして左手にエネルギー型の爪を生成してロボットの装甲をえぐらせていく。

「アグルストリーム。」

「ツインバレット!!」

アグルとカテリアが放つ二人の技がロボットに命中をしてサンジェルマンは援護で射撃を放ちレヴェリアとジャンヌが突撃をして剣と槍でロボットを撃破する。

「サンダークラッシュユ!!」

もっている斧に雷を纏わせて地面を叩きて電撃を走らせてロボットを感電させる。ゼロワンはとどめを刺すために必殺技の態勢をとる。

【シューティングインパクト！】

「はああああ・・・」

足部に青いエネルギーを纏っていきそのまま走りだして蹴りの構えをする。狼型のエネルギーと共にロボットに命中させて撃破する。

シ
ユ
ー
テ
ィ
ン

グインパクト！

「ほーうまさか・・・奴を追って来たら我々に逆らう輩がいるとはな・・・」

アダムたちは声をした方を見ると先ほどのロボットよりも装甲が厚そうな敵が現れた。

「何者だい君たちは彼女のことを知っているような口調だけど？」

「知っているとも……我々はレグリオス軍団。」

「レグリオス……」

「そう偉大なるレグリオス様率いる軍団とだけ言っておこう。私はその軍団長名前をレクイムという。」

「レグリオス軍団……」

「レクイム……」

「さあ彼女を渡してもらおうか？」

「悪いけど君達に彼女を渡すわけにはいかないさ。倒させてもらうよ!!」

ゼロワンはオーブカリバーを出してエレメントを回転させて一周する。そのまま上空に振りあげて振り回す。

「スプリームカリバー!!」

ゼロワンから放たれたスプリームカリバーがレグリスたちに向かって放たれる。レグリスの前にロボットたちが立ち彼が放ったスプリームカリバーを受けて爆発した。

「おのれ……我がロボット軍団をよくも!!我らに逆らったことを後悔するがいい!!」

レクイムはそういつて撤退をした。アダムは変身を解除をして響達のところへと歩いていく。

「大丈夫かい君達？」

「ええなんとか……」

「けどあの敵は一体どこから来たのでしょうか？」

「わからないな……マリアちゃんたちにも連絡をしておかないとね……」

突然として現れた謎の軍団レグリオス軍団、彼らの目的はアダムが保護をした女性だった。果たして彼女を狙う理由とは!!

目を覚ました女性

アダム side

ふう……まさかこの世界に謎のロボット軍団がやってくるとは思ってもいなかったよ。並行世界のアダムを倒して平和を取り戻したと思ったらまさか新たな敵がこの世界へとやってくるとは思ってもいなかったな。

奴らは言っていたな、あの軍団を彼女は知っていると…….
とりあえず起きていることを信じて僕は病室の方へと歩いていった。
「レグリオス軍団…….か、まさか原作とは違う敵が現れるとは思ってもいなかったよ。」

病室の前に到着をして僕は中へと入る。彼女が眠っているであろう場所へ行くとそこには目を覚ましていた女性がいた。

「…….あなたは？」

「目を覚ましたみたいだね。僕はアダム・ヴァイスハウプトって名前さ。君が上から落ちてきたから驚いたよ。」

「上から…….そうだ私はレグリオス軍団に襲われて…….それで…….」

「君は奴らのことを知っているんだね？」

「奴ら…….まさかレグリオス軍団と戦ったのですか!？」

「そうだ。突然として襲い掛かってきた彼らと僕たちは戦った。まあ何とかひかせたけどね。」

「あいつらを…….」

彼女は僕の言葉に驚いている表情だったので僕は質問をすることにした。

「教えてくれないか?あいつらは何者で…….どうして君が追われていたのかを…….」

「ええ…….奴らレグリオスは元々はあんな兵器軍団ではありません。元々彼らは私たちが開発をした作業ロボットたちなのです。」

「作業ロボットがどうして?」

「…….ある日のことでした。奴らは突然として私たちに対して

降伏宣言をしてきました。もちろん人間側はそんなことが許されてたまるかと作業ロボットたちに攻撃をしました。」

「だが結果は？」

「はい……彼らは自己進化をして兵器などを作りそれで攻撃をしてきました。そこからロボットたちは次々に占拠をしていき……ついに国家は滅亡……彼らはそこからレグリオス帝国を作り私たち人間を排除をしてロボットだけの世界を作ると宣言をしました。ある日、彼らは私にあるデータを託しました。それはレグリオス軍団のデータが入っていました。スパイの一人が命と引き換えに手に入れたものでした。もちろん彼らはそれをとり返す為に襲撃を受けました。私は仲間たちの必死の行動でなんとかこの世界へ逃げることができました。」

「なるほどそれが君が上空から降ってきた理由なのか……」
それがレグリオス軍団が生まれた理由か……そして彼女を追いかけるためにこの世界へとやってきたということか……僕は彼女からもらったディスクをテキキに渡してプレラーティに持っていくように指示を出す。

いずれにしても彼らの進行を止めないといけないか……
アダムside終了

ある世界の城。

「レグリオスさま、レクイムただいま戻りました。」

「ご苦労レクイム……随分ボロボロになったな……」
「申し訳ございません。奴がいる世界は特定をしましたが……我らに逆らう者たちがおりましたそれで苦戦をしました。」

「ほう我らに逆らうものがいたとはな……異世界の戦士と言ったな？」

「は!!」

「レクイム、お前を行動隊長一号に任命をする。必ずやあの女を捕まえろいな？」

「もちろんでございます!!では!!」

レクイムはそういつて扉を出ていきレグリオスは玉座に肘をつい

た。

「あらあら随分と怒っているわねレグリオス。」

隣には人間のような女性が立っていたが彼女はアンドロイドである。

「まあなコーナリア……今更だが後悔はしていないのか？」

「何が？」

「お前をアンドロイドに改造をしたことだ。私は自らの体を呪っているさ……レグリオスってつけられたが元々は一人の人間だった俺を奴らは改造をして今の体になっている。」

「ふふふ別に今更過ぎるわよ？」

「……これは我々が対する復讐でもある。だが異世界にまで手を伸ばそうとするとはな……」

「そうね……どうするの？」

「……やむを得まい。戦いは好きではないが……これ以上我々のような存在をうまれるわけにはいかないからな。それに逃げたのは私たちの娘だそうだ。」

「!!」

「……おそらく彼女は私たちが死んだと思っているからな……」

「そうね……」

「……はあ……」

レグリオスはため息をついてレクイムのことにも気になるが自分たちの娘のことにも気になる。

一方でアダムはマリアたちと連絡をしていた。もしかしたらそこらにも現れる可能性があるってことを通達をして通信を切る。彼女達は現在は日本に暮らしておりマリア自身も日本を拠点として活動を再会をしている。

「アダムお待たせしたワケダ。」

「やあまっていたよプレラーティ。」

「正直言って驚くことばかりなワケダ。」

「どういふことだい？」

「あの中にあっただのは脳髓だったぞ。」

「な!!」

全員が驚いていた。プレラーティが調べたロボットの残骸の中には脳髓が詰められていたことを……

「そしてもう一つこのディスクには恐ろしい計画が書かれていたワケだ。」

彼女はセットをするとそこに書かれていたのはロボット改造計画だった。奴隷の脳髓を使いロボットの体に移植して24時間働かせるというディスクだった。

「これは……」

「なんてことを!!」

「……彼女はこのことを知っているのかな?」

「いや知らないと思うわよ?」

「……プレラーティ、これを大至急二課とF I Sに送信してくれ。」

「了解なワケだ。」

プレラーティは大至急二課とF I Sに転送をしたときに警報が鳴りだした。街でロボット軍団が暴れているという情報だ。

「こんな時に。」

アダムたちは現場へと急行をする。街ではレクイム率いるロボット軍団が暴れていた。

「暴れる!! そうすれば奴らは出てくる!!」

「スキヤニングチャージ!!」

「せいやああああああああ!!」

タトバキツクが命中をしてロボットたちを吹き飛ばした。

「来たか!!」

「レクイムって奴か……」

「以下にもレグリオス軍団行動隊長レクイムだ!! やれロボット軍団!!」

レクイムの指示を受けてロボット軍団が襲い掛かってきた。オーズはタカヘッドの視力プラス透視能力を発動させて彼らの中を見る。(脳髓がない!? もしかして……レグリオスって奴だけが?)

アダムはそう思いながら右手に錬金術を発動させて大きな火球を放ちロボットたちを破壊した。

「おじさま!!」

「……………彼らの中に脳髄はなかった。」

「くらええええええええ!!ライトニングクラッシュャー!!」

拳に電撃を帯びらせてそれを地面に叩いてロボットたちを次々に感電させていく。オーズはシャウタコンボに変身をしてレクイムと交戦をしていた。

レクイムが放つ斧を彼はオーブカリバーで受け止めた。

「答えてもらおうか? 君達はどれくらいがロボットだということな!!」

「何を言っている我が首領レグリオスさま以下全員がロボットだ!!」

(なるほど彼らは知らないってことか……………だがこれ以上街で暴れるのを見過ごすわけにはいかない!!)

オーブカリバーではじかせて、彼はオースキャナーをスキャンさせる。

【スキヤニングチャージ!!】

「くらえ!!」

レクイムは斧をふるったがシャウタコンボの姿が消えてレクイムは辺りを見ていた。

「ぼ、馬鹿な!!センサーなどから消えることなど!!」

すると彼の両手にウナギウィップが巻きつけられてそのまま上空へと打ち上げられる。

「せいやああああああああ!!」

地面からオーズが現れて必殺技のオクトパニッシュャーが命中をしてレクイムは地面に叩きつけられる。

オーズは着地をしてほかのメンバーもロボットたちを撃破していた。

「ま、まさか……………この私が……………やられるなど!!レグリオスさまばんぎーーーーい!!」

レクイムは爆発をしてそこにはバラバラになったパーツなどが落

ちていた。プレラーティはダツシユをしてレクイムの残骸を見ていた。

「むむむむむむこれは素晴らしいワケダ!! 異世界の技術が込められているこれをすぐに持ち帰って調べないとな!!」

「あープレラーティったら昔の顔になつているわねー」

「あはははその通りだよ。変わらないさたとえ何百年経とうとも……な。」

「そうですねおじさま。」

「さあ戻るよ!!」

アダムたちはパーツを回収をして基地の方へ戻る。

一方で異世界

「ほうレクイムが敗れたと?」

「はは!!これがこちらの映像になります!!」

部下から映像を見てレクイムがやられる姿を見ていた。レグリオスは驚きながらもレクイムの最後を見た。

「そうか……ご苦労だったゆつくりと休むといい。」

「はは!!」

レグリオスに下がれと命じた部下はその場を去り後ろからコーナリアが現れる。

「まさか仮面ライダーがいるとは思ってもしなかったわね?」

「ああそれにあれはシンフォギアに出てきた女の子たちで間違いない。ふふふつててててロボットだけど痛い!!」

「……何か言いました?」

「いいえなんでもございませんでこれ以上は関節がばちばちといいますのでやめてください。」

(また夫婦喧嘩というものをなされているなレグリオスとコーナリアは、全くこれ知っているの俺やあいつぐらいだけだぞ? 元の人間の脳髓を使っているのは……)

「ようラグルター!!」

「ゲルギリオスかどうした?」

「何やっているんだと思つてな、ってあーそういうことか。」

「そういうことだ。」

「全くあいつらは体が変わろうともやることは一緒だからな。」

「だがそんな奴だからこそ俺達はついてきた。俺達元人間だった奴らもだいぶ減ってしまったからな。」

「だな、あいつらの作戦で元人間だったやつらはやられてしまったしな。残っているのは俺とお前、後はどれくらいいる？」

「いても幹部メンバーぐらいだろ？俺たち以外の後8人。」

「だいぶ減ってしまったな。」

「仕方があるまい、奴らの抵抗が思っていた以上になっているからな……」

「だな、しかしレグリオスもわざとあのデータを渡すなんてよ。」

「だな、あいつらは俺たちの弱点だと思っているがそれは違うもの、あれは俺達奴隷がこの体に移植手術をすることが書かれているのな。」

二人は話ながら部屋を後にした。

そういえば名前を聞いていなかったの巻。

「今思ったんだ……君の名前を聞いていなかった。」

「あ……」

基地へと戻ってきたアダムは彼女と話をするために病室へとやってきたが、名前を聞くのを忘れていた。彼女の方もそういえば名前を言っていなかったわと聞いていたのでお互いに自己紹介をすることにした。

「僕はここパヴァリア公明総社局長をしている、アダム・ヴァイスハウプトだよ。」

「私はシリカ……シリカ・ミナトです。」

「シリカちゃんか、いい名前だね。」

「ありがとうございます……父と母が付けてくれた名前です。」

「そのご両親は？」

「……父と母はなくなりました。ロボット軍団によって……」

アダムはこれ以上は聞かないことにした。レグリオス軍団が元が人が移植された人物だっことを教えていない。

一方でレグリオス軍団の方では幹部たちが集まっていた。

「それでレグリオスどうする気だ？」

「……異世界のほうに侵略をするつもりはない、だがここにいる我らは元が人間だったことを知ってもらいたいだけだからな……」

「もうこの体になってからどれくらいだったのか数えていないな……」

幹部の一人アマロイドは自身の両手を見ていた。機械の両手があり降りした。

「さてエアログス」

「なんだ？」

「今の状況はどういう感じだ？」

「は、今だに我らに逆らっておる場所がありますが……我が軍

団達が今にも落とすでしよう。」

「……そうか……」

「レグリオスまだ悩んでいるのか。」

「……まあな。確かに俺達はロボットになったときは復讐を考えたさ……今じゃ我々ロボット軍団はこの世界を支配をしてもおかしくないぐらいの兵力になってきた。そして彼女を追ったレリオスがやられたからな。」

「なに!？」

「仮面ライダーという奴にな。」

「仮面ライダーか……異世界に仮面ライダーがいるとは思ってもいなかったが……」

「それでそれでどうするの?」

「当面はこの世界で活動をしていく。異世界の方はほっておけばいいさ。何よりも彼らの世界には挨拶をさせてもらうだけだ。」

「挨拶ね……てかレリオスが暴れたせいでまずい状態じゃないの?」

「まあそうだな……はあ……」

レグリオスはため息をついていた。一方でアダムの方は新たなプログライズキーが完成をしていた。

「シャイニングホッパーキーとオーソライズバスター完成だ。」

アダムの手にはオーソライズバスターと新たなプログライズキーシャイニングホッパーキーを持っていた。

「ほかのプログライズキーもただいま開発をしているのでしばらくお待ちください。」

「了解した。」

アダムは開発者からほかのプログライズキーの開発を待ちながらもレグリオス軍団がこの世界へやってこないのが不思議に思った。

「ふむ……不思議だな。」

一方でレグリオスが座る玉座に戦士が一人いた。

「お願いがありますレグリオスさま。」

「どうしたアクルス。」

「私にレクリスの敵をとらせてください。」

「レクリスのか？」

「は!!」

「ふーむあまり侵略する気はなかったが今回はお前が敵をとるってことでいいのだな？」

「もちろんでございませす。レグリオスさまが異世界へ侵略をする気がないのは存じ上げております。ですがレクリスが倒されたと聞き友として敵を取りたいのです。」

「わかった。アクルスお前は今日で退団扱いとする。ありがとう……」

「はは!!」

アクルスはそのまま次元の方へと飛びシンフォギア世界へとやってきた。FISで反応が察知されてマリアたちが出動をする。

アクルスの襲来

F I Sは敵が現れたと聞いてマリアたちを出勤させた。現場に着をしたマリアたちはギアを纏いそれぞれのギアを構えてアクルスが暴れているのを見つけた。

「あれね!!」

マリアは接近をしてガングニールを槍でアクルスに攻撃をする。アクルスはマリアが放つ槍を腕で受け止めた。

「く!!」

「貴様らなどに用はない!!私は仮面ライダーを出せ!!」

「仮面ライダーですって!!」

マリアは槍で連続した突きを出す。アクルスは後ろへ下がりが背部からローターが現れて回転をして強力な竜巻を起こして四人を吹き飛ばした。

「二二きやああああああああ!!」

「出てこい仮面ライダー!!貴様がこなければこいつらを殺すぞ!!」

アクルスは右手に剣を発生させてマリアたちの方を歩いていく。マリアたちの後ろから赤い戦士が飛びあがり蹴りをいれる。

「おりやああああああ!!」

「ぐうううううう!!」

マイティキックをお見舞いさせてアダムが変身をしたクウガが着地をした。彼はマリアたちが無事なのを確認してから敵の方を向く。

「貴様か仮面ライダーは!!」

「そうだけど君は一体。」

「俺は貴様に倒されたレリオスの親友、名前はアクルスという。俺の目的は仮面ライダー、貴様を倒すことだ!!」

アグルスは左手に砲塔を発生させてクウガに向かって放った。

「超変身。」

ドラゴンフォームに変身をしてアグルスが放った砲撃を回避をして彼は長い棒を作ってドラゴンロッドに変化させてアクルスに攻撃

をする。

「甘いぞ仮面ライダー!!」

背中のローターを回転させて彼は強烈な竜巻を発生させて先ほどのマリアたちを吹き飛ばす攻撃をクウガに放ってきた。

「だったら!!」

彼はドラゴンフォームのまま何かの武器を出した、オーソライズバスターを出してフライングファルコンキーを出した。

「ウイング。」

そのままオーソライズバスターにセットをして構える。

【バスターダスト】

「は!!」

鳥型のエネルギーが発生をしてアクルスが放った竜巻を突破をしてアクルスを吹き飛ばした。

「どあ!!」

「今だ!!」

彼はそのまま走りだしてマイティフォームへと変身をしてそのままライジングマイティへと姿を変え右足にエネルギーをためてライジングマイティキックを放ちアクルスのボディに当たり吹き飛ばす。

「どああああああああ!!」

「.....」

ライジングマイティキックが命中をしてマリアたちは彼の傍に行くが、クウガは戦闘態勢を解除をせずに見ていた。

「ぐおおおお.....」

彼は立ちあがるが、胸部にクウガの紋章が発生しており彼自身の体も火花を散らしていた。

「こ、ここのまでか.....レリオスすまん、ぐあああああああああああああ!!」

爆発をして残骸がその場に残っており、彼は脳髓があるのかを見ていたが当たりには回路などが落ちており彼は完全なロボットなんだなど見ていた。

「おじさま.....めんなさい。」

アダムは突然マリアたちが謝ってきたので驚いていた、彼女達は別に悪いことをしているわけじゃないが落ち込んでいた。

「どうしたんだい？」

「自分たちが情けないデース……アダムおじさんが来ていなかったら私たちは負けていたデース。」

「……………」

アダムは自分がいなかったら勝てなかった自分たちが悔しいと思っているなど彼女たちの顔を見て察していた。だが自分が来る前に彼女達が来ていなかったらこの辺は壊されていた可能性がある。

「それは違うよマリアちゃんたち、君達が早く来ていなかったらこの街はあいつが壊していた可能性がある。だからこそ僕からお礼を言わせてほしい。街を守ってくれてありがとう。」

「おじさま……………」

アダムは上空の方を見ていた、彼らが発生をした時空の歪みをどうにかしないといけないなど……実はアダムはプレラーティに次元を超える船を作っておいてほしいとお願いをしていた。

プレラーティも最初は考えていたが、すぐに了承をしてイザークたちと共に開発を進めている。

「いずれにしても向こう側に行き何とかしないといけないね……………」

アダムはこのままではいけないと判断をしておりあちらの世界へ行かなければ解決ができないと……………」

次元………え？

アダム side

アクルスという敵を倒して数週間が立った、あれから敵の進行はな
くシリカちゃんもこっちの生活に慣れてきた。僕としてもこのまま
何事もないことを祈りたいけどいつ敵がくるのかわからない。

そこでプレラーティに移動をすることができる船を作ってもら
うようお願いをすると彼女は科学者としての血が燃えだしたのかす
ぐにとりかかっていた。

さすがのプレラーティも船を一から作るから時間が「待たせたな。」
え？もうできたの!?

「ふふ私をいやここのメンバーをなめないほしいワケダ。すでに完
成をして外に準備をしている。アダムも来るワケダ。」

とりあえずシリカちゃんと二人で首をかしげながらも僕はプレ
ラーティが外で待っているという言葉があつたので外へ行く、すでに
サンちゃんを始め全員が外にいたので僕は驚きながらもイザークさ
んと共に立っているプレラーティを見ていた。

「さて皆、私たちの後ろにあるのはアダムが依頼をされた船が完成を
したワケダ。」

「てか一週間も見なかったのはそういうのを作っていたのね?」

カリオストロが呆れながら言っているが、まあ彼女はふふふと笑い
ながら完成をした船をお披露目をするために隠していたのを外す。

「え?」

僕が見たものは青くて砲塔がついており開いたらシャトルがつい
ていそうな………ってこれは!?

「その名もメガシップなワケダ!!」

ですよねええええええ!!どうみても電磁戦隊メガレンジャー
に出てきたメガシップとメガシャトルだよね!?

「えっとプレラーティ、一つ聴きたいことがあるのだけど?」

「なんだアダム。」

「もしかしてまさかと思うのだけど、メガシップは合体をしたりする

「のかい?」

「ふつつつつその通りなワケダ、とりあえず全員離れてくれ。テイキ準備はいいワケダ?」

『はい準備完了です。』

テイキが乗っているのかい!!メガシップは空中に浮かびハッチがオープンする。

『電磁合体!!』

メガシヤトルが飛びだしてメガシップが変形を開始、腕や足へと変わり頭部にメガシヤトルが合体をして地面に降り立つ。

『完成!ギヤラクシーメガ!!』

「(”。 ㇿ) ポカーン」

サンちゃんを始め全員が口が開いていた、僕はまさか前世で見ていたギヤラクシーメガが目の前にあるのだから右手にメガサーベル、左手にメガシールドを装備されている。

「まあ今回はギヤラクシーメガだけしか完成をしていないが後3機作るつもりなワケダ。」

三機つてまさかデルタメガにメガボイジャー、メガウインガーを作るつもりなのかいプレラーティ……まあそれはそれで見てみたいけど……ギヤラクシーメガはじーつとこちらの方を見ている。つてあれ?

「テイキ今動かしているのかい?」

『いいえ何もしていませんけど。』

「そういえばギヤラクシーメガに超高性能のAIをとりつけていたワケダ。」

『………ワケダ?』

「(”しゃべったあああああああ!!」

『………シャベッタ?』

ギヤラクシーメガは困って首をかしげているが、なるほどAIが成長をしようとしているのか、そして二課とFISのみんなを呼んでギヤラクシーメガを見せることにした。

「(”すげえええええええええええええええええ!!」

響ちゃん、切歌ちゃん、イリスちゃんが目をキラキラしてギヤラクシーメガを見ていた。

『?』

「ギヤラクシーメガ、自己紹介をした方がいいよ?」

『ジコシヨウカイ?』

「そう僕はギヤラクシーメガですつて。」

『……ボクハギヤラクシーメガデス。ヨロシク。』

「えつと立花 響だよ!!よろしくねギヤラクシーメガ君!!」

「雪音 イリスだ。よろしくな。」

「暁 切歌デース!!」

『ヒビキ……イリス……キリカ……ナマエオ

ボエタ。』

「私は月読 調。」

「マリア・カデンツァヴナ・イヴよ。」

「セレナ・カデンツァヴナ・イヴです。」

「風鳴 翼だ。」

「雪音 クリスです。」

「あたしは天羽 奏だ。しかしアダムのおっさん、すごい作ったな

(笑)

「実際に作ったのはプレラーティだ。僕自身も驚いているよ。」

ギヤラクシーメガは自身の手に切歌、調、イリス、響を手に乗せて

立ちあがり彼女たちは街の景色を見ているようだ。数分後ギヤラク

シーメガはおろして座っていた。

『……』

ギヤラクシーメガは皆を見ながら変形をしてメガシツプになり着

地をした。

「とりあえずまずは……ギヤラクシーメガの技をインプットさ

せないと。」

「いや戦い方などは覚えさせているから大丈夫だ。後は言葉を覚えた

りするぐらいだな。」

「ちなみに三機の方も同じようにするのかい?」

「同じようにするワケだ。」

「まじか……」

僕はギャラクシーメガ以外にも作って同じようにするんだね。とりあえずメガシップの状態で僕たちは乗りこんで、次元を超えるための準備をする。

『……アダム。』

「なんだいギャラクシーメガ。」

『……ドコニ行くノ?』

「次元を超えるかな?」

『……次元?』

「そう僕たちがいる世界とは違う場所のことを言うんだ。」

『……ソナトコロガアルンダナ。』

「そういうこと。さーてギャラクシーメガ君の出番だよ。」

『頑張ル。』

ギャラクシーメガへと変形をして彼は立ちあがり次元を超える準備をして僕たちは行世界へ飛ぶために移動を開始する。

「とりあえずギャラクシーメガで移動をするよ。奴らの場所はここから異世界の場所だつて判明をしている。つまり僕たちはこれから異世界へと向かうことになる。だけどチフォージュ・シャトーを空けるわけにはいかない。まあチフォージュ・シャトーは閉じて置けば誰も侵入ができない構造にしているからいいけどさ。」

『イイノカ?』

「まあいいんだよ。問題は響ちゃんたちだよね。」

ノイズは出撃をしないけど学校とかあるからね……まあ響ちゃんや調ちゃん、切歌ちゃんは駄目だね、クリスちゃんとイリスちゃんも同じだ。

「ということはあたしたちだな。」

「アダムおじさん私たちも共に行きます。」

「わかった。とりあえず行くのは三日後にしよう。」

ワープをするアダムたち。

アダムたちの世界とは違う場所、ここは天界にある場所。

「ぜえ………ぜえ………」

「大丈夫かい？」

疲れ切っている男性の後ろを苦笑いしながら彼の背中をさする男がいた、背中をさする男は神エボルトこと如月 戦兎である。彼がここにやってきたのは宴会をするってことで呼ばれたのだ。

「全くゼウスじいとハーデスねえもひどいね………カズマくんを女装させたりしてまあ俺もまさかあそこまで女装が似合っているとは思ってもいなかったがくくく。」

戦兎は我慢をしていたが女装の姿を思いだして笑ってしまう。

「ひどいじゃねーか。」

「すまないすまない、さて話を戻すがカズマ君、君に依頼をしたい。」

「………依頼？」

「そうだ、神エボルトとして君に異世界へ飛んでもらうことになる。」

「どういうことですか？」

エボルトは右手を出して地球の映像がでてきた、長野にある遺跡が映し出された。

「遺跡？」

「そう、この遺跡から強大な闇が発生をしている。」

「闇？」

「そう世界を覆うほどのな、君にはこの世界へと飛んでもらいたい。」
「わかりました。すぐに向かいます。」

「まあ待て。セレナちゃんたちは連れて行けないからな。これは俺からのプレゼントだジャンパーソン、ジバン。」

エボルトが言うのと彼の後ろからロボットが現れる。

「ジャンパーソンフォージャステイス。」

「機動刑事ジバン!!」

「これは………」

「これから行く世界は君でも予想がつかないかもしれない、これは俺

からのプレゼントってことでもらってくれ。」

「よろしく頼むカズマ。」

「ああよろしく頼むジャンパーソンにジバン。」

エボルトは後ろに次元の扉を発生させてカズマたちは中へと突入をしてグランナスカの船たちも突入をした。

「さーて……誰だ!!」

エボルトは後ろを振り返りドリルクラッシュヤーガンモードを構えていたが姿が見えないので彼はあたりを見ていた。

すると突然デコピンされる。

「いて!!」

ボロボロのコートが揺らいでおりエボルトはまさかと思ったが、煉と同じような感じがしたがそれ以上の力だとすぐに判明をしてすぐに武器を収める。

「……君が煉が言っていたエボルトという奴か。」

「あんたは?」

「私は帝王と呼ばれるものだ。」

「帝王?」

だが次の瞬間エボルトの前にいたはずの彼がいなくなっていた。見ると次元の扉が開いており彼はその中へ入ったのかと……「……俺は次の場所へと行くでしょう。今回の敵は俺が想像をした以上の敵と判断させてもらった。」

エボルトはアダムの世界の闇を倒す為にほかの異世界の戦士たちの力を借りるため飛ぶ。

一方でアダムの世界ではメガシップにアダムたちは乗りこんでいた、クリスたちは残念そうにしていた。

「すまないね、君達は学校があるからね?」

「まあしようがないですけどね。」

『アダムさま、全員搭乗OKです。後はアダムさまだけです。』

「わかった。それじゃあ弦十郎君この世界を頼む。」

「ああわかった。」

「シリカちゃんもいいんだね?」

「ええ……」

実はシリカには敵の計画のことを話していた。そのため彼女は暗くなっていった。恨むべきロボットが実はかつては人だったことに……ならあそこには自分たちの父や母がいたのかと……だからこそ彼女はアダムたちと共に元の世界へ向かうことにした。

アダムが搭乗をしてメガシップは浮かび、開いている次元の穴に突入をして異世界の方へと飛んで行く。

「ほえええええええ……」

メイと香苗はメガシップの外を見ていた、次元の中を通っているのを目を光らせていた。彼女たちだけじゃない全員が驚愕をしていた。「これが異世界へと行く道なのですか？」

「おそらくね、ウヴァ達もどうだい？」

「驚いているぜ？」

「僕もだよ。」

「俺もすごい……」

「私もよ。」

「むしゃむしゃもぐもぐ。」

アंकは相変わらずアイスクリームを食べていた、メガシップの中には冷蔵庫なども完備されており食材などもこちらの方に運び込んでいる。今メガシップは自動操縦で動いており運転士などはいない。

そのため会議室に集まっていた。幹部とシンフォギア装者とシリカがほかのメンバーはメガシップで調整をしたりしてチェックをしている。

「さて次元を超えた先がシリカちゃんの故郷の場所だ。僕たちにとっても初めての異世界になるからね。」

「そうですね、そういうところがあるのかわかりませんかからね。」

『……データ転送。』

机の上にマップが送信されて全員が驚いている中プレラーティだけは笑っていた。

「こんなこともあるのかとギャラクシーメガに搭載をしておいてよかったワケだ。」

「いったい何を搭載させておいたのよ……」

「その場所をインプットさせる地図システムって奴なワケダ。ほらはつきりと映し出されているワケダ。」

「『本当だ……』」

アダムもプレラーティ……恐ろしい子と呟くほどだ。

「ふっふっふっふ科学者をなめるなワケダ。」

メガシツプは近くの場所に着地をして降りたつ。アダムも念のためすぐに変身ができるようにドライバーを装着できるようにしていた。

「メガシツプ今のところ敵反応は？」

『……ナイ。機械音ナドモ聞コエナイ。』

「了解した。」

辺りを確認をしてシリカが降りたつ。

「間違いありません……ここは私の故郷の近くです……」

「そうか……」

アダムは異世界へと降りたつたなど感じて街などがあるのを見つめるがボロボロの状態になっていた。

「あそこは元々ロボットのたちが占拠をしていた場所です。彼らの始まりの地ともいえる場所……」

「始まりの地……」

迫ってきた敵。

「さーて異世界へと到着。」

エボルトこと戦兎は異世界の扉を使いある場所へとやってきた。すでに連絡はついており彼は待っている。空から赤い船が降りてきた。

「おー来た来た。ゴーカイガレオン。」

ゴーカイガレオンが着地をすると一人の青年が出てきた。

「やあ久しぶり 武昭。」

「お前だったのか戦兎……………」

彼は緋紅 武昭 ゴーカイレッドに変身をする青年であり転生者である。彼の後ろから翼やクリス、奏が現れる。

「君に依頼を頼みたくてね異世界へとやってきた。」

「わざわざご苦労なことでそれで？」

「これを見てほしい。」

戦兎は右手に発生させたアダムの地球の遺跡を見せた。

「これは……………」

「大いなる闇が復活をしようとしている、彼一人では不利だからね……………そこで俺は次元を開いて君たちを送るさ。」

「あんたも来るのか？」

「ああほかの人物たちを送ってからね？」

「わかった。」

ゴーカイガレオンに搭乗をしたのを確認をして戦兎は大きな次元扉を作ってゴーカイガレオンが中へと入っていく。戦兎は次の場所へ行くこうとしたが……………灰色のカーテンが発生をして人物が現れた。

「あんたは確か門矢 零？」

「……………ここはビルドの世界か？」

「いや違うけど……………まあいいかあんたにも協力してほしい。」

「協力？」

「そうこことは違う世界で大いなる「なるほどだいたいわかった。祖

の闇を潰せばいいんだな?」まあいいけどさ。とりあえずあんたもこの次元の扉を通ってくれ。」

「わかった。」

門矢 零はその中を通っていき戦兎はなんか疲れてきていた。

「さーでこれで4人だな……後何人か声をかけるとするか。」

戦兎は再び次元の扉を開いて別の世界へと飛ぶ。

さて話はアダムの方に戻りメガシップから辺りを見ているアダムたち、敵がどういふところから出てくるのかわからないからだ。

「彼らの基地の場所はどこにいるのかわかりませんね。」

「ああ……いずれにしても彼らの場所を探さないといけないのは事実だね。メガシップに……」

突然としてメガシップから警報が鳴りだした。アダムたちは中へと入り確認をする。モニターが開いて相手の戦闘機タイプがこちらに向かってきていた。

「あれって敵なのですか?」

「おそらく……メガシップシールド展開。敵が攻撃してきた場合砲撃許可。」

『了解。』

アダムたちは様子を見てみると敵の戦闘機から攻撃が放たれた。ミサイルがメガシップのシールドに当たるがメガシップから砲撃が放たれて戦闘機が命中して爆発をする。

アダムたちはこれがレグリオス軍団の戦闘機なのかと考えているとアダムはどうするかと考えていた。

「よし。変身!!」

【タージャードルーラー】

オーズタジャードルコンボに変身をして外に飛び出す。戦闘機たちはオーズが現れて驚いている。彼は左手のタジャスピナーから炎の弾が放たれて戦闘機を撃破する。

メガシップからの援護射撃が放たれて戦闘機は墜落をしていく。アダムは一気にけりをつけるためにメダルをタジャスピナーにセットをする。

「タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！」
「せいやああああああああああああああああああ！！」

マグナブレイズが放たれて戦闘機たちを次々に撃墜されていき撤退をしていきアダムはメガシップに戻りオーズから変身を解除をする。

「ふーむ………」

「アダムさんどうしたのですか？」

「翼ちゃんか……いや敵の戦闘機達にはロボットタイプが乗っていたのを確認できた。タカヘッドを使ってみてみたがロボットの感じだったな………」

「ではあの戦闘機にはロボットタイプが乗っているということですか………」

「そういうことだね。いずれにしても彼らが僕らを敵と判断をして攻撃してきたってことだね………」

一方でレグリオス軍団の基地

「どうやら一部のロボットたちが敵と判断をして攻撃をしたみたいだな。」

「そのようだな………」

「仕方があるまい、メガシップが来ることになるとはだれも思ってもいない。(俺もだけど。)」

レグリオス達幹部はメガシップをモニターで見ている。そして現れたオーズタジャドルコンボの力を見て圧倒的だなと思いつつ、どうするかを考える。

「いずれにしても彼らと敵対をすることは俺達ロボット軍団の数が減ってしまうことになるぞ？」

「わかっている。だがらこそどうするかだな………」

さてさて場所が変わり次元の扉が開いてエボルトこと戦兎は異世界のシンフォギア世界へとやってきた。

「この辺だったな。いつもと違う並行世界だからな………」
「あーもう!!どうしてこうなるの!!変身!!」

「ラビットタンク！イエーイ！」

戦兎はビルドに変身をしてドリルクラツシャーを構えていると音が聞こえてきた。

「フライングインパクト！」

「でああああああああああああ!!」

「なんだ!？」

上空からゼロワンフライングファルコンがノイズに回転蹴りをお見舞いさせて爆発させる。

フ

ラ

イ

ン

グインパクト

「……あれがこの世界のシンフォギアと共に戦う仮面ライダーゼロワンか。」

「あれ？なんでビルドがここに？」

「なるほど君が飛電 雅人君か……」

「あんたはいつたい……」

「俺は仮面ライダービルドGOD、神エボルトともよばれている。」

「神エボルト!？」

「ここに来たのは君に協力してほしいから来た。」

「協力?」

「そうある世界にて強大なる闇が復活をしようとしている。俺一人ではその大なる闇を倒すには不利なんだ。そのため俺は異世界を飛び君たちのような戦士に協力してもらいたいと思ってきたんだ。」

「なるほど、わかりました協力します。」

「感謝をする。」

戦兎は次元の扉を使い彼を連れていきさてといいながら次の場所へと向かうのであった。

レグリオス軍団の謎

「よいしょって宇宙うううううううううう!？」

次元の扉を開いてエボルト戦戦兎は次の世界へとやってきた。ところがその場所は宇宙だったので彼は慌ててゴツドクロスドライブを装着をしてビルドに変身をした。

「あぶねえあぶねえ、って俺は神様だから宇宙でも大丈夫だったわ。とりあえずフルアーマービルドモードと。」

彼はフルアーマービルドモードになりそのまま宇宙を飛んで行く中船が見えてきたので彼はエボルトの力を使い侵入をすることにした。

「とりあえず体をスライム状にして中へ入るか……」

ビルドの体がスライム状になり浮いていた船の中へと侵入をした。彼はあたりを見ながら移動をしてどこかで見ることがあるような場所だなど思いつつスライム状で移動をしていると彼はどこかで休んで様子を見る。

「いったいどのような船だ？宇宙ステーションみたいな感じだったが……この世界は……」

「……」

戦兎は移動をしようとした時光弾が飛んできたので彼は回避をした。そこに立っていたのはジオウ・ブレイズだ。

「ジオウ……だがこんな奴は見たことがない。」

エボルトはすぐにスライム状を解除をして仮面ライダーエボルトに変身をした。

「エボルト……なぜこいつがここに？」

(さてどうする？こいつの力を試してみるかな?)

トランススチームガンを構えてトリガーを放ちジオウブレイズはジカンギレードを出してガードをした。彼はほうと言いながら接近をして蹴りを入れる。

「ぐ!!」

彼はほかのライドウォッチを使おうとしたがエボルトはジェット

ブーメランを放ち彼が使おうとしたウオッチを落として拾った。

「ルシファー？なぜ堕天使のウオッチが……」

「フィニッシュタイム！ジオウブレイズ！ギリギリスラッシュ！」

「ちい……」

「エレキスチール！」

エレキスチールを発動させてギリギリスラッシュと相殺をしたエボル、彼はふふふと笑い彼にウオッチを返す。

「合格だ、お前の力借りるとするかな？常磐 一兔。」

エボルは変身を解除をして戦兔の姿になる。

「お前は……如月 戦兔。」

「照井から話はきいているさ。仮面ライダーベリアルのデータを盗んだのはお前だな？」

「あいつ……」

「まあ今はそんなことを言っている場合じゃない、悪いがお前にも協力してもらおうぞ。」

「どういうことだ？」

説明中。

次元の扉を開いてジオウブレイズこと一兔は中へ入っていき戦兔は再び次元の扉を開いて別の世界へと飛ぶ。

レグリオス軍団の基地。

現在レグリオスは報告を受けていた、空中部隊が襲ったが敵の攻撃によって全滅をしたということ……

「そうか……苦労、まさか敵の砲撃を受けるとは思ってもいなかったがな……」

「は、その通りでございます!!レグリオスさま!!どうか進軍命令をください。必ずやあの謎の奴らを倒してごらんに入れます!!」

「……やってみるがいい。」

「はは!!では!!」

ロボットが立ち去った後コーナリアが後ろから現れる。

「あれに勝てるだけでもいいのかしら？」

「正直に言えば無理だろうな……モニターで見たがああ砲撃プ

ラスあの仮面ライダーオーズの技で空中部隊が壊滅をしたのは見ていた。だから奴らに勝てる確率は低い……」

「あらそれはロボットとしての計算をしたのかしら？」

「どちらもだ。いずれにしても見ていたらわかるさ。」

彼らはメガシップに注目をしてロボット軍団は展開されていた。メガシップの中ではアダムたちはロボットたちがこちらを包囲しようとしているのがわかっていた。

「ふむ……」

「これはロボットたちが多いワケだ。」

「おじさまどうしますか？」

「メガシップを着地させてギャラクシーメガに変形、僕たちは外でロボットたちと戦うよ。」

「了解なワケだ。」

メガシップは地上に降りてアダムたちは降りたつ。彼は今回はあの形態を使うことにした。

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

かつての怪物の姿を力に変えてファウストローブのようになった形態になりほかのみんなもファウストローブを纏ったりシンフォギアを纏ったりして構える。

ウヴァ達もグリード形態へと変わりロボットたちは突撃をしてきた。テイキは右手をライフルに変えてスコープを発動させてロボットの一体の頭部をターゲットにしてロックオンをして吹き飛ばす。

メガシップは電磁合体をしてギャラクシーメガに変形をした。

『変形をした!?!』

『構わん撃て撃て!!』

飛行部隊はギャラクシーメガに攻撃をするが左手にメガシールドを発生させて攻撃をガードをする。右手にメガサーベルを発動させて電撃の鞭、サーベル電磁ムチを発動させて飛行機部隊を次々に落とすしていく。

地上の方ではアダムが走って両肩部の剛腕をふるいロボットたちを吹き飛ばしていく。

『数はこちらが勝っているのだぞ!!押し返せ!!』

だが彼らも戦い続けてきた戦士たち、ロボットたちは押されていた。

「おらおらおら!!」

奏とマリアのダブルガングニールの槍がロボットたちの胴体を貫いていき、そこサンジェルマンが持つ銃剣から放たれる弾丸がえぐられた装甲に入り爆発させていく。

「さーて行くわよー」

カリオストロの指輪が光り光弾が連続して放たれる。

「くらうがいい!!」

けん玉を振り回してロボットたちを潰していき、アダムはなんでもけん玉があそこまで威力があるんだと毎回戦いながら思うのであった。「これで終わりだああああああああ!!」

キャロルは四属性を解放させてロボットたちを囲んで砲撃をして撃破する。アダムは両肩の剛腕にエネルギーをためていた。

「くらうがいい!!アダムーサンシャイン!!」

真ゲッターロボのストナーサンシャインのように大きな光球を作ってそれを投げつけて爆発させる。

空中部隊もギヤラクシーメガのメガサーベルで次々に落とされて行き全滅されていく。アダムはこれ以上はいいかと判断をしようとした時に砲撃が放たれた。彼は両肩の剛腕でガードをしようとした以上に威力があったので後ろに下がってしまうが攻撃は完全にふさいでいた。

「威力は考えていなかったからね。驚くばかりだよ。」

『ふん!!』

ガメルが放たれた砲撃の場所に行きそのロボットの頭部を握りしめて撃破した。ギヤラクシーメガはリーダーで確認をしていた。

『敵反応ナシ。』

「よくやってくれたね皆。いずれにしても僕たちの攻撃は彼らに届くってことがわかっただけでも結果オーライだよ。ギヤラクシーメガもご苦労さまありがとう。」

『氣ニシナイ。』

ギヤラクシーメガはメガシップに変形をしてアダムたちはその中に乗りこんで彼らは再び空の旅を続ける。

一方でレグリオス基地。

「………」

「も、申し訳ございません!!」

「言ったはずだ、こんなにも大敗をしてしかもあろうことかロボットの大半を破壊されるなど………」

レグリオスが立ちあがり、背中に装備しているメイスを抜いて失敗をしたロボットを叩き潰した。ロボットは一撃で破壊されてメモリチップなども破壊された。

「次は誰がこのようになりたい。判断で奴らと戦って死ぬのは結構だ。だがなこうやって全滅をしたのに我の前に立つてことは死を覚悟をしておけいな!!」

「……はは!!……」

メイスを肩に担いで彼はほかのロボットたちにいい、破壊された残骸を捨てて置けと指示をして玉座に座る。

そしてほかのロボットたちは恐怖になりながらも出ていく。幹部メンバーたちは苦笑いをしながら……

「おいおいやり過ぎだろうが?」

「こうでもしないと勝手な行動をする輩がいるからな……。それにあやつはロボットぐ弾を率いて大敗、そしてその結果が我らの兵力を減らしたことになる。だからこそ奴を処刑をしないとイケないのだ。」

彼はメイスをおいて玉座に再び座った。

一方でエボルト事戦兎は再び世界を飛び着地をした。彼は後ろを振り返ると黒いマントを羽織った人物が立っていた。

「やはりいたか。」

「久しぶりだな戦兎。」

「あんたもな、晃人……。またを名を仮面ライダーエターナル。忙しいところだが悪いが来てもらいたい世界があつてな。」

「ほう……わかった。」

「何も言わないがいいのだな？」

「構わない。俺がやることは変わらない。」

「エターナル。」

「変身。」

彼はロストドライバーにエターナルメモリをセットを変身をする。そしてエボルトが出した次元の扉に入っていく。

「カメンライド クライム。」

もう一人の戦士もその中に入っていくのを戦兎は一瞬だけ見えた。

「あいつは……さてもう一つ世界を飛びますか!!」

戦兎は再び次元の扉を開いて飛ぶ。

レグリオス基地を探せ。

戦兔は次元の扉を開いて集結をした戦士たちを見ていた。先ほど次元の扉でユージオという青年がいた世界へ到着をして彼の協力を得て彼らは次元空間にいた。

「戦兔、なんでこんなところに留まっているんだ？」

一兔は戦兔に聞いてきた、彼は冷静に答えを言う。

「簡単だ、今回行く世界は俺達が行ったことがない世界だからだ。なにせ俺自身もその世界へ行くのは初めてなんだ。そのためこの空間は連絡通路みたいなものだ。ここから君たちの世界へ行くことができるとだ。」

「なるほどだいたいわかった。つまりお前はここからその世界へ行くための道を作るってことか？」

「ああその為にここに戦士たちを集めているわけ。」

戦兔はそういいながら作業を進めていた、その世界へ行くための場所なども今探しているのだ。

「しばらくかかりそうだ。どうも君達に見せた世界は異なっているみたいだ……」

そういつて戦兔は作業に集中をするために無言でしていた。ほかの戦士たちは彼の様子を見ていた。

「戦兔が俺たちを呼ぶってことはかなりの悪が発生をするってことか？」

「わかりません。それにしても皆さんはほかの世界の人たちなんですよね？」

「ああそうだな。」

つと自分たちの世界の話をしたりしていた。

さて場所が変わりメガシップは空中からレグリオス基地を探していた。奏は妹の香奈と話をしていた。

「香奈はここで勉強とか教えてもらっているのか？」

「うん、助けてもらってからアダムおじさんたちに教えてもらっていいんだよ？色々興味深いことばかりで楽しいよ!!」

「そうか……でも生きていて本当に良かった。父さんや母さんは死んでしまったけどあんたが生きていてくれただけでも本当に……」

「お姉ちゃん……私もあの時死んだと思った。でもそこにアダムおじさんが現れてノイズを切り裂いたの……私はおじさんがかつこいい人に見えたの……それでおじさんたちに保護されてお世話になっていたの。皆優しい人で夜になって寂しい思いをした私におじさんは抱きしめて一緒に寝てくれたりサンジェルマンたちも一緒に寝てくれたりすることもあったの。」

「そうだったんだな。」

姉妹の様子をアダムは見ていた、彼は前世で残してきた妹のことを思いだした。今の香奈のような感じだったのを思いだしていた。

(といってももう会えないけどね……妻や子どもたち……父さんや母さん、そして妹にも……)

「アダムさんどうしたのですか？」

「いや奏ちゃんや香奈ちゃんを見ていて妹とかがいて幸せだなとね……僕は作られた存在だから妹なんてものは存在をしない……だから姉妹っていいなと思うんだ。」

「アダムさん……」

「なんてねごめんね翼ちゃん。さーて彼らの基地を探すとしますか。」

メガシップのレーダーを使って探しているがどうやらレーダーでは発見できないように細工をしており彼らは苦労をしていた。

「ふむいったい奴らはどこにいるワケダ……しかもかなり見つからないようにしているってことは高度な科学力を奴らは持っているワケダ……くっくっくっく絶対に見つけてその技術を教えてもらおうワケダ。」

「なんかプレラーティが黒い笑みをしているわー。」

「そういえばプレラーティは科学者だったからな……奴らの科学力に地を燃やしているわね……」

プレラーティとカリオストロの二人はプレラーティが燃えているのを呆れながら見ていた。おそらく幹部の中でアダムに続いて長い

のはこの三人であろう。

「おじさま、言ったイン着地をした方がよろしいのでは？」

「そうだね、メガシップ着地をしてくれ。」

『了解。』

メガシップは着地をしてアダムたちは地上に降りた。錬金術師たちなどを残して幹部の数人は残して彼らは地上から探索をするために万能戦車に乗りこんだ。

「これこそ私が作った万能戦車その名もバリタンクなワケダ!!」

（あーもうプレラーティに戦隊もの見せるんじゃないやなかったかもしれないな……）

そうプレラーティがギャラクシーメガやバリタンクを作るようになったのはアダムが見ていたブルーレイの戦隊ヒーローや仮面ライダー、ウルトラマンなどの見て彼女の科学としての血が燃え上がり今に至る。

彼らはバリタンクに乗りこんで地上から敵の基地を探す。バリタンクのアームを起動させて邪魔な岩を砕いていき進んでいく。

「しかしまあこんなものまでよー開発ができたな。」

「僕もこれに関しては知らなかったんだけどね。いつのまに作っていたのか……」

アダム自体もバリタンクの存在を知らなかったのでプレラーティはニヤリと笑ってサプライズと言った。

バリタンクを停止させてアダムたちは降りてみていた。彼はペガサスフォームに変身をして視力などが上がっているためそれで見ると

「うーん……ペガサスフォームで見えるかなって……あれは!!」

彼は前方に発進をする戦闘機が見えた。場所が特定をした彼らはバリタンクに乗りこんでメガシップの方へと戻ることにした。

レグリオス基地に突撃。

アダム side

僕たちは彼らの本拠地と思われる場所を見つけることができた、ペガサスフォームで見た戦闘機が着艦をするのを見て僕たちはメガシップで集めた地図マップで見っていた。まさかこんなところに彼らの基地を見つけることができるとは思ってもしなかったよ。

「まさかこんなところに敵の基地がこんなところにあるなんて思ってもいませんでした。」

「局長どうしますか？」

「うむ、攻めるにしても僕が見つけた場所だからね……それに地下にある可能性があるね。」

全員でどうやって攻めようか考えていると手をあげる人物がいた。

「セレナちゃん？」

「あ、あのバリタンクで地下から攻めるってのはどうでしょうか？」

「プレラーティ。」

「可能だ。バリタンクのバリハンドを回転させればドリルのように地下を進むことができるワケだ。」

「ならやることは決まったね。バリタンクに搭乗をして地下から彼らの基地を攻めるっでいいかな？」

「あ、あの!!」

「シリカちゃん？」

「私も連れていってください。もしかしたらまだ父や母がいるかもしれません。」

「………わかりました。僕たちが守って見せましょう。」

となるとバリタンクは最大で6人までしか乗ることができない。ならメンバーは決まっている。

「翼ちゃん、マリアちゃん、奏ちゃん、セレナちゃんで行く。それと僕も共にいくさ。ほかのみんなは外で奴らを陽動してほしいいいね？」

メガシップからバリタンクが降りて僕たちはバリタンクに乗りこ

んでいき準備を進める。

メガシップが浮いて彼らの基地に砲撃が開始される。敵の基地もメガシップに砲撃をしているが電磁シールドでガードしているのを見てバリタンクを起動させてバリハンドを起動させてドリルのように回転をして地下へと入っていく。

「すげーなこれ……」

「ああ僕も驚いている。さて。」

僕はオーズドライバーを装着をして変身をする。

「変身!!」

「クワガタ!トラ!バッタ!」

ガタトラバに変身をしてバリタンクを操縦をして敵の地下基地に突入をした。

アダムside終了

一方でレグリオスたちはメガシップに攻撃をしていたが突然として揺れたので何事だと言うとロボットが入ってきた。

「大変ですレグリオスさま。」

「どうした?」

「敵が地下から攻めて来ました。」

「ほう……外のは囷ということか面白いことをする。直ちに地下に侵入をした敵を撃退をしろ。」

「は!!」

レグリオスは指示を出して苦笑いをしていた。

「まさか幹部たちがいない時を狙ってくるとはな……なるほど着艦をした戦闘機を見てここがばれたということか……面白い。」

そうレグリオスは幹部たちに残っている人間たちを倒すように指示を出していた。ただし子供などは保護をするようにと指示を出しながらである。

彼はコーナリアに声をかけた。

「お前は脱出をしろ。」

「何を言っているのおそらくですけど私たちの娘が来ているのでしょ

？」

「……………だがそれは。」

「それにあの子ども知りたいじゃないの？ 私たちが生きていることをね。」

「……………」

レグリオスは後ろからメイス及び太刀を出して背部に装着をしてロボットたちがいる場所へと向かう。一方でアダムたちは襲い掛かるロボットたちに攻撃をしていた。

「せや!!」

ガタゴリバに変身をしてゴリバゴーンで襲い掛かるとロボットを殴っていた。翼はアダムから借りたアタツシユカリバーを使って攻撃をしていた。

「これ使いやすいかも。」

彼女は一旦アタツシユモードにしてチャージをする。

【チャージライズ！フルチャージ！カバンストラツシユ！】

「でああああああああ!!」

再びブレードモードにして青い斬撃刃が飛びロボットを撃破した。

「これアダムおじさまにもらおうかしら？（あげません。）」

マリアと奏は槍でロボットを刺していた。セレナが短剣でそのまま追撃をして撃破していきシリカはバリタンクの中にいた。

オーズはメダルを変えて変身をする。

【サイーゴリラ！ゾウ！サゴーズ!!】

サゴーズコンボに変身をしてドラミングをして重力を操りロボットたちを浮かせてから地面に叩きつける。

すると突然メイスが飛んできてオーズが命中をして吹き飛ばされた。

「アダムおじさま!!」

「誰!!」

全員が武器を構えているとロボットが一人歩いてきた。アダムは起き上がり敵を見る。

「あれは……………」

「さすが仮面ライダーってところだな。この基地を攻めてきただけは褒めておこう。」

「お前は……」

「俺はレグリオス、我が軍団レグリオス軍団の長とでも言うておく。」

「お前が……レグリオス。」

「そのとおりだ俺がレグリオスだ。」

お互いに武器を構えておりサゴーズコンボの姿でオーブカリバーを構えていた。レグリオスは背部から太刀を抜いて構える。

アダム対レグリオス

アダムが変身をしたオーズサゴーズコンボはオーブカリバーを振り下ろす。レグリオスは持っている太刀でオーブカリバーを受け止めた。

彼はそのまま後ろに下がりオーブカリバーのエレメントを回転させて水のエレメントを発動させる。

「アイスカリバー!!」

地面を突き刺して氷がレグリオスに向かって放たれる。彼は脚部のスラスターを展開させて上空へとジャンプをしてアイスカリバーを回避する。オーズはメダルを変えて別の形態へと変身をする。

「ライオン！トラ！チーター！ラタラターラトラター！」

ラトラーターコンボに変身をしてトラクローを展開、素早い動きでレグリオスに切りかかろうとしたが彼の両目が光りだしてオーズのトラクローを回避をした。

「何!？」

彼は地面にクローを立てて急ブレーキをかけて再び切りかかるが彼は持っている太刀でオーズのボディを切りつけて彼は地面を滑る。

「がは!!」

「おじさま!!」

「野郎よくもアダムを!!」

奏たちは向かおうとしたがレグリオスの指示に従っているロボットたちが邪魔をする。アダムは起き上がりメダルをチェンジをする。

「シャチー！ウナギ！タコー！シャシャシャウター！シャシャシャウター！」

シャウタコンボに変身をしてウナギウィップを使ってレグリオスに攻撃を加える。彼は持っている太刀ではじかせていきタコレッグを使った蹴りをお見舞いさせる。

「ほうやるじゃないか……さすが仮面ライダーとだけ言っておく。」

「それはどうも……だがどうするんだい？君のところは幹部たちははいない感じだが？「きやああああああああ!!」なんだ

!？」

オーズは振り返るとバリタンクが開いて一人の女性がシリカを捕まえていた。

「シリカちゃん!!」

「動かない方がいいわよ仮面ライダー。」

「ど、どうして……お母さんと同じ姿をしているの……」

「よせコーナリア、その子を離してやれ。」

「え……」

シリカはレグリオスが言った言葉に驚いた。今なんて呼んだか自身の母親の名前をレグリオスが呼んだからだ。全員が動きを止めていた。翼たちはロボットたちを切り裂いて辺りにロボットがいないうことに気づいた。

コーナリアはシリカを離すとメイスを拾ってレグリオスに投げる。彼は投げつけられたメイスを受け取り背中に収納をする。

オーズの方もシャウタコンボのまま立っていた。ほかのメンバーも武器を持ちながらも彼らの方を見ていた。

シリカは混乱をしていた、なんでレグリオスが母親の姿をした人物に母と同じ名前を言ったのかが。

「ふふ混乱をしているわねシリカ。」

「え?」

「私はあなたの母、コーナリアで会っているからよ。」

「お、お母さん……」

「これはいつたい……まさか!!レグリオス君は!!」

「……そう俺の本当の名前はアイオス。」

「アイ……オス……」

シリカはさらに混乱をする、アイオスという名前は自身の父親の名前だからだ。だからこそ信じられないのだ……自身らが対抗をしている敵が自分の父親と葉は親だつてことに……

「嘘よ……嘘よ嘘よ嘘よ嘘よ!!お父さんとお母さんはロボットに殺されたのになんで!!」

「…………それは違うぞシリカ、俺達は殺されたのは身勝手な王国のせいだからな……………」

「王国!？」

「どういうことか説明をしてくれるかい？」

「わかっている。その為に今中にいるロボットたちの機能は停止をさせている。君たちの仲間も呼ぶといい……………すべてを話すときが来たようだな。」

レグリオスが歩いていくのを見てアダムたちも彼らの後ろをついていく。外では突然機械たちが機能停止をしたのでギャラクシーメガは驚いている。

『相手の機械機能停止ヲ確認。』

「これはいったい……………おじさま？」

『みんな悪いが中へ入ってもらえるかい？レグリオスと話をすることになった。』

「わかりました。」

通信を切りサンジェルマンたちも中へと入っていきレグリオスが座っている玉座の部屋に到着をする。

「……………さてどこから話をすべきかな？」

「ねえ本当に私のお父さんとお母さんなの？」

「そうだ……………あの日お前の目の前で奴らに連れ去られたのは覚えてるかい？」

「忘れもしない、私がどれだけ叫んでも離してくれなかった……………そして父さんと母さんが死んだって知らせも……………」

「そう、確かに私たちは人間としては死んだのよ。私たちの体は特殊な合金で作られた体に作り替えられた。私の方はまだ人間のような姿をしているいわば戦闘機人ト言った方がいいわね。でもアイオスは違った。」

彼の体はまるで機械の体になっており全員が見ていると彼の両目が光りだす。

「俺自身を改造したのは王国が計画をしていたロボットシリーズの初期、つまり俺が基本的な姿をしていた。そうあいつらはその計画の

ために俺とコーナリアを連れて改造をしたんだ。俺自身はこのような体になつてしまい人として残っているのはもう何も無い。」

「……………そんな……………」

「そしてそのあと俺たちのような奴らを連れてきては改造をして今のレグリオス軍団の幹部たちが完成をした。これが人を改造をした私たちの末路だ。家族などには死んだことにされ私たちはここで労働のような働きをさせられていた。そして私はマスターシステムと呼ばれる装置でもある。ロボットを機能停止させたりとすることが可能となつているわけだ。聞くのは完全なロボットである彼らだけが機能停止をさせることが可能だ。」

「……………ならもしかして……………私たちは王様に騙されていた!?あの優しい人が……………」

「あいつはそういう男だ、裏ではこういうのに手を出しているということだ。今頃奴は王国でのんびりをしているはずだ。俺達が反乱を起こしたことを隠すかのようにな。」

「なるほど……………」

「アダムどうする気だ?」

「なら簡単じゃないか、その張本人を叩き潰せばいいだけだよ。まさかそんなことをしているなんて思ってもいなかったからね。」

「シリカ……………」

「……………」

「お前には本当の意味でつらい思いをさせてしまったな。」

「ごめんなさい。あなたを巻き込んでしまつて……………」

「お父さん……………お母さん……………」

「いいね家族は……………」

「そうですねおじさま。」

「……………あのサンちゃん?」

「なんですか?」

「当たっているのだが?」

「当たっているのですよ?」

「……………」

アダムは右手に彼女の豊満な胸が当たっているが彼女は技と当てている、そのため彼女の胸がアダムの右手でむにゅむにゅと当たっていると左手にもむちゅんと大きなものが当たっていた。

「あらあらアダムさま私のことも忘れないでほしいですわ。」

「レヴェリア君……」

左側にはレヴェリアがサンジェルマンにも負けないぐらいの胸で彼の左手に抱き付いていた。

サンジェルマンは面白くないのか彼女を睨んでいた。

「レヴェリア、おじさまが困っているだろ？ 離れたらどうだ。」

「あらあらサンジェルマンこそ離れたらどうですか？ あなただけがアダムおじさまに助けてもらったわけじゃないのですよ!!」

お互いに火花を散らしながらアダムの前でやっているの彼は苦笑いをしていた。両手が動けないのでこれをどうしたらいいのかと悩んでいるとレグリオスたちが見ていた。

「あっちはあっちで大変だな。」

「そうねー彼優しそうだしねシリカ負けているわよ?」

「ふえ!? お、お母さん!」

シリカはコーナリアが突然として言ってきたので顔を真っ赤にしていた。レグリオスも娘が嫁に行ってしまうのか!? 俺はどうしたらいいんだ!! とロボットの体で悩んでいると幹部たちが戻ってきた。

「えっとこれは俺達お邪魔だったかな?」

「みたいだな。俺たち以外のロボットたちがこの基地に戻ってから機能が停止をしていたから何かと思っただが……. ということか…….」

ほかの奴らも基地へ戻ってきて幹部たちが来ていたのでアダムたちは驚いている。

「お帰りお前らもよくやったな。」

「まあなほかのところは子どもたちを実験をしようとしていたからな……. 全く厄介なことだぜ。」

「お、お父さんどういうことですか?」

「シリカ……. 王国はな最初は大人を使っていた、だが戦争など

で大人を失った子どもたちを王国はどう使うと思う?」

「まさか!!改造!?!」

「そのとおりよシリカ、私たちのように今度は少年兵でも作る気じゃない?」

「.....そんな!!」

「そうだ各地域に散らばせたのはそういう子どもたちを保護するためさ。幹部たちは俺と同様元は人間だった者たちだ。」

「アグルスとかは違うのか?」

「あいつは元から機械兵だ。元人間たちはある作戦でほとんどが死んでしまったよ。」

「ある作戦?」

「そうだ、俺達機械兵たちを使った戦争だよ。あいつらにとっては遊びだと思っているけど俺たちにとっては生き地獄さ。戦って戦い続けるサバイバルみたいなものさ。」

レグリオスは呆れながら両手をあげていたが自分たちにとっては厄介なことだといいい空を見ていた。

「さてアダム・ヴァイスハウプト殿、作戦会議と行こうじゃないか?俺たちにとって最後の戦いのな。」

「ええいいでしょう。愚かな彼らに罰を与えないとね。というわけで翼ちゃんたちは待機を待っていてね。」

「え?」

「これから行うことは僕たちパヴァリア公明総社がする裏の仕事でもあるんだよ。」

「し、しかしサンジェルマンさんたちは。」

「私たちは人を殺したことがあるわよ。」

「そうねー昔から悪い奴らを倒してきたからね。」

「だから今更気にすることはないワケダ。」

「おいまさか香苗たちにもそれを!?!」

「いや香苗ちゃんたちにはさせていないよ。ジャンヌちゃんは僕についてきてやったことがあるけど。」

「ジャンヌ.....」

「マリア、これは私が決めたこと……あの時から私はおじさまのためになら人を殺すつて……守るために戦うから。」

「……ジャンヌは強いわね。」

「強くないよ……私はアダムおじさまは私たち以上に生きている。だからあの人は強いんだよ。」

(アダム……)

「リク大丈夫……さ。僕はアダム・ヴァイスハウプトだからね。レグリオス作戦会議を開こうじゃないか。」

「ああ始めるとしようか？」

襲撃をする王国。

ここはこの世界のかい王国ではパーティーが行われていた。大半な計画をしていた人物たちはここに集められており王さまに近づいてきた。

「いーっひっひっひっひ王様王様、子どもたちを改造をしての少年兵部隊はどうでしょうか?」

「ふふふ貴様も悪い奴だの。子どもを使った実験をしたと言ったときは驚いたがまあいいだろう……。どうせ親を亡くした奴らなど役に立たないゴミども……。なら貴様が何をして誰も文句を言うやつはおるまい。」

「へっへっへっへその通りですわい。」

「あっはっはっはっはっは!!」

二人が笑っているとき突然爆発が起こった。お酒などを飲んでいる人たちは余興かなと思っていると兵士が入ってきた。

「大変でございます!!」

「なんだ!!今はパーティーをしているのだぞ!!」

「ロボットたちの反乱でございます!!」

「はあ?」

王さまは兵士たちの言葉に驚いている中、兵士たちはロボット兵たちに攻撃をしようとしていたがそこに銃弾が放たれて兵士たちは倒れていく。

「遅いわよっ」

サンジェルマンがファウストローブを纏い銃剣の剣で兵士を切つていきそこにカリオストロが着地をして拳からビームを放ち次々に兵士たちを貫いていく。

「あらーごめんなさーい。」

「はああああああああああ!!」

ジャンヌは槍で突き刺してカテリアが二刀流で兵士の首を切っていく。

「ふ……………」

「うおおおおおおお!!サンダークラッシュ!!」

地面に斧を叩きつけて兵士たちを感電させてレヴェリアが銃を持ちふふふと笑いながら兵士たちを撃つていき倒していきアグルは両手に水の弾を作つてそれを放ちプレラーティがけん玉で叩き潰す。

一方でアダムはクウガに変身をしていた。現在はタイタンフォームに変身をしてタイタンソードを二刀流で作り兵士たちを次々に切つていきタイタンソードは血だらけになっていた。

「.....超変身。」

彼はペガサスフォームに変身をして遠くで狙撃をしようとしている人物を見つけてペガサスボウガンを放ち射殺。さらに連続して攻撃が来たがドラゴンフォームへと変身をしてドラゴンロッドでガードをして弾をはじいていく。

レグリオスは持っているメイスで兵士を叩き潰していた。幹部たちもそれぞれの武器を持ち攻撃をしていた。

「進め!!」

「!!うおおおおおおお!!」

ロボットたちの勢いが止まらずアंक達もその中におり敵を次々に切つていく。アダムはクウガからオーズに変身をしてプトティラコンボへと変身。地面を叩いてメダガブリューを出してセルメダルをセットをする。

【ゴックン・プットティラーのヒツサーツ!】

斧モードの必殺技を発動させて兵士たちを切つていき彼は倒れている兵士たちを見ていた。

「アダム殿ギヤラクシーメガは?」

「念のためにシリカちゃんたちを乗せて待機をしている。」

「.....そうか。」

レグリオスはそのままメイスを持ち突撃をしていき彼も一緒に突撃をする。一方で王間の方は全員が慌てていた。兵士たちの叫び声などがここまで届いているからだ。王さまの方はいったい誰がこの国に攻めてきたのかと考えていると扉が爆発をした。中へレグリオスやアダムたちが入ってきた。

「な、何だ貴様!!」

「ほーう王様よ俺のこと忘れてしまったか? かつてあんたに仕えていたアサシスをよ。」

「「「な!!」」」

オーズに変身をしたアダムはその様子を見てみるとほかのロボットたちも入ってきて目を見開いていた。

「ば、馬鹿な!! お前たちはあの爆発で粉々になったはずだ!!」

「確かに俺達は貴様の考えた作戦で爆発で多くの奴らは死んだ。だが俺達は生き延びて貴様たちに復讐をするためにレグリオス軍団を作ったわけ、そして今お前たちに殺された仲間たちの恨みをここで晴らす!!」

「おのれ!!」

王さまは兵士たちを呼びだして彼らを倒せと言ったがオーズが前に立ちテイラノのしっぽをだして兵士たちを叩きつけて吹き飛ばす。王さまの方は顔が真っ青になっていた。ほかのパーティーに参加をしていた人物たちはすでにロボットたちによって捕まっている。

オーズは彼に近づいていき挨拶をする。

「始めまして王様、僕の名前はアダム・ヴァイスハウプトと申します。」
「き、貴様がロボットたちを!？」

「いいえこれは彼らの意思でやっていることです。私たちは彼らの手伝いをさせてもらっているのですよ。あなた方がやろうとしている子どもたち改造計画の方は残念ながら僕たちが阻止させてもらいましたから。」

「な!!」

「まああなた方が何もしようとしないので勝手に攻めさせてもらいました。まあ僕がやるのはあなたに対して何もしませんってことですよ。やるのは彼ですから。」

彼が後ろへ下がるとレグリオスがずしんと歩いてきた。彼はもっているメイスを構えている。

「や、やめろ!! 私を殺したって何も!!」

「ああ確かに、だがな貴様のせいで俺達は娘につらい思いをさせて

「あ、はい。」

アダムとレグリオス

アダムside

なんか久々に話をする気がするね？僕たちはレグリオス達と協力をして王国を破壊した。そして全世界に自分たちがかつては人だったことやロボット計画の話をする。先導された人々がほかの王たちにテロ活動を始めたという。

まあ当たり前だ。自分たちも同じようにされるなんてごめんだとな……それから現在僕たちはレグリオス達と共に帰るためにプレラーティを始めの技術者たちが開発を行っていた。

メガシツプはぶーと文句をたれていた。当たり前だな……自分たちよりも重い人たちを乗せるなんて御免だと……「すこしいいか？」

「レグリオスどうしたんだい？」

「なーに暇そうなお前を見つけたからな、少しだけ話をしようと思つてな……」

「いいだろう。」

彼と移動をしてどこかに座って彼もよいしょつといい座っていた。現在彼は武器を装備をしていない状態だ。

「さて何を話しをするんだい？」

「なーに昔の王国に仕えていた男の話だ。」

アダムside終了

レグリオスside

さてまず俺がアサシスという名前の男性だつてのはこの間の王国の戦いで知ったな？

「ああそうだったね。」

俺はそこで使える前の王の部下でもあった。だが前の王はある日に殺された……それが誰かわかるか？

「まさか今の王かい？」

さすがアダムそのとおりだ、奴は前の王が邪魔だから……そうすれば次の王は自分になれるって考えたのだろう……奴

はあいつの弟だからな……

「なるほど、それで奴は殺して王へとなりどうしたんだい？」

奴はひそかに進めていた計画を王となったことで実行に移した。それがロボット兵団計画だ。そしてその一号に選ばれたのが俺たちだ。

「お前たち？」

そう俺を含めて100人ぐらいいたな……。もちろん俺達は反対を起こした、だが俺たちの抵抗むなく改造手術を受けられてこの姿になってしまった。

俺が最初の一号機つてことでつけられた名前がレグリオスだった。それから100人のロボット兵団は完成をしていきさらに奴はほかのところからも大人を無理やり連れてきてロボット兵団を作つていった。

そしていつの間にか奴らによって改造をされていたロボット兵団たち、俺たちは地下で労働の作業を続けていた。かつての人間のように疲れたりしないため本当に俺達は機械になってしまったんだなと感じたよ……。残してきた家族のこともあったが……。ある日のことだった。

奴らは女性にまで手を出すようになった。そう改造をな。その中には俺の奥さんのコーナリアの姿もあった。

そして奴らによって女性たちは戦闘機人と呼ばれる存在になった。俺たちと違い子供を産めるようにな……。そしてそのあとに起こった戦いで俺たちのようなロボット兵たちは奴らの罠でやられてしまった。

だが残っていたのは俺以外だと8人ぐらいだ。戦闘機人だった女性たちは戦いには参加をせずいたので無事だ。

そして俺たちはある日決意をした。奴らに復讐をすると……。そして俺は奴らを殺してからこの基地を奪取をしてレグリオス軍団を結成させた。

「なるほどな……。そんなことがあったのか……」

そうだ、俺達はロボット兵を作つて今の兵力として作つてきた。そ

してこの間シリカが時空を超えてお前たちの世界へと行ったのに気づいてアクルスを向かわせたということだ。

「なるほど」一致をしたよ、そして僕たちがアクルスたちを倒したのを見てこちらにやってくると思いきい攻撃をしてきたってことかい？僕たちを試すために……」

そのとおりだ。何度もお前たちを攻撃したのは奴らに対抗をするための兵力を試したかったからな……まあ結果がこうなったからこちらとしては助かったさ。

「気にすることは無い、僕たちはこういう仕事もやっていたことがあったからね。」

なるほど……だからあれほど人に対して情け無用で戦っていたのはそういう理由か……お前が改めて敵としてじゃなくて良かったと自分は思っている。お前と戦うためにリミッターを外さないといけないからな……それくらいお前をあいてにしないってことだよ。

「あははははそんなわけないだろう？」

あるから言っているんだよ。お前さんは自分の力を確信をした方がいいぞ？

「……そういうわけじゃないのだが……それで僕たちと協力をして今に至ると……」

そういうことだ、だからこそ感謝をしている……君達がいなかったら俺達は娘に本当の意味で再会をすることができなかつた……感謝をする。

「気にすることは無いさ。それに僕たちも異世界を知ることでもできたからね、それに君達はこれからは家族だからね？」

「家族……か……」

機械の体になってからシリカに対して申し訳ないと思っている。あの子には私たちがいなくなつてからの生活が大変だっただろうなとどれだけ思っていたか……今はそんなことは関係ない。もうこれからはずっと一緒だ。そういえばコーナリアとシリカがひそひそと話しているが一体何をしているんだ？

レグリオス side 終了

レグリオスがアダムと話をしている中、シリカは母親であるコーナリアと話していた。

「……………」

「どうしたの？」

「いやお母さんがすごく若く見えるなって思って……………確か今つて40代だよな?」

「もう数えるのはやめていたわ……………この体になってからは……………」
「お母さんはお父さんが機械の体になったの知ったのはどれくらい?」

「すぐにわかったわ……………挨拶をした際に彼だけは私の方を見ずに下を向いていたの……………おそらく私たちに対して申し訳ないという思いでいっぱいだったのよ。」

「……………そうだったんだ……………」

「私も最初は信じられなかったわ……………自分の夫が機械の体にされてきたなんて……………私は一部などが改造をされている感じね……………でもパーツなどは交換をしないとダメだからね。」

「なるほどー」

「それであなたはアダムさんを狙っているのかしら?」

「ぶふうふうふうふうふうふう!!」

突然の母親のカミングアウトにシリカは飲んでいたコーヒーを吹いてしまう。

「げほげほ!!いきなりなんで!?!」

「あなたが最近見ているのってアダムさんじゃないかなって思ってた……………」

「……………そうかも。」

「お母さんの強敵なのはサンジェルマンにテキキちゃんかしら?」

「その二人?」

「そうねーほかのみんなも彼のこと好きそうだけど一番はこの二人じゃないかしら?」

「なるほど……………」

メモをする娘を見てこれは本気だなと思いつつ苦笑いをする母親であった。一方でアダムはレグリオスと別れて疲れていた体を休めるためにお風呂に向かおうとしていた。

「マスター………」

「ティキ………どうかな？これから僕はお風呂に向かうけど」

「ぜひ一緒に入らせてください。」

ティキと共にアダムはお風呂の方へと入る。

ティキside

「………」

私はマスターであるアダムさまの体を見ていた、彼の体は作られた存在だと知っていたが今は鍛えているのかムキムキなのはわかりません。私はマスターのことが好きです。作られて共に行こうと言われたとき私はこの人についていくと決めていた。

それからサンジェルマンさんたちや色んな人物が増えていこうと私のマスターへの思いは変わっていない、長い年月を経ているけど本当にアダムさまは色んな人ヲ助けてきた。

ある時は倒れている人を見かけて治療医師をしたり殺されかけている人物を助けて仲間にしたたりしているのが多い。パヴァリア公明総社のほとんどがアダムさまに助けてもらった人物が多い……マスターのためなら皆は命を捨てる覚悟と言ったときのマスターの顔は悲しい顔をしていた。

あれは今も覚えている。

回想

「どうかな？」

「ありがとうございますアダムさま!!このレイジ、アダム殿のためなら命を「それは駄目だ!!」アダム殿？」

「………僕が一番に恐れているのは家族が死ぬことだ、だから命を捨てろって言うのはやめてくれ………」

「アダム殿………」

そしてアダムさまは全員を集めた。

「皆集まってもらったありがとう………君達は僕のためなら命を

捨てる覚悟はあるのかい？」

「もちろんです!!」

「アダムさまのためなら!!」

「・・・・・・・・それはやめてほしい・・・・・・・・」

「「「え?」」」

「僕が一番に怖いのは君達を失うことだ、目の前で失ってしまう命が怖いんだ・・・・・・・・僕のために働いてくれるのはありがたい・・・・・・・・でも僕が言いたいのは僕たちは家族だ。だから家族が死に行くのを見たくない。だからみんなもその言葉を言うのだけはやめてくれ以上だ。」

アダムさまは本当にお優しい方だ。だからこそ私はこの方のためなら戦うと決意を新たに固めた。

そして今はアダムさまとお風呂に入るために服を脱ぐ、アダムさまはこちらをちらちらと見ているがやはり男の人ですね・・・・・・・・私の大きな胸を見ているので彼ははつとなり自分の服を脱ぎます。

もうあなたなら私は捧げてもいいのですよ? 処女をあなたに捧げるなんて決まっていますから・・・・・・・・ですがそろそろ私も我慢が限界です。

私だって女の子です。まあ100年以上は生きていますけど・・・・・・・・とりあえずマスターがお風呂に入ったら計画を発動させましょう。

ティキside終了

そしてアダムはティキと一緒に入ったが突然ティキがカギをした。

「え?」

突然ティキがカギをしたことに驚いていたが、彼女は素早くマットを用意してそのまま彼を押し倒した。

「て・・・・・・・・ティキ?」

「・・・・・・・・マスター、私はもう我慢ができません・・・・・・・・私はあなたのことが好きです。」

「・・・・・・・・」

「だから私を抱いてくれませんか?」

「ティキ……けど僕は……」

「あなたが人じゃないから愛せないわけじゃないでしょ？」

「……」

「マスターはいつもそうです。どうして一人で抱えようとしているのですか？ 私はそれを見ているのがとてもつらいです……マスターは何があっても一人で解決をしようとしています。私たちはそれほどに頼りがないのですか？」

「そんなことはないよティキたちは本当にいて助かっていることはある。」

「……マスター。」

ティキはそのまま彼の唇にキスをする。さらに舌を出して彼の口の中に侵入をしていく。

それから数十分ほどしてティキは離す。

「ふふふマスターもそのような顔をするのですね？ 私の胸が当たって顔が真っ赤ですよ？」

「……」

彼はティキをそのままひっくり返して上になった。

「……いいのかいティキ？ 今なら引き返せるよ？」

「私はマスターのもので、だから私の体を堪能してください。そしてあなたの私の中に入れてください。」

R18シーン

次元戦艦完成

次の日となり食堂へやってきたアダムとティキ。サンジェルマンたちはじーつとティキの方を見ていた。

彼女はつやつやした顔でいるからだ。そしてアダムの方はげっそりとしているので彼女の方を見るとふふと笑っていたのを見て確信をした。

(ティキさんのあの顔まさか!!アダムおじさまとやったの!?)

(まさかティキさんに越されるなんて・・・)

(ずるいですよティキさん!!私だってアダムさまのほしかったのに!!)

幹部の女性たちはティキを睨んでいた。彼女はふふふと笑っているだけなのでアダムはそれが宣戦布告だつてのが見えていない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は机に倒れたまま動こうとしない。

「これは青春かな?」

「ふふ懐かしいわね・・・・・・・・」

レグリオスとコーラサナはアダムの様子を見て昨日は楽しみなかと思いつつ彼女たちの様子を見てみると食堂の扉が勢いよく開かれた。

「出来たワケダつて・・・・・・・・なんか空気がすごいことになっているワケダ・・・・・・・・」

そこに現れたのはプレラーティだった、彼女は食堂の空気がいつもと違うことに驚きながらもアダムのところへとやってきた。

「アダム寝ているところ悪いが起きてもらうワケダ。」

「・・・・・・・・ああプレラーティじゃないか・・・・・・・・どうしたんだい?」

「それはこちらの台詞なワケダ。まあ一応なんとなく察したが・・・・・・・・えっと次元戦艦が完成をしたことを報告をしに来たワケダ。」

「そうか完成をしたんだね?」

「そういうことだ。とりあえず起きてくれないか?」

「あ、ああすまない。」

彼は立ちあがろうとしたがバランスを崩してしまいかけたが素早くサンジェルマンとカテリアが両手を支えてくれたので彼は倒れることはなかった。

「大丈夫ですかおじさま?」

「アダムさま大丈夫?」

「ありがとう二人とももう大丈夫だよ。」

「いえいえこのままお供をさせてもらいますわ。」

「そうそう。」

二人は彼を引きずりながらプレラーティが完成をさせたという次元戦艦の場所へとやってきた。

「全員きたわけだ!! 私たちはずいに第二のロボットもついに出来上がったワケダ!!」

「二「おおおおおおおおおおおおおお!!」二」

「スゴイ盛り上がりだね・・・」

アダムはそう呟きながらプレラーティは話し続けてまずは第二のロボットを紹介をする。

「ギヤラクシーメガをサポートをするために作ったデルタメガなわけだ!!」

隣に立つギヤラクシーメガが布を引つ張り現れたのはデルタメガだ。両手にはガトリングブラスターを装備されている機体でギヤラクシーメガと合体をすればスーパーギヤラクシーメガへと合体ができる。

『これが俺の兄弟機?』

『そうだデルタメガはお前の弟になる。』

『俺の弟・・・』

『ふあああああ・・・あれ?ここはどこだい?』

『始めましてデルタメガ、僕はアダムだよ。』

『アダム・・・隣にいるのは僕の兄さんかい?』

『ギヤラクシーメガだ。よろしくな。』

『はい兄さん。』

お互いにロボット同士握手をしてプレラーティは二機に戦艦の布をとるように指示を出す。

『いくぞデルタメガ。』

『はい兄さん。』

『せーの!!』

二人が引つ張り新たな次元戦艦が登場をした。アダム自身は苦笑いをしていた。なにせそこにあつたのは……

「名付けてミネルバなワケダ!!」

(ですよねええええええええええ!!)

そうアダムは前世の記憶で見たことがある戦艦だなど思い見ているが、ガンダムシードデステイニーの戦艦のミネルバだ。

武装なども再現されており前部には陽電子砲が搭載されていた。レグリオス達の技術がなかったら絶対に作れないなと思ったがギヤラクシーメガを作っているのでプレラーティならやりそうだなとアダムは思った。

「これを使って元の世界へと帰るワケダ。すでに準備は完了をしているワケダ。」

「わかったそれじゃあ皆帰ろう!!僕たちの世界へと!!」

「!!」

「!!」

「やっと帰れるか。」

「あれ?アंकは楽しくなかったの?」

「アイスが食えないからな!!」

「あんたはアイス脳なのかしら?」

「まあアイスは上手いからな。」

「ガメルもアイス大好き!!」

ウヴァとガメルはアंकから進められてアイスを食べたが二人もはまっているので帰ってからのアイスを楽しみにしている。

だが日本の長野にある遺跡。

「……ふふふふふ。」

白い服をした女性が笑っていた。

「やつとやつと会えるんだね。彼に……そう僕を倒したあのクウガにあはははははははは!!」

「ン・ダグバ・ゼバ様。」

「んーんーなんだい？ゴ・ガドル・バ？」

「お願いがあります。奴とは私に戦わせてください。」

「んーんーいよーんーほかのみんなも戦いたみたいだけど？」

そう彼女以外に復活をしたのはゴ集団のみなのである。ほかの集団はまだ復活をしていない。

「まあいいかーんー楽しみだなーんーあはははははははは!!」

彼女は笑いながら再び戦えることに喜びを感じた。

復活の闇

アダム side

次元戦艦ミネルバはメガシップ及びデルタシャトルと共に空間を通り僕たちがいる世界へと帰ってきた。ミネルバは近くのチフオージユ・シャトーに着地をして翼ちゃんたちは報告をするために二課へと戻っていく。

『アダム!!』

リク? どうしたんだい?

『ああすまない、何か嫌な予感がするんだ。』

嫌な予感? それってどういう...!!

「なんだこの闇の気配は...いや僕は知っている!？」

そうこの感じは日本がまだ古代時代の時に感じた力と同じだ...僕はすぐに転移をして長野の遺跡に到着をした。サンちゃんたちを置いてきたのは今回ばかりは嫌な予感しかしない。

『アダム...』

「ああこの感じ...あの闇との最終決戦時と同じ感じがする。」

僕はあたりを歩いていると突然何か降ってきた。僕は回避をするとかかが落ちていた。

「これは...」

地面に刺さっている矢を拾うと僕はアークルを出現させて変身をする。

「変身!!」

クウガに変身をして何かが地面をえぐる、鉄球のようなものを振り回す敵がいた。

「あれは...」

『グロンギ!? そんなバカな...僕たちが倒したのに何で!!』

「クウガ...またお前と戦える。」

まさか相手はゴ集団か...厄介な相手だ。僕でも苦戦をする敵で武器を使い戦う相手だ。

特に最後付近で戦った三体は自身の体をその能力に応じた姿に変

えて戦う敵だったのを覚えている。

「ちい!!」

さらに鞭などが放たれて回避をすると地面が凍っていくのを見てみると僕を囲むようにゴ集団がいた。そして真ん中にカブトムシのグロンギが立っていた。

「お前は……クウガだが俺が戦ったクウガじゃない、思いだした……メダルを使って戦った敵だな?」

「そのとおりだよ。僕は君達と戦ったメダルの戦士の方だよ。」

まさかこいつらが復活をしているとは思ってもいなかったけどならこの強大な闇はいつたいなんだ!?

すると白い服をした女性がふふふと笑いながら現れたけどなんだこの闇は!?

「へえーまさか君がクウガになるなんて思ってもいなかったよ、あははははははは!!」

「お前は!!」

「僕?んー……ダクバ・ゼバだよー」

「なん……だと……」

『ン・ダグバ・ゼバ……かつて僕とアダムが苦戦をして倒した相手……』

僕たちの目の前に現れた人物はかつて僕とリクが戦い倒したグロンギ達の王とも言える人物、ン・ダグバ・ゼバだった。

だが変だ、封印をせずに倒したはずなのになんで彼らは蘇っている?
?

「ふっふっふ闇は永遠だよ?君達が僕たちを倒してからどれくらいたっていると思ってるの?ふっふっふ。」

彼女は笑いながら言うので不気味に思っていたすると彼女は右手をつきだしてこちらに放ってきた。

「ぐあ!!」

突然放たれた衝撃波が放たれて僕は壁にめり込んでしまう。

「なんて威力をしている……」

『僕たちが以前戦ったときよりも強くなっている!?!』

放たれた衝撃波を受けて僕は膝をついてしまうほどの威力だった。あいつは完全に復活をしているのだろうか？それもわからない状態だ。

「さーてどうする？君一人で僕たち相手に戦えるの？」
「……………」

辺りからゴ集団が動いて僕に襲い掛かろうとした時砲撃が放たれて僕は何事かと空を見ていると赤い船がこちらにやってきて砲撃をしていた。さらに別の次元戦艦でいいのかな？ってあれはグランナスカ!?ゴークイガレオンにグランナスカがどうしてここに!?

「なんだいあれは?」
すると上から人物たちが降りてきて着地をした。

「ようやく別の世界とつながることができた・・・時間がかかっちゃまったな。大丈夫かい?」

「君は仮面ライダービルド?」

「ビルドはビルドでもビルドGODって呼んでくれてもいいぜ?」
「ビルドGOD?」

神のビルドってことかな?僕は考えているとゴ集団が襲い掛かってきた。

ユージオとスピルバンが走って青薔薇の剣とツインブレードで攻撃をしてダメージを与えたところにジャンパーソンとクリス、ジバンが攻撃をして一体を吹き飛ばす。

ゴークイレットと翼、奏の三人がゴ・バベル・ダに攻撃をして彼のメリケンサックを攻撃をしてゴークイガンで攻撃をする。

ゴ・ベミウ・ギがはなつ鞭をエターナルはローブでガードをして銃モードにしたジカンギレードを構えるジオウブレイズが放ってダメージを与える。

さらにエターナルがマントを取りユニコーンメモリを発動させる。
【ユニコーンマキシマムドライブ!】

「はああああああ!!」
「ぐお!!」

ダークデイケイドとゼロワンはゴ・ガメゴ・レの振り回すハンマー

をかわしてブラストとアタッシュュショットガンを放ちダメージを与える。

クライムがファイナルアタックカードを装填する。

「ファイナルアタックライド　ククククライム」

放たれた砲撃がゴ・ジイノ・ダに命中をして爆発をする。ゴ・バター・バは愛用のバイクに搭乗をして動こうとしたが動けない。

「無駄だ、お前の時間は私が止めた。」

メルクリウスは剣を持ちそのまま連続してゴ・バター・バを切りつけていき彼は指を鳴らすと彼は爆発をした。

ン・ダグバ・ゼバはフーンと見ていると上空からビルドがボールテイクフィニッシュを発動させて蹴りを入れようとしていたが彼は衝撃波を放ちビルドGODを吹き飛ばした。

「ぐ!!」

「まあいいかこれ以上は減ったら困るからね撤退をするわよ。」

それを聞いてゴ集団は撤退を開始をして僕は何とか立ちあがり彼らにお礼を言う。

「ありがとう……君たちがいなかったら僕はやられていたよ……」

「気にすることは無い、ただ俺達の到着が遅れてしまったからな……悪いが君の基地に案内をしてくれないか？そこで詳しく話がしたい。」

「わかったよ。」

僕は彼らを連れて帰ろうとした時に転移石が発動を感じて現れたのはテキキたちだ。

「マスター!!」

「おじさま大丈夫ですか!!」

「ちよつとね、彼らに助けてもらったから平気だよ……」

彼らを連れて僕たちは基地へ戻ることにした。

会合

アダムは復活をしたン・ダクバ・ゼバとの戦いで苦戦をしていたところ現れた謎の戦士たち、彼らを連れて移動戦艦ミネルバが着地をしている場所へと戻ってきた。

「まあ座ってくれ、改めて僕はアダム・ヴァイスハウプト……このパヴァリア公明総社の局長をしている。先ほどは助けてくれてありがとう。」

「気にすることは無い、さて俺達を紹介しようかな？初めまして俺の名前は如月 戦兎……またの名を神エボルトという。」

「神エボルト……そのような方に助けてもらったんですね。感謝をします。」

「気にすることは無い。俺はいや俺達はこの世界で起ころうとしていることを止めるためにこの世界へとやってきたんです。」

「はあ……もしかしてグロンギたちのことですか？」

「それもそうですが……とりあえず自己紹介をした方がいいでしょう？まあまずは彼から自己紹介をしてもらいましょうか？」

『初めまして私の名前はカズマといいます。スピルバン及びシンクレッターに変身が可能ですね。』

「ちなみに彼は私の部下みたいな感じですが仮面についてはいろいろとありましてね？」

「はあ……」

「僕はユージオといいます。」

「神崎 龍だ。」

「常磐 一兎だ。ジオウ・ブレイズに変身をする。」

「緋紅 武昭だ。ゴーガイレッドに変身をする。」

「まあこの世界でもあたしがいるかもな、天羽 奏だ。」

「風鳴 翼です。」

「雪音 クリスだ。」

「飛電 雅人です。ゼロワンに変身をします。」

「僕もゼロワンになることができるんだよ？」

アダムはゼロワンドライバーを出してからすぐにしまう。

「俺は大道 晃人だ。」

「通りすがりの仮面ライダーだ覚えておけ。」

「後は一人いたはずだけどどこにいった？」

帝王ことメルクリウスがいないのである。戦兎は頭を抑えながら煉の友達はどうなっているんだよとも思いつつこの世界へ改めてやってきたい理由を話すことにした。

「俺は神として色んな世界を見してきました。この世界の遺跡でなぞの大いなる闇の力を感じたんです。だが俺一人ではあれを抑えるのは不利と判断をして色んな世界に行き彼らに協力をしてもらったんです。」

「なるほど、ン・ダクバ・ゼバたちは謎の闇で復活をしたってことですか？」

「そういうことになります。」

『神エボルトさま、あのあなたが言っていた闇とはいったい？』

カズマが言うが戦兎はうーんと答えを渋っていた。

「なんだよ戦兎、まだ正体とかわかっていないのかよ。」

「残念ながらお前の言う通りだ一兎……俺自身もまだ確信を得ていなかったから答えを出すわけにはいかなかったんだ。」

「といたしますと戦兎さんは何かを感じていたのですか？」

「そのとおりだよユージオ君。だがこの大いなる闇はン・ダクバ・ゼバ以上の敵とってくれていい……そして俺はン・ダクバ・ゼバ以外にもそこから二つほど大きな闇を感じた。」

「闇をか？」

「そうだ。武昭やユージオ君の世界で言うところだな……ネフシユタンの鎧と言った方がいいだろな。」

「」「ネフシユタンの鎧!」「」

「そういえば雅人くんもシンフォギア世界だったね。」

「はい、まさか戦兎さんが感じた力つてのは聖遺物の力つてことですか？」

「ああいずれにしても俺自身も今回の目的はこの闇をはらすことが目

的でもある。この闇はいずれ別世界をも包み込む可能性があるからだ。」

戦兎の言葉に全員が驚いている。龍と零もその話を聞きながら見ている。

「とりあえず君達の協力を感謝をします。部屋はたくさんあるので案内をさせますね？ティキ。」

「はいマスター。では皆さまこちらになりますのでついてきてください。」

(ティキ……確か幼い容姿のはずだったが？なぜギンガ・ナカジマの姿をしている？)

戦兎は前世の記憶のティキと自身が見ているティキが違うのに驚きながらも案内をしてもらって部屋に到着をする。

戦兎と同じ部屋なのはカズマである。

『戦兎さん、どうしたのですか？』

「ああカズマ君、君も前世の記憶をもっている人物ならシンフォギアことは知っているね？」

『はい、確かティキの容姿は……小さい子のような感じでしたが……』

「そう俺が知っているティキと彼女の容姿が違い過ぎる。だから驚くばかりなんだよ……おそらく彼は僕らと同じだろうね？ここまで来るのに見てきたが彼女達は彼を信用をしている。」

『信用ですか？』

「そのとおりだ。カズマ君……念のためにダイレオンをいつでも使えるようにしておいてほしい。」

『ダイレオンのほうですか？』

「そうだ、巨大戦とかがある可能性がある。」

『わかりました。念のために準備などをおきます。』

「すまないな。君だって本来は……だがあれを使ってしまった以上俺でも許しを得ることができなかった。」

『気にしておりませんよエボルトさま、感謝をします。』

「本来だったら俺がする仕事を君に任せてしまっている。俺

は………」

『エボルトさま………』

ほかのメンバーたちも武昭が奏たちと、ユージオ、零、雅人、一鬼の部屋、龍とメリクリウスの部屋と別れていた。

一方でン・ダクバ・ゼバは無事だったゴ集団を見ていた。

「あらら二人やられたんだ。」

「はは、突然として現れたやつらによって仲間が二人やられました。」

「困ったねー」

「なら私たちに協力をしてくれますか？」

「だーれ？」

そこに現れたのはネフシユタンの鎧を纏ったフィーネの姿だ。

「君は誰？」

「私の名前はフィーネ、あなたに協力をするために参りました。」

「僕のかい？」

「貴様………ただの人間ではないな？」

「ふふあなたたち同様闇によつて蘇つたものとだけ言っておくわ。」

フィーネはふふと笑いながら後ろにいる黒い化け物を触っていた。

『ぐおおおおおおおお………』

「そいつは？」

「こいつの名前はネフィリム、かつて私たちはある人物たちのよつて倒されたものよ。そこを大いなる闇が復活をさせた。」

「「大いなる闇」」

ゴ集団はン・ダクバ・ゼバを見ていた。

「僕じゃないよ？復活させたのだから君たちだって僕がやられたのを知っているでしょうが、地獄で麻雀をしてゴ・ガメボ・レが負けたところで復活をしたのだから後で払ってね？」

「え、今ですか………お金地獄に置き忘れたんですか？」

「むーじやあ、ゴ・ジャラジ・ダでいいや。」

「いやいやなんで僕!？」

「………」

ン・ダクバ・ゼバはゴ・ガドル・バを見ていた。

「ン・ダグバ・ゼバさまなぜ私を見ているのですか？」

「お金ちようだい？」

「……はい？」

「お・か・ね（笑）」

「……お金ですか？」

ちらっとほかのメンバーを見ているが全員が顔を背けたのでこの野郎と思うゴ・ガドル・バであった。

一方でアダムは中にいるリクと話をしていた。

「リクどう思う？」

『そうだね、あのン・ダクバ・ゼバは女性になっているが僕たちが戦ったやつで間違いないね。アダムもそれはわかっているでしょ？』

「ああゴ集団は僕たちが力合わせてなんとか倒せる相手だったからね。」

『そう一体一体が強力な力で今まで戦ってきたメ集団やズ集団よりも強かった、奴ら自身が僕と同じく変身をするには驚いたけどね？』

「ああ僕もそれは思ったよ。」

『そうだから彼らと協力をして戦えばなんとか戦えるけど問題はそこじゃないね？』

「ああ誰が彼らを蘇らせたかだ。」

二人の疑問はそこである。かつてアダムとリクは彼らを倒した。二人で放ったダブルライダーキックでン・ダクバ・ゼバのベルトを破壊をして爆散させた。だから奴らが蘇ることはないと判断したが彼らは復活をした。

「まだ彼らだけなら僕たちで対処はできるが、ズ集団とかが蘇っていたら大変なことになっていたね。」

『ああアダム。』

「わかっている彼らと協力をするさ。」

彼はそういつてふうと座りゴ集団にン・ダクバ・ゼバか……と呟くのであった。

ネフィリムとゴ・ガメゴ・レ

アダムは局長室の椅子に座りながら、かつて戦った大いなる闇ことン・ダクバ・ゼバのことを思いだす。

突然としてリクがいた村を襲撃をして、村人達が次々に殺されて行きリクは怒りでアルティメットフォームに変身をして彼に攻撃をする。だが怒りでの変身は彼の冷静さなどを失わせていた。

アダムはオーズに変身をして彼を止めようとしたが今度は自分に攻撃をしてきたのを止めるために戦ったりしてリクの意識を取り戻して二人でン・ダクバ・ゼバと猛烈な戦いをしたことを……..
「……………また始まろうとしているのか……………あいつとの戦いが……………」

『アダム……………』

彼は考えていると警報が鳴りだした。アダムは立ちあがり一体何があつたのかとモニターを見ると街でネフィリムが暴れているのを見て驚いている。

「ネフィリム!?なぜあれが……………」

彼は考えても仕方がないと他の人達も一緒に連れて行く。戦兎は今回はビルドじゃなくてももう一つの姿に変身することにした。それに合わせてカズマも変身をする。

「ブラスアツプ!!」

「実装!!」

「ジャンセクター!!」

「シンクレッター!!」

他のメンバーもクライム、ゴーカイレッド、ジオウブレイズ、ゼロワン、エターナルに変身をして現場に到着をしてアダムは改めてネフィリムを見る。

「やはりネフィリム……………だけどあいつは僕が倒したはずなのに……………」

「いずれにも考えている場合じゃないみたいだな……………」

「そうですね。ジバン！ジャンパーソン！行くぞ!!」

「了解した」

「わかった!!」

ネフィリムは咆哮をしてこちらに気づいて襲い掛かってきた。アダムはクウガに変身をして回避をする。

クライムはクライムドライバーを持ちトリガーを引きネフィリムにダメージを与える。

「おりゃああああああああ!!」

「はああああああああ!!」

「おら!!」

奏、翼、ゴークイレッドは剣などで攻撃をしてネフィリムにダメージを与える。エターナルはローブを投げつけてネフィリムは顔にローブが絡まり見えなくなる。そこにユージオが走ってホリゾンタルを発動させて水平切りで切りつける。

ジオウブレイズとゼロワンはダブルで飛びあがり蹴りを噛ませる。

「いくぞカズマ君!!」

「はい!!」

「トルネードバースト!!」

ダブルで放ったトルネードバーストがネフィリムに当たりネフィリムは吹き飛ばされる。

「止めは任せるよアダム君!!」

「はああああああああああああああああ!!」

クウガは走り飛びあがりマイティキックをお見舞いさせようとしたが突然鉄球が彼に命中をする。

「がは!!」

「アダムさん!!」

現れたのはゴ集団の一人ゴ・ガメゴ・レである。彼は鉄球を振り回して戦士達に襲い掛かる。

「この野郎!!」

クリスがガトリングを放つが彼はそれを胴体で受け、彼女の弾が命中をするが効いている様子がない。

「嘘だろ!」

ゴ・ガメゴ・レは鉄球を振り回してゴークイレットに振り回す。

「ゴークイチェンジ！」

【ジュウレンジャー！】

ティラノレンジャーに変身をして龍撃剣で彼の鉄球をはじかせる。ネフィリムが起き上がりゴ・ガメゴ・レはクウガの方へと突撃をする。

「まずい!!」

「おらああああああ!!」

上空からミサイルなどが放たれてアダムの世界の装者達が集結をする。

「大丈夫ですか!!」

「おじさま!!」

「ああありがとう……」

クウガは意識を取り戻して前の方を見る。ネフィリムの方は戦兎たちが抑えているので彼はゴ・ガメゴ・レの方を見る。

「お前の相手は僕だ!!」

「勝負……」

クウガは彼女達に下がっているように言い構えてゴ・ガメゴ・レに追撃をする。一方でネフィリムの方も攻撃をしているジャンゼクター達……

「なんて硬さをしている……」

戦兎はいくらネフィリムでもこれだけの攻撃を受けてダメージを受けているはずなのにピンピンをしているのは何かがあると判断をする。

「だったらこれだ!!ゴークイチェンジ！」

【メーガレンジャー！】

「ドリルスナイパーカスタム！」

メガレットに変身をしたゴークイレットがドリルスナイパーカスタムを放つ。だがネフィリムはそれを剛腕ではじかせた。

「何?」

「アールジーコ!!」

「OK!!」

変形をしてジャンディックを装着をしてジックキャノン形態へと変える。

「ファイアー！」

「ジックキャノン!!」

ジャンゼクターが放つジックキャノンがネフィリムに命中をしてネフィリムは爆散をする。

「うご!?!」

「今だ!!」

ゴ・カメゴ・レが隙をついたのでクウガはライジングマイティへと変身をして彼を持ちあげる。

「!!」

「ウルトラハリケーン!!」

そのまま投げ飛ばして彼を上空に飛ばしたのを確認をして彼も飛びあがりライジングマイティキックをお見舞いさせて爆散させる。

(ふうまさかウルトラハリケーンを使うことになるとは……………でもどうしてネフィリムが?)

アダムはクウガから変身を解除をした後考える。

戦鬼 side

俺は今天界を経由をして美菜子達に連絡をしている。

『そうそつちの世界でそんなことが?』

「ああ引き続いて俺はこの世界に滞在をして今回の事件を解決をするつもりだ」

『わかったわ。レグリオス無事でいて』

「ああ」

俺は通信を切り一緒の部屋にいるカズマ君を見ている。

「えつと、エボルトさま?」

「……………俺も仮面でもつけようかな? 予告する!! 的な……………」

「え、ええ……………(たまにボケたこと言うよな、この人は……………」

「……………」

まあどうでもいいけどさ……………さて奴等を復活させた闇は一体何だろうか? この世界で起ころうとしているのは……………

戦兔side終了

「ガメゴ負けたんだ」

ン・ダクバ・ゼバは持っているのはネフィリムの心臓でドクンと動いている。彼女はふふと笑いながら次のゲームはどうするのかな？と考えている。